

朝来郡和田山町所在

向山古墳群  
市条寺古墳群  
一乗寺経塚  
矢別遺跡

—県立北部農業技術センター整備に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999年3月

兵庫県教育委員会



1. 遠景 (南東から)



2. 向山1~9号墳 (北東から)



1. 向山2号墳第2主体部（南東から）



2. 向山2号墳第2主体部棺内（北西から）



1. 向山5号墳第1主体部（南西から）



2. 向山11号墳第2主体部（北から）



1. 一乗寺経塚封石検出状況（北から）



2. 一乗寺1～3号経塚検出状況（北から）



1. 向山2号墳第2主体部出土鏡



2. 一乘寺2号経塚出土経筒



1. 古墳出土勾玉・有孔円盤



2. 古墳出土白玉



1. 古墳時代の土器



2. 中世の土器

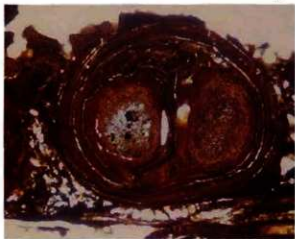




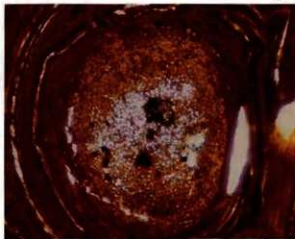
1



2



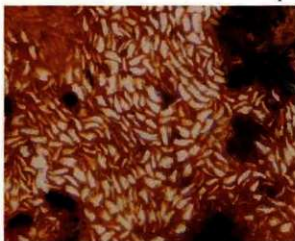
3



4



5



6



7



8

## 例 言

1. 本書は、朝来郡和田山町加都字向山および安井字矢別に所在する向山古墳群、敷字市条寺に所在する市条寺古墳群・一乗寺経塚、安井字矢別に所在する矢別遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は県立北部農業技術センター建設に先立ち、兵庫県農林水産部普及教育課・兵庫県土地開発公社の依頼にもとづいて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 調査は平成2年7月11日から平成3年3月1日にかけて行った。
4. 本書の編集及び遺物の原稿は中村弘が行い、その他の原稿の執筆については目次に記載したとおり分担した。
5. 遺跡調査番号は以下のとおりである。(確認調査を除く)

向山古墳群ほか (今回の報告書に掲載されたすべての遺跡をまとめたもの) 900047

・向山古墳群 (向山古墳群全体をまとめたもの) .....900048

各古墳	向山1号墳 (900049)	向山7号墳 (900055)
	向山2号墳 (900050)	向山8号墳 (900056)
	向山3号墳 (900051)	向山9号墳 (900057)
	向山4号墳 (900052)	向山10号墳 (900058)
	向山5号墳 (900053)	向山11号墳 (900059)
	向山6号墳 (900054)	

・市条寺古墳群 (市条寺古墳群全体をまとめたもの) .....900060

各古墳	市条寺1号墳 (900061)	市条寺3号墳 (900063)
	市条寺2号墳 (900062)	市条寺4号墳 (900064)

・一乗寺経塚 .....900065

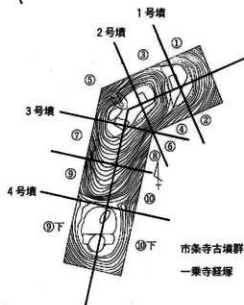
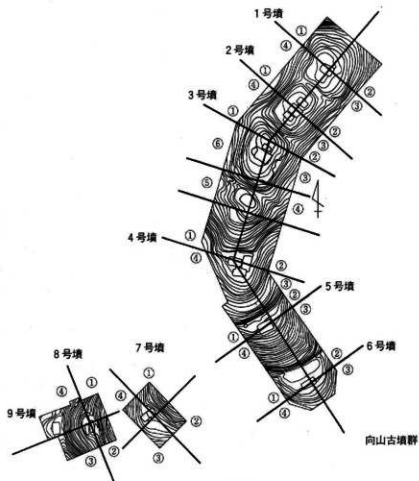
・矢別遺跡 .....900066

6. 報告書に掲載した遺物のうち番号の頭にTがあるものは金属器、Sがあるものは玉類、および石製品を表しており、それ以外は土器である。
7. 「第4図 周辺の遺跡」には国土地理院発行の2万5千分の1図「但馬竹田」を使用した。
8. 遺物の接合・補強・図化・復元・写真撮影は兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所 (兵庫県神戸市兵庫区荒田町) において行った。
9. 発掘調査現場での写真撮影は調査員が行い、遺物整理後の遺物写真撮影は御衣川に委託して行った。
10. 出土遺物、実測図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 (または魚住分館) で保管している。なお、人骨は京都大学理学部で保管していただいている。
11. 遺跡の名称については、字名などの地名により名付けたが、一乗寺経塚だけはかつて存在した寺の名をとって呼称することとした。そのため、地名から名付けた市条寺古墳群と、寺名から名付けた一乗寺経塚では、使用する漢字が異なることとなっている。
12. 調査の実施、および報告書をまとめるにあたって以下の方々にお世話になりました。記して感謝の意を表します。

足立 昇、伊東隆夫、井上美知子、今津節夫、遠藤利恵、大石 兼、大川昭典、岡田文男、小栗明彦、

木下 亘、高妻洋成、肥塚隆保、佐藤昌憲、田畑 基、中島雄二、成瀬正和、布目順一、広岡孝信、  
 福田さよ子、村上 隆、村田忠繁、岡本賢一、辻井幸雄、辻本 忠、平岡英一、藤代正敏、増澤文武、  
 米田憲司、郡司晴元、片山一道、薬科哲男、東村武信、本田光子、中野益男、中野寛子、菅原利佳、  
 長田正宏、志賀智史

13. 遺物の取上げに使用した調査区内の地区分けは、各古墳ごとに以下の図のとおりとした。



# 本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	
	第1節 調査に至る経緯	1 (藤田)
	第2節 調査の体制と経過	1 (藤田)
	第3節 整理作業の経過	4 (藤田)
第2章	遺跡の環境	
	第1節 地理的環境	9 (中村)
	第2節 歴史的環境	9 (中村)
第3章	向山古墳群の調査	
	第1節 概要	15 (中村)
	第2節 向山1号墳	15 (山本)
	第3節 向山2号墳	18 (中村)
	第4節 向山3号墳	33 (藤田)
	第5節 向山4号墳	38 (山本)
	第6節 向山5号墳	41 (藤田)
	第7節 向山6号墳	52 (藤田)
	第8節 向山7号墳	59 (藤田)
	第9節 向山8号墳	65 (山本)
	第10節 向山9号墳	71 (山本)
	第11節 向山10号墳	72 (中村)
	第12節 向山11号墳	76 (藤田)
	第13節 小 結	92 (中村)
第4章	市条寺古墳群の調査	
	第1節 概要	93 (中村)
	第2節 市条寺1号墳	95 (中村)
	第3節 市条寺2号墳	106 (中村)
	第4節 市条寺3号墳	111 (中村)
	第5節 市条寺4号墳	115 (中村)
	第6節 小 結	118 (中村)
第5章	一乗寺経塚の調査	119 (藤田)
第6章	矢別遺跡の調査	135 (中村)
第7章	自然科学的調査	
	第1節 向山古墳群で出土した古人骨	139 (郡司・片山)
	第2節 市条寺古墳群で出土した古人骨	149 (郡司・片山)
	第3節 向山古墳群・市条寺古墳群出土ガラス玉の分析調査	151 (肥塚)
	第4節 向山古墳群出土の管玉の産地分析	157 (粟科・東村)
	第5節 向山古墳群から出土した赤色顔料の分析	175 (本田・志賀)
	第6節 金属器に遺存する有機質遺物について	179 (藤田)
	第7節 向山古墳群から出土した土器に残存する脂肪の分析	195 (中野ほか)
	第8節 一乗寺経塚出土青銅製経筒のラジオグラフィーによる調査	203 (増澤ほか)
	第9節 銅製品の材質分析	209 (藤田)
	第10節 一乗寺経塚出土の経筒に遺存する繊維について	211 (藤田)
第8章	遺構・遺物の検討	
	第1節 向山古墳群・市条寺古墳群	213 (中村)
	第2節 一乗寺経塚	219 (中村)

## 挿図目次

- 第1図 確認調査位置図 (P6)
- 第2図 全面調査位置図 (P8)
- 第3図 遺跡の位置 (P9)
- 第4図 周辺の遺跡 (P10)
- 第5図 向山1～9号墳地形測量図 (調査前) (P12)
- 第6図 向山1～9号墳地形測量図 (調査後) (P13)
- 第7図 向山1～6号墳墳丘土層断面図 (P14)
- 第8図 向山1号墳墳丘測量図 (P16)
- 第9図 向山1・2号墳間区画溝断面図 (P17)
- 第10図 向山1号墳第1主体部 (P17)
- 第11図 向山1号墳出土遺物 (P18)
- 第12図 向山2号墳墳丘測量図 (P19)
- 第13図 向山2号墳第1主体部 (P20)
- 第14図 向山2号墳第2主体部墓室内土器出土状況 (P20)
- 第15図 向山2号墳第2主体部 (P21)
- 第16図 向山2号墳第2主体部土層断面図 (P25)
- 第17図 向山2号墳第2主体部石室(1) (P26)
- 第18図 向山2号墳第2主体部石室(2) (P27)
- 第19図 向山2号墳第2主体部石室基底石 (P28)
- 第20図 向山2号墳第2主体部石室内 (P28)
- 第21図 向山2号墳第3主体部 (P29)
- 第22図 向山2号墳出土遺物 (金属器) (P30)
- 第23図 向山2号墳出土遺物 (土器) (P31)
- 第24図 向山3号墳墳丘測量図 (P32)
- 第25図 向山3号墳区画溝 (P33)
- 第26図 向山3号墳第1主体部 (P34)
- 第27図 向山3号墳第1主体部石棺 (P35)
- 第28図 向山3号墳第2主体部 (P36)
- 第29図 向山3号墳出土遺物 (土器) (P37)
- 第30図 向山4号墳墳丘測量図 (P38)
- 第31図 向山4号墳第1主体部 (P39)
- 第32図 向山4号墳第2主体部 (P40)
- 第33図 向山4号墳第3主体部 (P41)
- 第34図 向山4号墳出土遺物 (土器) (P41)
- 第35図 向山5号墳墳丘測量図 (P42)
- 第36図 向山5号墳第1主体部 (P43)
- 第37図 向山5号墳第1主体部石棺外遺物出土状況 (P44)
- 第38図 向山5号墳第1主体部石棺 (P45)
- 第39図 向山5号墳第1主体部石棺内遺物出土状況 (P46)
- 第40図 向山5号墳出土遺物 (金属器1) (P47)
- 第41図 向山5号墳出土遺物 (金属器2) (P47)
- 第42図 向山5号墳出土遺物 (金属器3) (P48)
- 第43図 向山5号墳出土遺物 (金属器4) (P49)
- 第44図 向山5号墳出土遺物 (金属器5) (P50)
- 第45図 向山5号墳出土遺物 (金属器6) (P51)
- 第46図 向山5号墳出土遺物 (土器) (P52)
- 第47図 向山6号墳墳丘測量図 (P53)
- 第48図 向山6号墳第1主体部 (P54)
- 第49図 向山6号墳第1主体部遺物出土状況 (P55)
- 第50図 向山6号墳出土遺物 (玉類・石製品) (P56)
- 第51図 向山6号墳出土遺物 (金属器) (P57)
- 第52図 向山6号墳出土遺物 (土器) (P58)
- 第53図 向山7号墳墳丘測量図 (P59)
- 第54図 向山7号墳第1主体部 (P60)
- 第55図 向山7号墳上須恵器甕埋納遺構測量図 (P61)
- 第56図 向山7号墳上須恵器甕埋納遺構上層 (P62)
- 第57図 向山7号墳上須恵器甕埋納遺構下層 (P63)
- 第58図 向山7号墳上須恵器甕埋納遺構出土遺物 (P64)
- 第59図 向山8・9号墳墳丘測量図 (P65)
- 第60図 向山8号墳墳丘断面図 (P66)
- 第61図 向山8号墳第1主体部 (P67)
- 第62図 向山8号墳第2主体部 (P68)
- 第63図 向山8号墳第3主体部 (P69)
- 第64図 向山8号墳第3主体部遺物出土状況 (P69)
- 第65図 向山8号墳第4主体部 (P70)
- 第66図 向山8号墳出土遺物 (土器) (P70)
- 第67図 向山9号墳第1主体部 (P71)
- 第68図 向山9号墳第1主体部遺物出土状況 (P72)
- 第69図 向山9号墳出土遺物 (土器) (P72)
- 第70図 向山10号墳墳丘測量図 (P73)
- 第71図 向山10号墳第1主体部 (P74)
- 第72図 向山10号墳出土遺物 (金属器) (P75)
- 第73図 向山10号墳出土遺物 (土器) (P76)
- 第74図 向山11号墳墳丘測量図 (P76)
- 第75図 向山11号墳第1主体部 (P77)
- 第76図 向山11号墳第2主体部 (P78)
- 第77図 向山11号墳第2主体部墓室内遺物出土状況 (P79)
- 第78図 向山11号墳第2主体部石棺 (P80)
- 第79図 向山11号墳第2主体部石棺内遺物出土状況 (P81)
- 第80図 向山11号墳第2主体部石棺内遺物出土状況 (P82)

- 第81図 向山1号墳第2主体部出土遺物(土器)(P82)  
 第82図 向山1号墳第2主体部出土遺物(玉1)(P83)  
 第83図 向山1号墳第2主体部出土遺物(玉2)(P84)  
 第84図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器1)(P85)  
 第85図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器2)(P86)  
 第86図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器3)(P87)  
 第87図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器4)(P88)  
 第88図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器5)(P89)  
 第89図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器6)(P90)  
 第90図 向山1号墳第2主体部出土遺物(金属器7)(P91)  
 第91図 向山1号墳第1主体部出土遺物(土器)(P91)  
 第92図 市条寺古墳群地形測量図(上:調査前、下:調査後)(P94)  
 第93図 市条寺1号墳墳丘測量図(P95)  
 第94図 市条寺1号墳第1主体部(P96)  
 第95図 市条寺1号墳第1主体部遺物出土状況(P97)  
 第96図 市条寺1号墳第1主体部石棺、石室内遺物出土状況(P96)  
 第97図 市条寺1号墳出土遺物(玉)(P99)  
 第98図 市条寺1号墳出土遺物(金属器1)(P100)  
 第99図 市条寺1号墳出土遺物(金属器2)(P101)  
 第100図 市条寺1号墳出土遺物(金属器3)(P102)  
 第101図 市条寺1号墳出土遺物(金属器4)(P103)  
 第102図 市条寺1号墳出土遺物(金属器5)(P104)  
 第103図 市条寺1号墳出土遺物(石製品)(P105)  
 第104図 市条寺1号墳出土遺物(土器)(P105)  
 第105図 市条寺2・3号墳墳丘測量図(P107)  
 第106図 市条寺2号墳第1主体部(P108)  
 第107図 市条寺2号墳第1主体部石棺(P109)  
 第108図 市条寺2・3号墳出土遺物(土器)(P110)  
 第109図 市条寺3号墳第1主体部(P111)  
 第110図 市条寺3号墳第1主体部石棺、石室内遺物出土状況(P112)  
 第111図 市条寺3号墳第1主体部石棺内遺物出土状況(P113)  
 第112図 市条寺3号墳出土遺物(玉)(P114)  
 第113図 市条寺4号墳墳丘測量図(P115)  
 第114図 市条寺4号墳第1主体部(P116)  
 第115図 市条寺4号墳第1主体部出土遺物(金属器)(P117)  
 第116図 一乗寺経塚地形測量図(P119)  
 第117図 一乗寺経塚平面図(上層)(P120)  
 第118図 一乗寺経塚平面図(中層・下層)(P121)  
 第119図 一乗寺経塚封石及び周辺出土遺物(P123)  
 第120図 一乗寺1号経塚(P125)  
 第121図 一乗寺1号経塚出土遺物(P126)  
 第122図 一乗寺2号経塚(上層)(P127)  
 第123図 一乗寺2号経塚(下層)(P128)  
 第124図 一乗寺2号経塚出土遺物(土器)(P129)  
 第125図 一乗寺2号経塚出土遺物(金属器)(P129)  
 第126図 一乗寺3号経塚(P131)  
 第127図 一乗寺3号経塚出土遺物(P132)  
 第128図 乳ノ木庵周辺採集の遺物(P133)  
 第129図 矢別遺跡地形測量図(調査前)(P135)  
 第130図 矢別遺跡地形測量図(調査後)(P135)  
 第131図 矢別遺跡堅穴遺構(P136)  
 第132図 矢別遺跡出土遺物(P136)  
 第133図 白玉の法量(P215)

## 写真目次

- 写真1 調査風景(1)(P2)  
 写真2 調査風景(2)(P3)  
 写真3 調査地現況(P5)  
 写真4 向山3号墳第1主体部(P35)  
 写真5 須恵器甕形納遺構(P63)  
 写真6 市条寺古墳群調査前(P93)  
 写真7 市条寺1号墳埋土上層遺物出土状況(P97)  
 写真8 市条寺2号墳第1主体部(P106)  
 写真9 一乗寺経塚から乳ノ木庵を望む(P118)

## 表目次

- 第1表 発掘調査地点一覧(P7)  
 第2表 周辺の遺跡地名表(P11)  
 第3表 向山古墳群・市条寺古墳群一覧表(P214)  
 第4表 玉類・石製模造品一覧表(P221)  
 第5表 金属器一覧表(P224)  
 第6表 鉄線計測表(P226)  
 第7表 土器一覧表(P227)

## 巻頭カラー目次

### 巻頭カラー1 遺跡

1. 遠景（南東から）
2. 向山1～9号墳（北東から）

### 巻頭カラー2 向山古墳群

1. 向山2号墳第2主体部（南東から）
2. 向山2号墳第2主体部人骨（北西から）

### 巻頭カラー3 向山古墳群

1. 向山5号墳第1主体部（南西から）
2. 向山11号墳第2主体部（北から）

### 巻頭カラー4 一乗寺経塚

1. 一乗寺経塚封石検出状況（北から）
2. 一乗寺1～3号経塚検出状況（北から）

### 巻頭カラー5 遺物

1. 向山2号墳第2主体部出土鏡
2. 一乗寺2号経塚出土経筒

### 巻頭カラー6 遺物

1. 古墳出土勾玉・有孔円盤
2. 古墳出土玉類

### 巻頭カラー7 遺物

1. 古墳時代の土器
2. 中世の土器

### 巻頭カラー8 遺物

- 向山5号墳出土刀（T5）他の柄巻

## 写真図版 目次

### 図版1 遺跡

1. 調査地遠景（東から）
2. 調査地遠景（南西から）

### 図版2 遺跡

1. 調査地遠景（南東から）
2. 向山古墳群遠景（南西側から）

### 図版3 遺跡

1. 向山1～4号墳（北西から）
2. 市条寺1～4号墳一乗寺経塚南東から

### 図版4 向山古墳群 全景

1. 向山1号墳（調査前、南から）
2. 向山2・3号墳（調査前、北から）
3. 向山4～6号墳（調査前、北から）

### 図版5 向山古墳群 全景

1. 向山1～3号墳（調査前、北西から）
2. 向山1～3号墳（調査後、北西から）

### 図版6 向山古墳群 全景

1. 向山1～3号墳（南から）
2. 向山1～3号墳（北から）

### 図版7 向山古墳群 全景

1. 向山4～6号墳全景（北から）
2. 向山5・6号墳全景（北西から）
3. 向山8・9号墳全景（北から）

### 図版8 向山古墳群 溝断面

1. 向山1・2号墳間溝断面（北西から）
2. 向山2・3号墳間溝断面（北西から）
3. 向山3号墳北溝断面（北西から）

### 図版9 向山1号墳

1. 全景（北から）
2. 第1主体部全景（北から）

### 図版10 向山2号墳第2主体部

1. 石室蓋石（南東から）
2. 石室内（北西から）

### 図版11 向山2号墳第2主体部

- 蓋石設置状況
1. 南から 2. 南東から 3. 北から
  4. 南から 5. 北から 6. 北西から
  7. 北西から

### 図版12 向山2号墳第2主体部

1. 石室内遺物出土状況（北東から）
2. 石室内遺物出土状況（北西から）

### 図版13 向山2号墳第2主体部

1. 人骨（頭部・北西から）
2. 人骨（頭部・北西から）
3. 人骨（腰部・北西から）
4. 人骨（胸部・北西から）

### 図版14 向山2号墳第2主体部

1. 石室検出状況（北西から）
2. 石室検出状況（北西から）

### 図版15 向山2号墳第2主体部

1. 石室北東壁（南から）
2. 石室北東壁（西から）
3. 石室東隅（西から）

- 図版 16 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 石室南西壁 (東から)  
 2. 石室南西壁 (北から)  
 3. 石室南隅 (北から)
- 図版 17 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 石室南東壁 (北西から)  
 2. 石室南隅 (北から)  
 3. 石室東隅 (西から)
- 図版 18 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 石室北西壁 (南東から)  
 2. 石室北西壁 (南から)  
 3. 石室北西壁 (東から)
- 図版 19 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 礎床 (南東から)  
 2. 礎床 (南東から)
- 図版 20 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 墓室内埋納土器 (東から)  
 2. 墓室内埋納土器断ら削り状況(東から)
- 図版 21 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 墓壇主軸断面南東側 (北東から)  
 2. 墓壇主軸断面北西側 (北東から)  
 3. 墓壇横軸断面南西側 (南東から)  
 4. 墓壇横軸断面北東側 (南東から)  
 5. 裏込め東隅 (東から)  
 6. 裏込め南隅 (南から)  
 7. 石室内土層 (南東から)  
 8. 石室基底石 (北西から)
- 図版 22 向山 2 号墳第 2 主体部  
 1. 石材 (天井石)  
 2. 石材 (天井石)  
 3. 石材 (壁材)  
 4. 石材 (天井石)  
 5. 石材 (小礎)  
 6. 石材 (全体)
- 図版 23 向山 2 号墳  
 1. 第 1 主体部 (北東から)  
 2. 第 3 主体部 (南西から)
- 図版 24 向山 3 号墳  
 1. 全景 (南から)  
 2. 第 1 主体部 (東から)
- 図版 25 向山 3 号墳第 2 主体部  
 1. 石棺蓋石 (北から)  
 2. 石棺蓋石 (西から)
- 図版 26 向山 3 号墳第 2 主体部  
 1. 石棺 (東から)  
 2. 石棺 (西から)  
 3. 石棺 (西から)  
 4. 石棺小口板 (東から)
- 図版 27 向山 4 号墳  
 1. 全景 (北から)  
 2. 第 1 主体部 (北から)
- 図版 28 向山 4 号墳  
 1. 第 2 主体部 (東から)  
 2. 第 3 主体部 (南から)
- 図版 29 向山 5 号墳第 1 主体部  
 1. 石棺蓋石 (南東から)  
 2. 石棺蓋石 (北東から)
- 図版 30 向山 5 号墳第 1 主体部  
 1. 石棺内 (南東から)  
 2. 石棺内 (南西から)
- 図版 31 向山 5 号墳第 1 主体部  
 1. 石棺蓋石 (北西から)  
 2. 墓壇内小礎 (南東から)  
 3. 石棺蓋石 (南西から)  
 4. 棺外鉄器 (北東から)  
 5. 棺外土器 (北東から)  
 6. 棺外鉄器 (南西から)
- 図版 32 向山 5 号墳第 1 主体部  
 1. 石棺内 (南西から)  
 2. 石棺内 (南西から)  
 3. 石棺内 (南から)  
 4. 石棺内 (北から)  
 5. 石棺内南西端 (北東から)
- 図版 33 向山 5 号墳第 1 主体部  
 1. 石棺 (南西から)  
 2. 石棺 (南西から)  
 3. 石枕 (南西から)  
 4. 礎除去後 (南西から)
- 図版 34 向山 6 号墳  
 1. 全景 (北西から)  
 2. 第 1 主体部 (北東から)
- 図版 35 向山 6 号墳第 1 主体部  
 1. 棺内遺物 (北西から)  
 2. 全景 (南東から)  
 3. 棺内遺物 (北東から)  
 4. 北東端赤色顔料 (南西から)  
 5. 墓壇上遺物 (南東から)



- 図版 36 向山7号墳  
 1. 全景 (北東から)  
 2. 第1主体部 (南東から)
- 図版 37 向山7号墳上須恵器変形納遺構  
 1. 全景 (西から)  
 2. 須恵器変検出状況 (東から)  
 3. 全景 (南西から)  
 4. 全景 (南から)
- 図版 38 向山8号墳第1主体部  
 1. 石棺蓋 (南東から)  
 2. 石棺蓋 (南西から)  
 3. 石棺 (南西から)  
 4. 石棺 (南東から)
- 図版 39 向山8号墳第2主体部  
 1. 石棺蓋 (東から)  
 2. 石棺蓋 (北から)  
 3. 石棺蓋 (東から)  
 4. 石棺 (北から)
- 図版 40 向山8号墳第3主体部  
 1. 全景 (北東から)  
 2. 全景 (南西から)  
 3. 区画溝 (北西から)  
 4. 土器出土状況 (南西から)
- 図版 41 向山8号墳第4主体部  
 1. 全景 (北東から)  
 2. 全景 (南から)
- 図版 42 向山9号墳第1主体部  
 1. 全景 (西から)  
 2. 集石 (南から)  
 3. 土器出土状況 (北から)
- 図版 43 向山10号墳  
 1. 全景 (南西から)  
 2. 全景 (南西から)
- 図版 44 向山10号墳第1主体部  
 1. 全景 (南東から)  
 2. 礎床と石枕 (北西から)  
 3. 礎床と石枕 (南東から)
- 図版 45 向山10号墳第1主体部  
 1. 土坑検出状況 (南東から)  
 2. 土坑断面 (南東から)  
 3. 墓壇上土器 (東から)  
 4. 墓壇内土層 (南東から)  
 5. 礎床 (足部、南東から)  
 6. 礎床と石枕 (北西から)
- 図版 46 向山11号墳  
 1. 遠景 (南から)  
 2. 全景 (北西から)  
 3. 全景 (北西から)
- 図版 47 向山11号墳第1主体部  
 1. 石室 (南西から)  
 2. 石室東壁 (南西から)  
 3. 石室北壁 (南から)
- 図版 48 向山11号墳第2主体部  
 1. 石棺上礎積み (南から)  
 2. 石棺上礎積み (北から)  
 3. 石棺蓋石 (北から)
- 図版 49 向山11号墳第2主体部  
 1. 石棺上礎積み (西から)  
 2. 石棺蓋石上粘土 (西から)  
 3. 石棺蓋石 (西から)  
 4. 石棺 (西から)
- 図版 50 向山11号墳第2主体部  
 1. 棺外遺物 (西から)  
 2. 石棺上礎積み内遺物 (東から)  
 3. 石棺蓋石上粘土 (西から)  
 4. 石棺蓋石上粘土 (南西から)  
 5. 石棺蓋石 (東から)  
 6. 石棺蓋石 (西から)  
 7. 石棺 (東から)  
 8. 石枕 (西から)
- 図版 51 向山11号墳第2主体部  
 1. 石棺内 (北から)  
 2. 石棺内 (西から)
- 図版 52 向山11号墳第2主体部  
 1. 石棺内 (西から)  
 2. 石棺内 (西から)  
 3. 棺内遺物 (北から)  
 4. 棺内遺物 (東から)  
 5. 棺内遺物 (南から)
- 図版 53 市条寺古墳群  
 1. 遠景 (南東から)  
 2. 遠景 (東から)  
 3. 全景 (北西から)
- 図版 54 市条寺1号墳  
 1. 全景 (西から)  
 2. 石棺蓋石 (東から)  
 3. 墓壇上遺物 (南から)

- 図版55 市条寺1号墳第1主体部  
 1. 石棺内 (南から)  
 2. 墓壙上遺物 (西から)  
 3. 石棺蓋石 (西から)  
 4. 石棺内遺物 (東から)  
 5. 石棺内遺物 (東から)
- 図版56 市条寺1号墳第1主体部  
 1. 石棺内 (東から)  
 2. 石棺 (南から)  
 3. 人骨 (南から)  
 4. 石枕 (南から)
- 図版57 市条寺2号墳第1主体部  
 1. 石棺蓋石 (北東から)  
 2. 石棺蓋石 (南東から)  
 3. 石棺蓋石 (北から)  
 4. 石棺蓋石 (北東から)
- 図版58 市条寺2号墳第1主体部  
 1. 石棺 (北東から)  
 2. 石棺 (南東から)
- 図版59 市条寺3号墳第1主体部  
 1. 石棺蓋石 (北東から)  
 2. 石棺蓋石 (南東から)  
 3. 石棺 (南東から)
- 図版60 市条寺3号墳第1主体部  
 1. 石棺蓋石 (南から)  
 2. 石棺蓋石 (南西から)  
 3. 石棺蓋石 (南西から)  
 4. 石棺蓋石 (東から)  
 5. 石棺 (東から)  
 6. 棺内遺物 (北西から)  
 7. 人骨 (南東から)  
 8. 石枕 (南東から)
- 図版61 市条寺4号墳第1主体部  
 1. 全景 (東から)  
 2. 全景 (北から)  
 3. 墓壙内土層 (東から)  
 4. 墓壙全景 (北東から)  
 5. 棺内遺物 (北から)
- 図版62 一乗寺経塚  
 1. 調査前全景 (北から)  
 2. 調査前全景 (北から)  
 3. 封石検出状況 (北から)
- 図版63 一乗寺経塚  
 1. 封石検出状況 (東から)  
 2. 1～3号経塚検出状況 (東から)
- 図版64 一乗寺経塚  
 1. 1～3号経塚全景 (東から)  
 2. 1～3号経塚全景 (北から)  
 3. 1～3号経塚埋納坑 (東から)
- 図版65 一乗寺1号経塚  
 1. 外容器検出状況 (東から)  
 2. 経塚検出状況 (東から)  
 3. 外容器検出状況 (南から)
- 図版66 一乗寺2号経塚  
 1. 検出状況 (北から)  
 2. 外容器検出状況 (北東から)  
 3. 経筒検出状況 (北東から)
- 図版67 一乗寺3号経塚  
 1. 外容器検出状況 (南から)  
 2. 検出状況 (南から)  
 3. 外容器検出状況 (南から)
- 図版68 一乗寺経塚  
 1. 1号経塚外容器 (東から)  
 2. 1号経塚外容器 (東から)  
 3. 2号経塚外容器1 (北東から)  
 4. 2号経塚外容器1 (南から)  
 5. 2号経塚外容器2 (北東から)  
 6. 2号経塚外容器2 (北西から)  
 7. 3号経塚中心部 (南西から)  
 8. 3号経塚外容器 (北東から)
- 図版69 矢別遺跡  
 1. 全景 (北東から)  
 2. 壑穴遺構 (北東から)  
 3. 土坑1 (北東から)
- 図版70 出土遺物 (玉類・有孔円盤)  
 1. 有孔円盤・勾玉  
 2. 白玉
- 図版71 出土遺物 (玉類)  
 1. 管玉 (向山6号墳出土)  
 2. 管玉 (向山6号墳出土)
- 図版72 出土遺物 (玉類・石製品)  
 1. ガラス玉 (市条寺3号墳出土)  
 2. 磁石 (市条寺1号墳出土)
- 図版73 出土遺物 (金属器)  
 向山2・5号墳出土
- 図版74 出土遺物 (金属器)  
 向山5号墳出土
- 図版75 出土遺物 (金属器)  
 向山5号墳出土

- 図版 76 出土遺物 (金属器)  
向山5・6号墳出土
- 図版 77 出土遺物 (金属器)  
向山11号墳出土
- 図版 78 出土遺物 (金属器)  
向山11号墳出土
- 図版 79 出土遺物 (金属器)  
向山11号墳出土
- 図版 80 出土遺物 (金属器)  
向山11号墳出土
- 図版 81 出土遺物 (金属器)  
向山10・11号墳出土
- 図版 82 出土遺物 (金属器)  
市条寺1号墳出土
- 図版 83 出土遺物 (金属器)  
市条寺1号墳出土
- 図版 84 出土遺物 (金属器)  
市条寺1号墳出土
- 図版 85 出土遺物 (金属器)  
市条寺1・4号墳出土
- 図版 86 出土遺物 (金属器)  
一乘寺経塚・向山7号墳上須恵器埋納遺構出土
- 図版 87 出土遺物 (土器)  
向山1・2号墳出土
- 図版 88 出土遺物 (土器)  
向山2号墳出土土器(7)細部  
口縁外側 口縁内側  
肩部外側 頭部内側  
体部上半 体部下半
- 図版 89 出土遺物 (土器)  
向山2号墳出土土器(8)細部  
口縁外側 口縁内側  
肩部外側 頭部内側  
体部上半 体部下半
- 図版 90 出土遺物 (土器)  
向山3・4・5号墳出土
- 図版 91 出土遺物 (土器)  
向山6・7号墳出土  
(30)体部上半 (30)体部下半
- 図版 92 出土遺物 (土器)  
向山8・9・10号墳出土
- 図版 93 出土遺物 (土器)  
向山11号墳・市条寺1・2・3号墳出土
- 図版 94 出土遺物 (土器)  
一乘寺経塚出土
- 図版 95 出土遺物 (土器)  
一乘寺経塚出土  
(62)体部上半 (62)体部下半
- 図版 96 出土遺物 (土器)  
一乘寺経塚・矢別遺跡出土
- 図版 97 出土遺物 (X線写真)
- 図版 98 出土遺物 (X線写真)
- 図版 99 出土遺物 (X線写真)
- 図版100 出土遺物 (X線写真)

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

県立北部農業技術センターは県下で3つ目の農業技術センターとして平成5年6月1日に朝来郡和田山町安井他の山間に設立された。県立の農業技術センターとしてはすでに加西市に中央農業技術センターが、三原郡三原町に淡路農業技術センターが存在する。北部農業技術センターはこれらとの機能分担に配慮して地域密着型の実用実証試験研究を推進し、但馬地域の特性を生かした高付加価値農業の確立を目的として、中央農業技術センターの農業試験場但馬分場、同草試験地、畜産試験場但馬分場、同東方和牛試験地、および経営流通室食品加工指導所並びに県立畜産技術センターを統合して設立されたものである。

その設立構想は昭和63年3月の県北農業技術センター検討委員会の報告に通り、同年9月には県北農業技術センター設置調査会が調査位置として和田山町安井字矢別地区を選定した。その後候補地の県決定などを経て、用地買収などの手続きが進行していった。

こうした事業計画の急速な進展に対して、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では兵庫県農林水産部普及教育課の依頼を受けて、事業予定地内の分布調査を行った。周辺には加都車塚古墳や竹田城など但馬を代表する各時代の遺跡が濃密に分布することから、事業地内にも遺跡の存在が十分に予想された。

分布調査は平成元年4月27日～5月23日に行い、古墳、古墳状の地形隆起、山城との関係が想定される郭状の平坦地、遺物散布地など遺跡が存在する可能性が考えられる地点を77ヶ所確認した。この結果をうけ、兵庫県農林水産部普及教育課及び事業計画の実行に当たる兵庫県土地開発公社と協議を行った結果、工法変更あるいは緑地帯として現状保存することが不可能な40ヶ所について発掘調査を実施することとなった。その後、計画の変更などにより5ヶ所が調査対象外となる反面、伐開後の地形観察により調査の必要な地点が4ヶ所発見され、最終的な調査地点は第1表および第1図に示す39ヶ所となった。

39ヶ所の調査地点のうち地形観察から遺跡の存在が明白な5地点（No2～4とNo44-B）については当初から全面調査を行い、それ以外はまず確認調査を実施した。確認調査で遺跡の存在が明らかとなった地点については年度内にすべての調査を終えるよう引き続き全面調査を行い、事業計画に支障をきたさないよう対応した。

## 第2節 調査の体制と経過

発掘調査は平成2年7月11日より開始し、池田正男調査第2課長のもとに配属された以下の4名が担当した。

- (主 査) 吉田 昇 (期間：平成2年7月11日～平成2年11月26日)
- (技術職員) 藤田 淳 (期間：平成2年7月11日～平成3年3月1日)
- 山本 誠 (期間：平成2年7月11日～平成2年12月6日)
- 中村 弘 (期間：平成2年10月31日～平成3年3月1日)

## 1. 確認調査

確認調査地点は、No35地点だけは耕作地であるため、2m×2mの坪掘り調査を行い、それ以外は尾根上にあるためトレンチ調査を実施した。トレンチの幅は、古墳状隆起や山城関連遺構については1m、尾根筋の平坦地については2mを原則とした。トレンチの総延長は1060m、No35地点を含めた確認調査の総面積は1000㎡となった。

表土から手掘りで掘削し、遺構・遺物が検出されない限り、地山面に到達するまで掘り下げた。掘削終了後、土層断面を写真と図面によって記録したが、遺跡の性格上、出土遺物が少ないこと遺構埋土が識別しづらかったため、幾つかの地点ではトレンチの掘削によって遺構の一部を掘り下げたところがある。

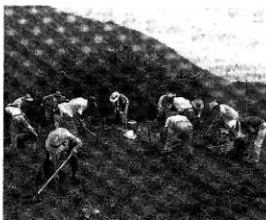
調査は11月下旬にはすべて終了したが、表1に示すNo1・No4-A~D・No23・No30・No44-Dの8ヶ所が遺跡であることが判明したため継続して全面調査を実施した。これ以外の地点では、No35地点で中世の遺物が若干出土した以外、遺構・遺物はまったく認められず遺跡は存在しないと判断した。

## 2. 全面調査

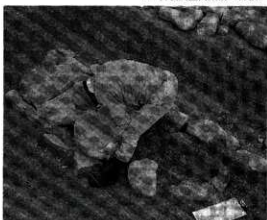
全面調査は表1に示す12ヶ所の4170㎡について実施し、古墳15基、経塚3基、土器埋納遺構1基、竪穴遺構1基を調査した。古墳は向山と呼ばれるほぼ独立した小高い丘陵に立地する一群と、その西側にあって背後の山地から細長く派生した尾根上に立地する一群に大別され、それぞれ向山古墳群、市条寺古墳群と命名した。なおNo23地点は立地上そのどちらにも属さないが、位置的な関係から11号墳として向山古墳群に含めた。



1. 古墳調査開始前の鉋縁い



2. 表土掘削



3. 石棺の蓋石外し (向山5号墳)



4. 片山先生による人骨調査 (向山2号墳)

写真1 調査風景(1)

市条寺4号墳と同じ場所に営まれた経塚は、その麓に現存した寺院との関連を考慮して一乗寺経塚としたが、向山古墳群の中にある中世の土器埋納遺構は性格が明らかでないことから特に遺跡名はつけていない。

矢別遺跡（No30地点）では谷奥の尾根上で堅穴遺構が1基検出されたにすぎなかった。

調査は向山1～3号墳を手始めに平成2年7月16日から開始した。この年は台風19号が但馬地域に大きな被害をもたらし、さらに1～2月は降雪に悩まされ、調査が思うようにはかどらなかった。

また、市条寺4号墳は一乗寺経塚の調査終了間際にその存在が判明したため、調査期間を契約終了間際まで延長し、かろうじて調査を終えることができた。こうして、平成3年2月末日には現地での調査をすべて完了することができた。

古墳の調査では玉類のように微細な遺物や金属器や人骨などの脆弱な遺物の検出と取り上げには特に注意を払ったが、必ずしも十分とは言いがたい面がある。向山11号墳では棺内埋土の土篩いによって100点以上の白玉が検出され発掘時の見落としを補ったが、向山6号墳や市条寺1号墳のように墓壁上で検出された玉類については、はからずも見落としがあったかもしれない。金属器でも棺外に副葬されたものについては調査時に一部を失ったものがある。検出されたすべての人骨は埋葬状態での鑑定を受けるため、片山一道京都大学理学部助教授（当時）に2度にわたって来跡していただいた。

なお、向山古墳群の立地する丘陵は大部分が工事によって削平され、古墳群はほぼ消滅したが、10号墳から北東にのびる小尾根にかろうじて削平をまぬがれた3基の古墳が存在することを調査中に確認した。また、市条寺4号墳から東へ延びる尾根上に連なる古墳も保存区域として残されることとなった。



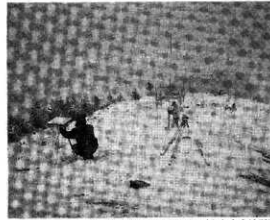
1. 石棺内の調査（向山5号墳）



2. 地元説明会



3. 冬の主体部調査（市条寺3号墳）



4. 吹雪中の地形測量（市条寺古墳群）

写真2 調査風景(2)

### 第3節 整理作業の経過

整理作業については平成3年3月、兵庫県農林水産部普及教育課と整理事業に関する協議を行い、これにもとづいて平成5年度から出土遺物整理事業を開始し、ネーミング作業と一部の金属製品の保存処理作業を行った。しかし、次年度以降は予算措置の関係上、一時中断した。

その後、改めて協議を行い、平成8年度～平成10年度の3ヶ年で報告書刊行までの残りの作業を実施することとなった。平成8年度には土器の接合・補強作業と実測作業、金属製品の保存処理作業、平成9年度には金属製品の保存処理作業および遺物実測からレイアウトまでの作業を行い、平成10年度に報告書を刊行した。

分析鑑定に関しては、平成4年4月に京大大学院学部長山助教授のもとへ出土人骨をとどけ、クリーニングなどの処理と分析、報告書への原稿執筆を依頼した。なお、人骨標本については、そのまま京大大学院学部に保管して頂いている。平成4年6月には元興寺文化財研究所増澤文武保存処理センター長の計らいで京都大学原子炉実験所において一乗寺2号経塚出土経筒の中性子ラジオグラフィーを行い、引き続き元興寺文化財研究所においてX線透過試験を行った。中性子ラジオグラフィーの結果、経筒内の経巻の遺存状況が明らかとなったため、同年8月には開蓋し、中の経巻の残骸を取り出した。平成4年8月には向山2号墳第2主体部出土供献土器内から土壌の脂肪酸分析用サンプルを採取し、平成5年度に(株)ズコーシャに委託し、分析を行った。同じく平成5年度には京都大学原子炉実験所の薬科哲男氏に管玉の材質分析を依頼した。さらに、平成7年度には赤色顔料分析を福岡市教育委員会の本田光子氏に依頼し、平成10年度には奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏にガラス玉の分析を、高知県紙産業技術センターの大山昭典氏に紙繊維の分析を依頼した。なお、金属製品に遺存する有機質遺物、銅製品の材質分析については、兵庫県教育委員会の加古千恵子、中村弘の協力のもとで藤田淳が行った。

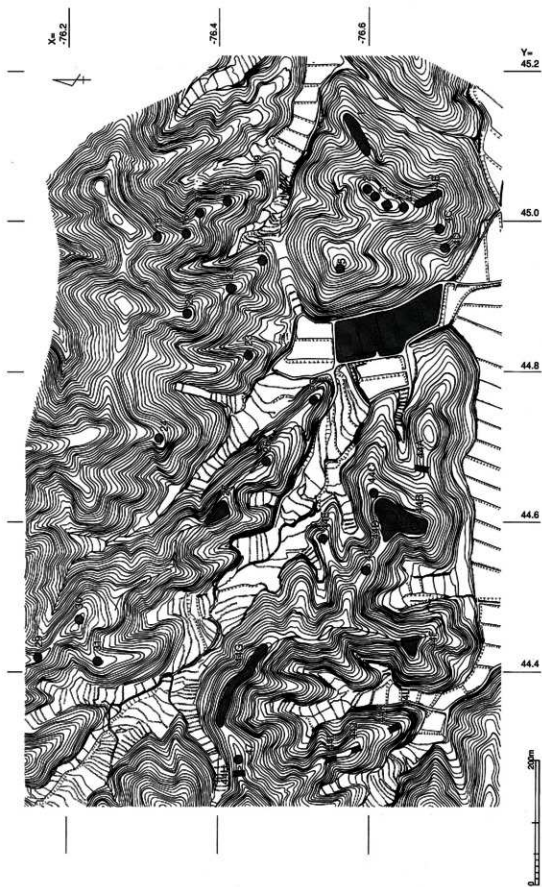
整理作業は、主に以下の職員、非常勤嘱託員があたった。

- |           |   |
|-----------|---|
| (遺物整理)    | 藤田 淳、中村 弘、山本 誠<br>中筋貴美子、伴 悦子、古谷幸子、横山麻子、片岡喜久子、石田裕子       |
| (金属器保存処理) | 加古千恵子<br>栗山美奈、横山麻子、和田寿佐子、喜多山好子、前川悦子、藤川紀子、<br>田中 業、小山みゆき |



写真3 調査地現況

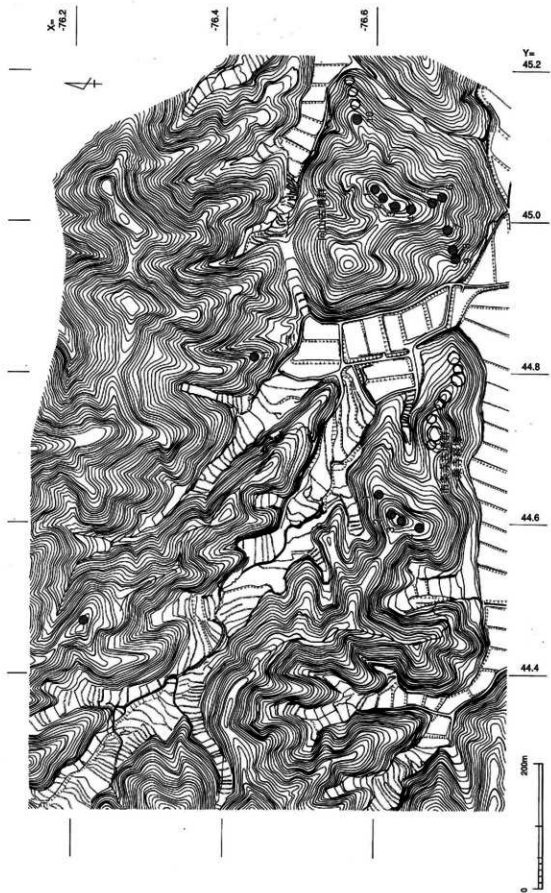




第1圖 確認調査位置圖

第1表 発掘調査地点一覧

	地点	種別	調査種別	調査面積 (㎡)		報告遺跡名
				確認	全面	
1	No 1	平坦地	確認調査	80 (40×2)	396	向山10号墳
2	No 2	古墳	全面調査			向山1号墳
3	No 3	古墳	全面調査		1,405	向山2号墳
4	No 4	古墳	全面調査			向山3号墳
5	No 4 - A	平坦地	確認後全面	20 (10×2)	133	向山4号墳
6	No 4 - B	平坦地	確認後全面	100 (50×2)	577	向山5・6号墳
7	No 4 - C	平坦地	確認後全面	20 (10×2)	164	向山7号墳
8	No 4 - D	古墳状隆起	確認後全面	10 (10×1)	232	向山8・9号墳
9	No 5	平坦地	確認調査	50 (50×1)		
10	No15	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
11	No16	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
12	No17	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
13	No18	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
14	No19	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
15	No20	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
16	No21	平坦地	確認調査	20 (20×1)		
17	No22	平坦地	確認調査	20 (20×1)		
18	No23	古墳状隆起	確認後全面	20 (20×1)	106	向山11号墳
19	No24	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
20	No25	古墳	確認調査	20 (20×1)		
21	No26	古墳	確認調査	20 (20×1)		
22	No27	平坦地	確認調査	40 (40×1)		
23	No29	平坦地	確認調査	50 (25×2)		
24	No30	平坦地	確認後全面	80 (40×2)	70	矢別遺跡
25	No31	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
26	No35	散布地	確認調査	20 (2×2×5)		
27	No44 - B	石積み	全面調査		160	一乗寺経塚 市条寺4号墳
28	No44 - C	山城関連	確認調査	30 (30×1)		
29	No44 - D	山城関連	確認後全面	20 (20×1)	927	市条寺1～3号墳
30	No44 - E	山城関連	確認調査	20 (20×1)		
31	No44 - F	山城関連	確認調査	30 (30×1)		No46地点含む
32	No44 - G	山城関連	確認調査	100 (100×1)		
33	No44 - H	山城関連	確認調査	10 (10×1)		
34	No44 - I	山城関連	確認調査	10 (10×1)		
35	No44 - J	山城関連	確認調査	10 (10×1)		
36	No44 - K	山城関連	確認調査	10 (10×1)		
37	No44 - L	山城関連	確認調査	10 (10×1)		
38	No45	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
39	No47	古墳状隆起	確認調査	20 (20×1)		
計				1,000	4,170	



第2図 全面調査位置図

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

今回報告する向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡は、行政区分上は兵庫県朝来郡和田山町加部・安井・殿に属し、兵庫県北部にある但馬地方の南部に位置する。但馬地方は、兵庫県唯一日本海に接する地域であり、中心には総長486.8km、総流域面積1,300㎡の円山川が日本海に向かって北流している。上記の遺跡もこの円山川の支流である安井川に面している。

遺跡からは安井川によって形成された谷が広く望めるが、本流である円山川は見ることはできず、その点からは本流からやや奥まったところに位置するということができる。

### 第2節 歴史的環境

和田山町域においては、旧石器時代の遺跡は未確認である。続く縄紋時代では遺物のみが確認されており、寺内遺跡では後期から晩期、高瀬地区の園場整備では晩期、筒江片引遺跡では晩期後半の深鉢形

土器が出土している。

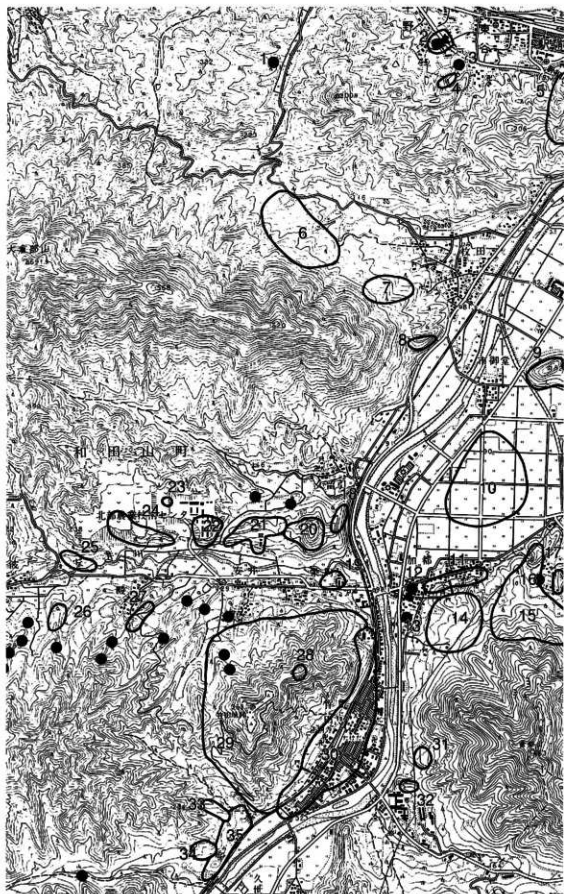
弥生時代では、筒江片引遺跡において縄紋時代晩期後半の土器と伴出した前期の土器、石器、流水紋の木製壺がある。他にも10数カ所の遺跡から遺物が出土している。

中期には高地性集落あるいは祭祀跡と考えられている大盛山遺跡がある。丘陵上に溝を巡らせたもので、ほぼ全域が調査されている。また、岡田2号墳の下層からは中期から後期の竪穴住居が検出されている。

古墳時代になると、小規模の古墳が丘陵上や尾根筋に築造されるようになる。和田山町内では現在150基を超える古墳が確認されているが、そのほとんどがこの小規模墳と、後期の群集墳である。これらの小規模墳は、東梅田古墳群などに見られるように弥生時代から存在しており、いくつかは同じ場所に築かれ、重複しているものもある。



第3図 遺跡の位置



第4図 周辺の遺跡

第2表 周辺の遺跡地名表

No	遺跡名	種類	時代
1	塚が谷古墳	古墳	古墳時代
2	池田古墳	古墳	古墳時代
3	城ノ山古墳	古墳	古墳時代
4	城ノ山裏古墳群	古墳	古墳時代
5	西山古墳群	古墳	古墳時代
6	北山古墳群他	古墳	古墳時代
7	ショウバヤシ古墳群	古墳	古墳時代
8	枚田城	城	中世
9	市御堂城	城	中世
10	加都遺跡	集落	古墳時代～中世
11	加都遺跡	集落	弥生時代
12	車塚古墳	古墳	古墳時代
13	王塚古墳	古墳	古墳時代
14	加都古墳群	古墳	古墳時代
15	城ヤブ古墳群	古墳	古墳時代
16	城ヤブ1号墳	古墳	古墳時代
17	簡江城	城	中世
18	東梅田古墳群	墳墓	弥生～古墳時代

No	遺跡名	種類	時代
19	安井遺跡	集落	弥生時代
20	安井城	城	中世
21	梅田古墳群	古墳	古墳時代
22	向山古墳群	古墳	古墳時代
23	矢別遺跡	集落	古代
24	市条寺古墳群	古墳	古墳時代
25	殿敷布地	集落	
26	三波城	城	中世
27	殿城	城	中世
28	観音寺山砦	城	中世
29	竹田城及び開運遺跡	城	近世
30	竹田城下町	集落	中世
31	魔寺跡	寺院	
32	(竹田城下町開運遺跡)	集落	
33	ムクノ木城	城	中世
34	ガンド寺跡	寺院	中世
35	ムクノ木遺跡	集落	弥生時代

周辺の小規模古墳の例としては、簡江中山古墳群、秋葉山古墳群、梅田古墳群などがある。これらの小規模古墳は但馬全域で認められているが、和田山町域の古墳時代を最も特徴づけているのは、前期の城の山古墳、中期の池田古墳と船宮古墳（朝来町）の存在である。城の山古墳は直径30mを越える円墳で、但馬地方に数少ない特徴をもった古墳の出現として注目されている。しかし、埴輪をもっていない、墳形が円形であるなど、全ての要素がそろっているわけではない。池田古墳は周濠をもった全長128mの前方後円墳で、但馬最大規模を誇る。他に岡田古墳群にも中規模の前方後円墳のまとまりがある。

後期には、加都車塚・王塚が築造されており、埴輪をもち、内部主体には比較的規模の大きい横穴式石室が築造されていると考えられている。しかし、但馬全体をみると、大型墳は門山川の流域である養父郡の大蔵古墳群へと移っており、大型墳の集中する場所が和田山町からやや北へと移動している。

古代には加都遺跡において「但馬道」と呼ぶべき道路遺構が検出された。但馬と播磨を直接結ぶ道として注目される。

中世には全国屈指の山城である竹田城が、山名持豊によって播磨山陽道と但馬山陰道をつなぐ当地に築城され、太田垣光景氏を配した。他にも中・近世の山城・館跡が散在している。また、加都遺跡からは43棟の掘立柱建物が検出されている。

#### (参考文献)

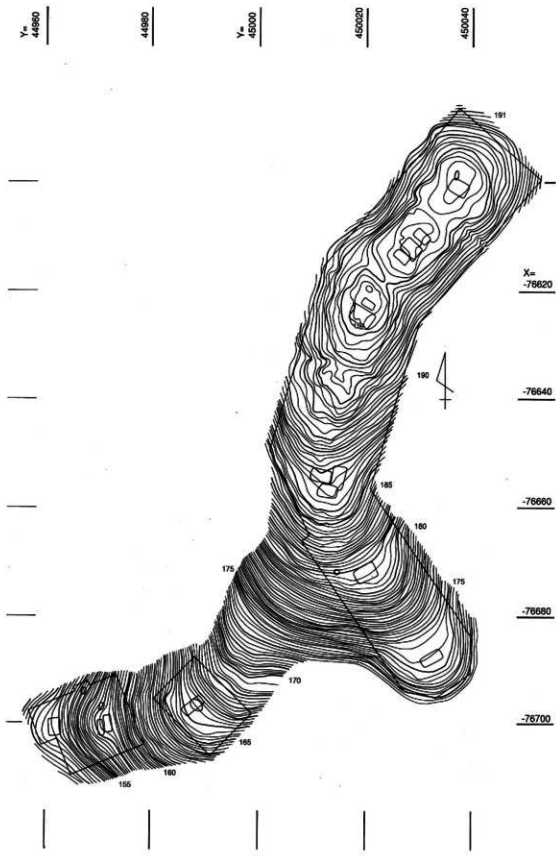
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「平成9年度 年報」1998年

神戸新聞出版センター『兵庫県大百科事典』1983年

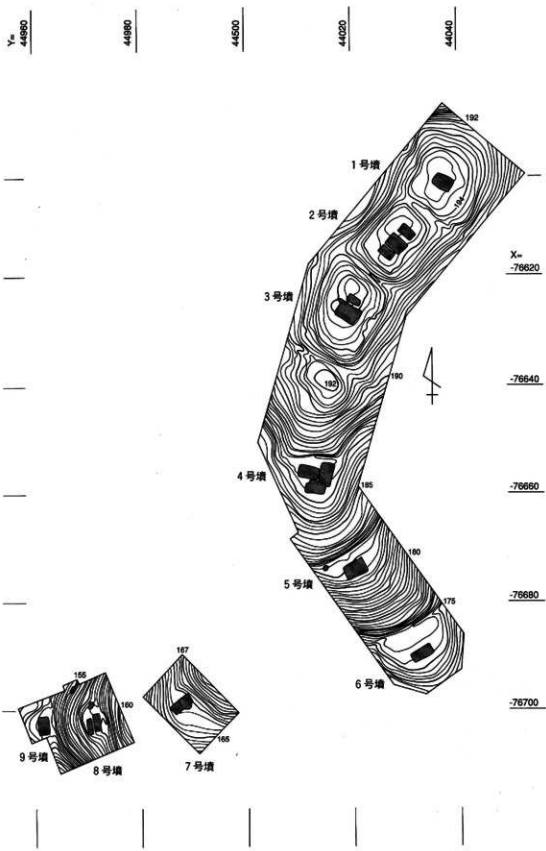
兵庫県教育委員会『簡江遺跡群』（兵庫県文化財調査報告第31冊）1985年

和田山町教育委員会『和田山町遺跡分布地図』1993年

藤井保雄・田畑基「和田山町の古代」『和田山町の歴史』和田山町史編纂室 1994年

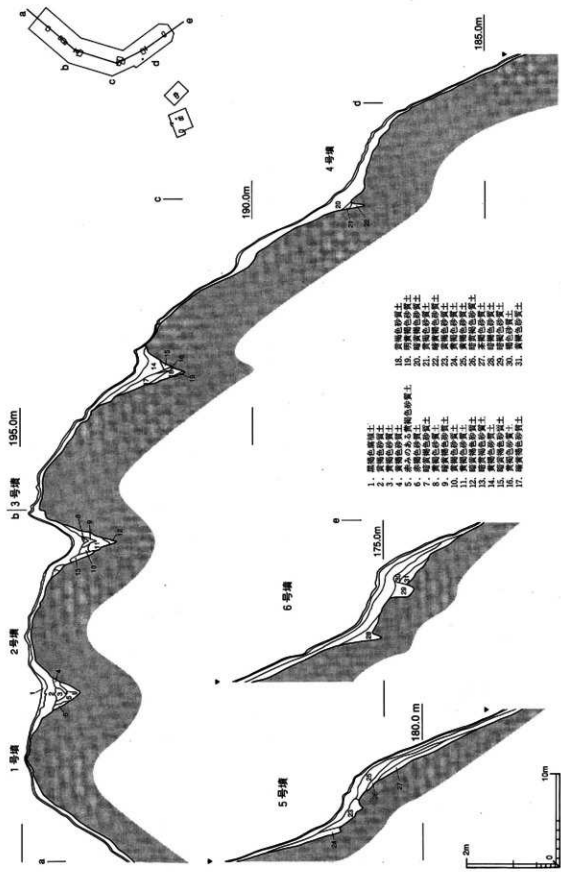


第5図 向山1～9号地地形測量図(調査前)



第6圖 向山1~9号墳地形測量圖 (調査後)





第7图 向山1~6号墳填丘土层断面图

## 第3章 向山古墳群の調査

### 第1節 概要

加都字向山および安井字矢別に位置する。北側から南側に延びる尾根上、および谷の奥部に若干延びる小尾根上に立地する。合計14基からなる古墳群であるが、今回はそのうち11基を調査した。10・11号墳以外の古墳は、尾根を若干削って整形し、尾根方向と直行する方向に溝を掘ることによって墳丘を区画している。規模は一辺が4m～14m、平均8m程度である。唯一8号墳には明確な盛土が認められた。

1号墳～3号墳は尾根の鞍部に立地しており、それ以外は尾根の先端に立地している。そのため区画した溝は1号墳～3号墳までは尾根の両側に掘られているのに対し、それ以外では尾根の高い方だけに掘られている。

主体部は木棺直葬と箱式石棺がほとんどで、2号墳のみが堅穴式石室である。主体部の数については、2・3・4・8号墳が複数の主体部をもつ。

出土遺物は、2号墳から内行花文鏡が出土しており、特筆される。また、5号墳・11号墳からは比較的豊富な鉄製遺物が、6号墳・11号墳からは玉類が出土している。土器は墳丘から出土するもの、墓室内で主体部の外に置かれたもの、2号墳のように、墓室内の埋土に掘えられた状態で出土したものがある。

### 第2節 向山1号墳

#### 1. 概要

向山2号墳の北東側で、尾根鞍部の北端部に位置する。主体部は1基で墳丘中央部にあり、尾根筋と直交する位置で木棺が検出された。出土遺物は土師器壺などが2号墳と共有する区画溝から出土し、墳丘上からも土器（土師器壺、甕、高坏）が出土している。

#### 2. 立地

向山古墳群では1～3号墳が最も高い尾根上の鞍部に位置し、その北端に位置するのが1号墳で、標高は174mである。

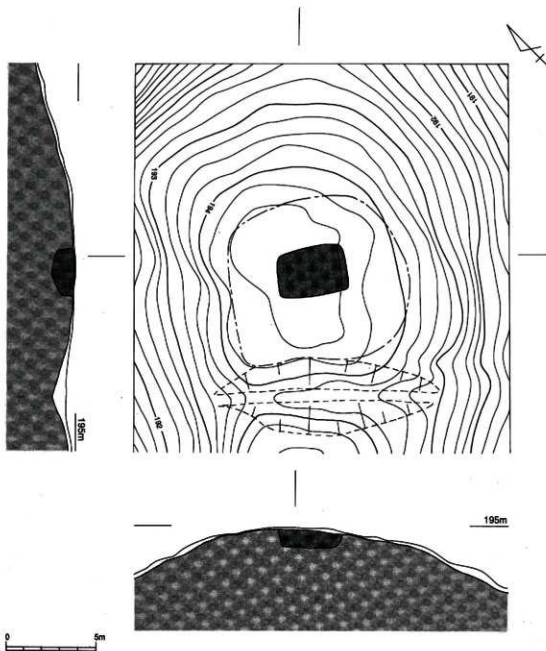
#### 3. 墳丘

尾根鞍部の北端に築造されており、方形を意識した平面形で、長さ9.50m、幅8.60m、高さ1.20mを測る。北東側は自然地形のままで、南西側は2号墳と共有する溝で区画されている。調査では盛土は確認できなかったが、区画溝の埋土や墳丘表面を覆う流土の状況から古墳築造当時には、幾らかの盛土が存在していたと思われる。

墳丘から遺物が出土している。3区溝付近からは土師器二重口縁壺(2)、土師器甕(3)が、4区溝付近からは土師器高坏(4)が出土した。

#### 4. 区画溝

墳丘の南西側に検出した溝は2号墳と共有し、溝底ではほぼ直線的な溝である。長さ12.20m、上幅4.10m、下幅0.70m、高さ0.6mを測り、溝の断面形はV字形である。この溝からは土師器の二重口縁壺



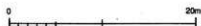
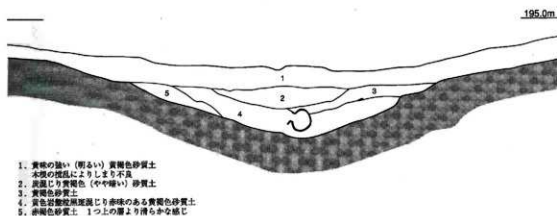
第8図 向山1号墳丘測量図

(1)が出土しているが、この区画溝は1号墳と2号墳が共有しているので、本来いずれに所属していたかは不明である。

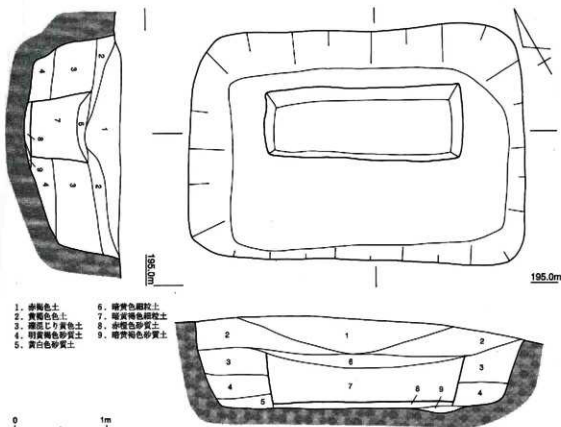
##### 5. 第1主体部

長軸方向は北から60°西に振っている。墓壇の長さ3.60m、幅2.60m、深さ1.00mを測り、平面形は長方形である。墓壇の底には棺を据えるための浅い掘り込みがあり、ゆるやかなU字形を呈する。墓壇の断面形は縦横ともおおむね台形を呈する。

木棺は内法で長さ2.14m、幅0.76m、高さ0.52mを測る。棺底部付近には赤色顔料（パイプ状ベンガラ、朱）と小礫をまじえた砂質土（第8層）が認められ、床面または棺内底に敷かれていたようである（詳細は第7章第5節）。なお、木棺内からは遺物は出土しなかった。



第9図 向山1・2号墳間区画横断面図



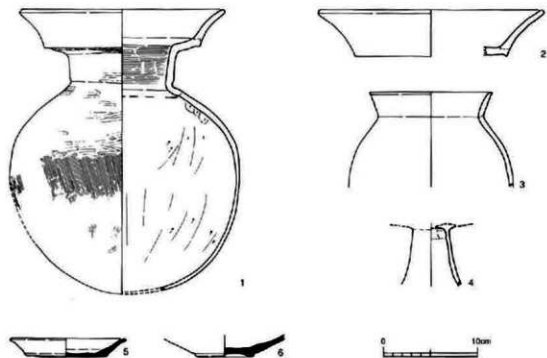
第10図 向山1号墳第1主体部

## 6. 出土遺物

古墳に伴うものとして土師器の壺・甕・高坏がある。ほかに古墳に伴わないものとして須恵器皿がある。いずれも墳丘、区画溝からの出土であり、磨滅が著しい。

## 土師器

1・2は二重口緑壺である。1はほぼ完形である。底部は若干割れており、焼成後の穿孔とも考えられるが明らかでない。全体に磨滅しており、調整の不明な部分も多い。特に外面は磨滅が著しい。2は口縁部だけの破片で、磨滅のため調整は不明である。



第11図 向山1号墳出土遺物

3は甕である。磨減が著しく調整は不明である。口縁端部は若干外方へ膨らんでおり、端部は丸い。

4は高環の胸部片である。内面には坏部との接合部付近に強いナアが認められる。

#### 須恵器

5・6は須恵器の皿である。底部はヘラ切りで、全体に雑なつくりである。口縁部の上面には4cm×0.5cmほどの黒色のタール状のものが付着している。6は低く平らな高台をもち、体部は浅く広がる。

## 第3節 向山2号墳

### 1. 概要

尾根の鞍部に立地する。方形に成形された墳丘から3基の主体部が検出された。木棺が2基、竪穴式石室が1基である。遺物の出土位置は、墳丘の3号墳側、1・3号墳との区画溝、および第2主体部の墓域内と石室内である。遺物には金属器（内行花文鏡、ヤリガンナ）と土器がある。

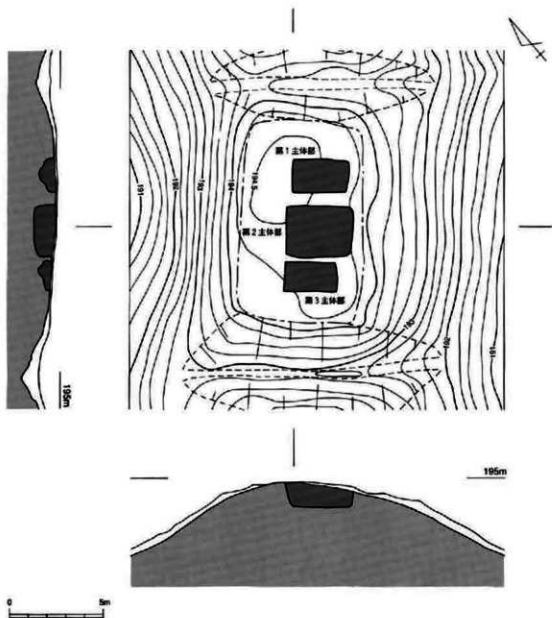
### 2. 立地

向山古墳群が位置する尾根鞍部の最高所に位置する。尾根は北東側から南西側に延びている。向山1号墳、および向山3号墳とは区画溝を隔ててそれぞれ北東側、南西側に接する。

### 3. 墳丘

長さ10.6m、幅6.5m、高さ1.9mを測る。直線的な区画溝により、墳形は方形を意識したものとなっている。盛土は確認できず、地山を削り出して整形しているようである。長軸は北から41°東の方向を向き、尾根の方向と一致している。

土器が出土しており、10・12・13が3号墳側から、11が4号墳側から出土している。



第12図 向山2号墳丘測量図

#### 4. 区画溝

北東側と南西側の2方向に認められ、それぞれ1号墳、3号墳と共有する。1号墳と接する北東側の区画溝は長さ122m、上幅4.1m、下幅0.7m、高さ0.6mを測る。

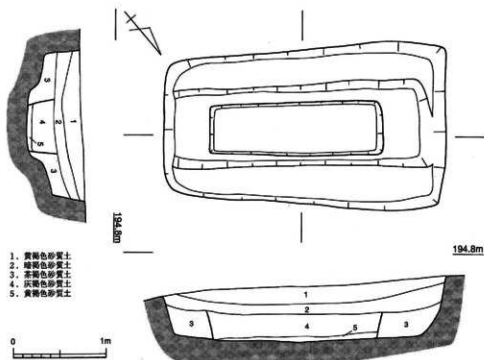
遺物が出土しており、1・5・6が溝の埋土から出土している。1号墳から落ち込んだ可能性もあるが、若干2号墳に近い位置から出土した。

3号墳と接する南西側の区画溝は長さ140m、上幅5.3m、下幅0.3m、高さ1.6mを測る。

遺物が出土しており、9が2号墳からの流れ込んだ埋土から出土した。

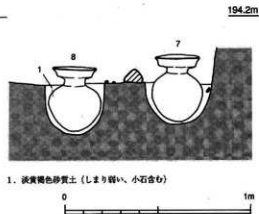
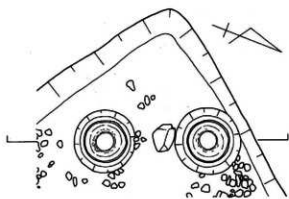
#### 5. 第1主体部

木棺である。長軸方向は北から $49^{\circ}$ 西を向いている。墓壇の長さ3.5m、幅1.62m、高さ0.58mを測り、平面形は隅丸の長方形である。棺を掘るための掘り込みがあり、小口側までつながっているため断面形は横断面がゆるい2段墓壇を呈し、縦断面は1段となっている。棺の裏込めは茶褐色砂質土（第3層）



1. 黄褐色砂質土
2. 緑褐色砂質土
3. 茶褐色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 黄褐色砂質土

第13図 向山2号墳第1主体部



1. 淡黄褐色砂質土 (しまり強い、小石含む)

第14図 墓室内土器出土状況

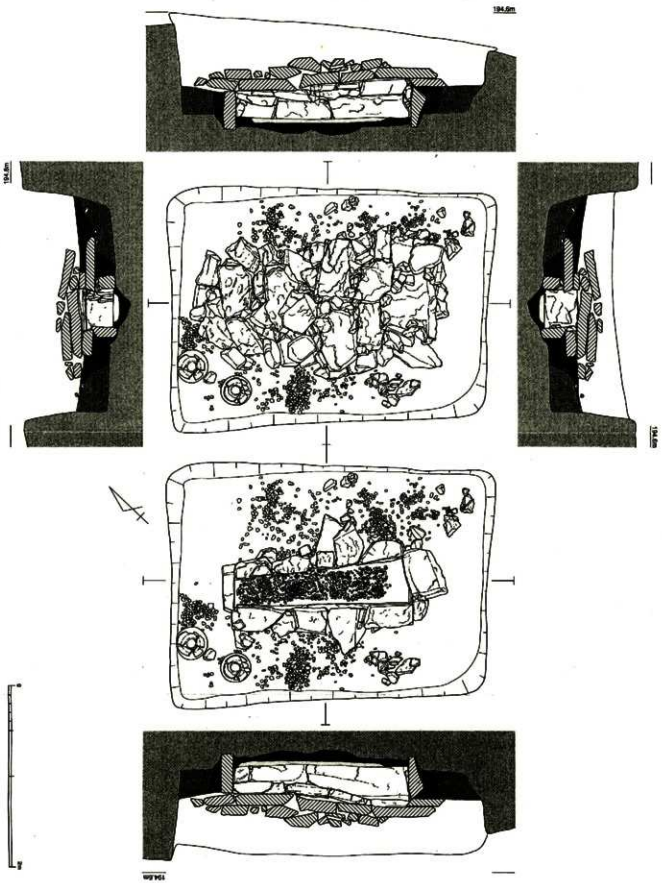
の1層からなり、墓壁の2段目から1段目にかけて置かれている。墓壁からは遺物は出土していない。

木棺は長さ1.9m、幅0.56m、高さ0.32mを測る。棺の底に黄褐色砂質土（第5層）が認められる。棺内からは遺物は出土していない。

#### 6. 第2主体部

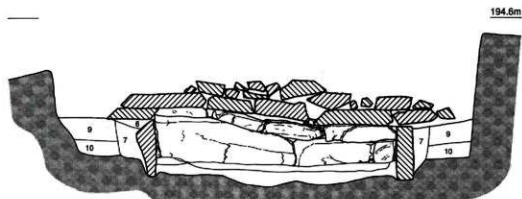
竪穴式石室である。長軸方向は北から47°西を向いている。墓壁の長さ3.46m、幅2.57m、高さ0.98mを測り、平面形は隅丸の長方形である。

墓壁の底には褐色砂質土（第8層）、淡褐色砂質土（第9層）、褐色砂質土（第10層）の3層が置かれている。その後、石材を据えるために再度掘削し、石室を構築した後、石室の裏込めに淡褐色砂質土（第7層）、茶褐色砂質土（第6層）を置いている。この段階で、墓壁内には直径3cm程度の小礫がまかれている。小礫は石室の北側、



第 5 图 山王 尊像碑 2 生付部





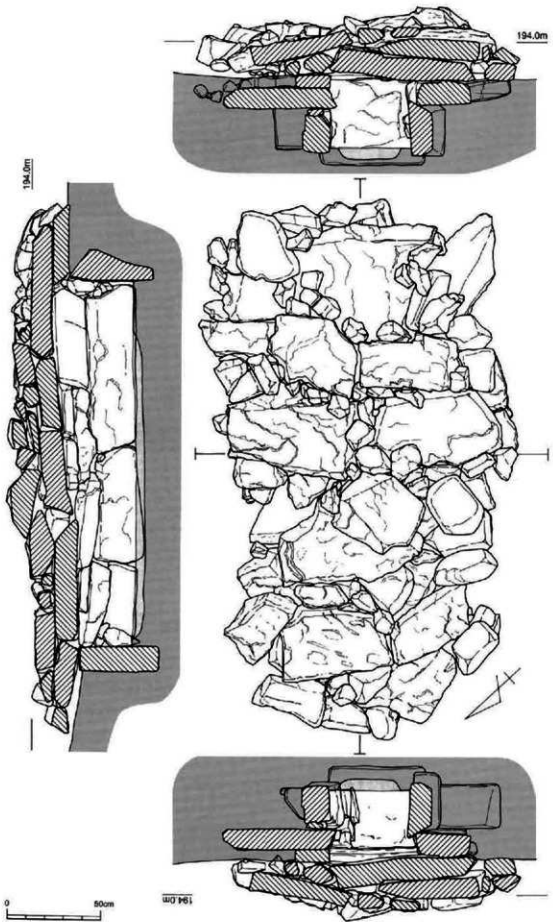
- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 黄褐色砂質土 (やや明るい)      | 7. 淡褐色砂質土 (しまり固)         |
| 2. 暗褐色砂質土              | 8. 褐色砂質土 (白色粒、黒褐色粒多い)    |
| 3. 暗褐色砂質土 (やや明るい)      | 9. 淡褐色砂質土                |
| 4. 暗黄褐色砂質土             | 10. 褐色砂質土 (白色粒多く含む、しまり強) |
| 5. 暗褐色砂質土              | 11. 小礫                   |
| 6. 茶褐色砂質土 (白色粒多い、しまり固) | 12. 劣黄褐色粘質土              |



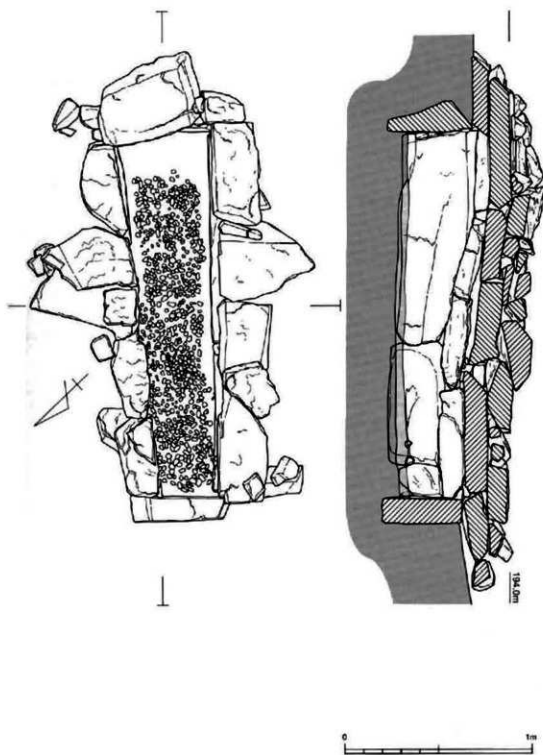
第16図 向山2号墳第2主体部土層断面図

北西側、東側、西側の大きく4ヶ所に分かれており、墓域内全体にまかれたのではなく、ある程度集中している。また、この段階で墓域の西隅付近（被葬者の足側の左）には完形の二重口縁壺（7・8）が2個体、墓域の隅を落とすような位置に据えられている。土器の内部の土を脂肪酸分析したところ、カヤの脂肪が含まれている可能性があることがわかった（詳細は第7章第7節）。土器は墓域内の埋土を掘り窪め、7は壺の体部下半、8は頸部から下まで埋められている。埋土は淡黄褐色砂質土で墓域内の埋土と変わりはないが、墓域内にまかれた小礫が含まれているため、小礫がまかれた後にこれらの土器が置かれたものと考えられる。小礫は葦石の下にも存在しているため、葦石が置かれる前に小礫がまかれたことがわかる。墓域は第1層から第4層により埋められている。

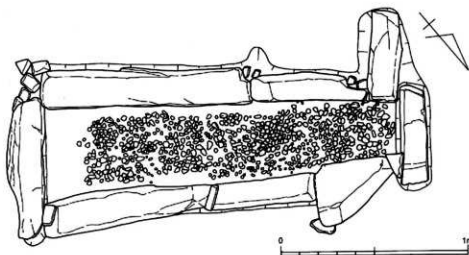
堅穴式石室は、内法で長さ1.92m、最大幅0.52m、最小幅0.28m、高さ0.30mを割り、平面形は南東側（被葬者の頭側）の幅が広いため、細長い台形を呈する。いずれの壁面も最下段は石材を立てており、特に両小口の壁面は天井付近まで1石で構成される。北東側と南西側（被葬者の左右）の壁では、南東側（被葬者の頭側）に大型の石材が使用されており、石室の半ばまで1石である。北西側（被葬者の足



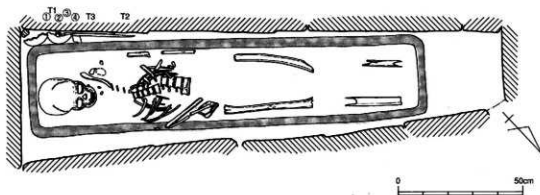
第17图 向山2号墳第2主体部石室(1)



第18図 向山2号墳第2主体部石室(2)



第19図 向山2号墳第2主体部石室基底石



第20図 向山2号墳第2主体部石室内

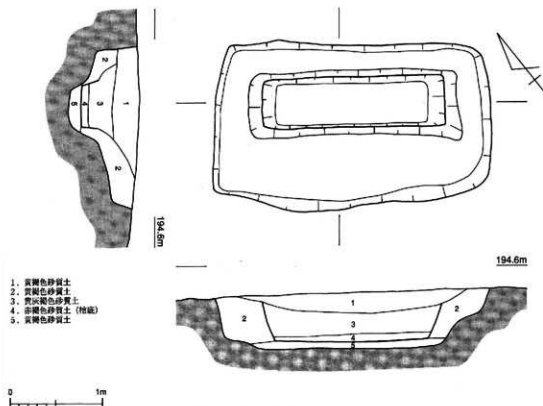
幅)に行くに従い石材は小型のものが使用されており、石室構築にあたっては頭側から築造されたことがわかる。壁面の2段目からは小口積みしており、多いところで合計3段、少ないところでも2段積みとなっている。石材の隙間には石室の内外とも部分的に小石が詰められているが、粘土は使用されていない。

石室蓋は、頭部に最大の石材を使用し、長さ0.75m、幅1.05m、高さ0.10mを測る。板状の石材を5石使用して全体を覆い、次に隙間を埋めるようにして石材を置き、その後さらに小型の石材で上を覆っている。最終的には2重に蓋石がおかれており、隙間を小石で丁寧に詰めている。蓋石にも粘土は使用されていない。

石室の壁面、および蓋石にはベンガラ（詳細は第7章第5節）が塗られていた。壁面のベンガラは石室の内側を向いている面だけでなく、その周囲の面にまで若干認められ、壁の構築以前に塗られていた可能性がある。蓋石は、石室の内側に面する部分にのみ塗られている。

また、石室内からは木棺が検出された。内法で長さ1.53m、幅0.29m、高さ6cmを測る。棺の厚さは検出面で2.5cmであった。平面形は長方形で、断面形は底が丸くなっている。石室内の南東側に偏って置かれており、北西側の足側には約30cmの空間がある。

木棺内には小纒が敷かれており、足側の棺外まで延びている。このことは、木棺が石室内の端まで存在し、足元で検出された小口側の木棺痕は木棺ではなく仕切り板であった可能性も考えられる。しかし、石室端にまで延びる木棺の痕跡は検出できなかった。また、頭部には小纒敷は認められなかった。



第21図 向山2号墳第3主体部

木棺を据えるにあたって墓壇の底をさらに掘り窪めているが、凹凸が著しく不整形であるため、明黄褐色粘質土（第12層）で埋めることにより木棺を安定させている。

木棺内からは人骨が検出された。熟年（40～60歳）程度の女性である可能性が高い（詳細は第7章第1節）。頭蓋骨には朱（詳細は第7章第5節）が良好に遺存していた。

また、石室内から遺物が出土した。被葬者の左側で、石室と木棺の隙間に、内行花文鏡1面（T1）、ヤリガンナ2点（T2・T3）が置かれていた。内行花文鏡は①～④の4つの破片に割られ、鈕は上向け、その他の破片は鏡面を上に向けて置かれていた。鈕も外縁もない破片は出土しておらず完形には接合できない。鏡の両面には部分的に繊維状の有機質の痕跡が認められ、本来は何かに包まれていた可能性も考えられる（詳細は第7章第6節）。ヤリガンナは鏡のすぐ北西側に置かれ、刃先を頭側に向け、2本がそろえられていた。

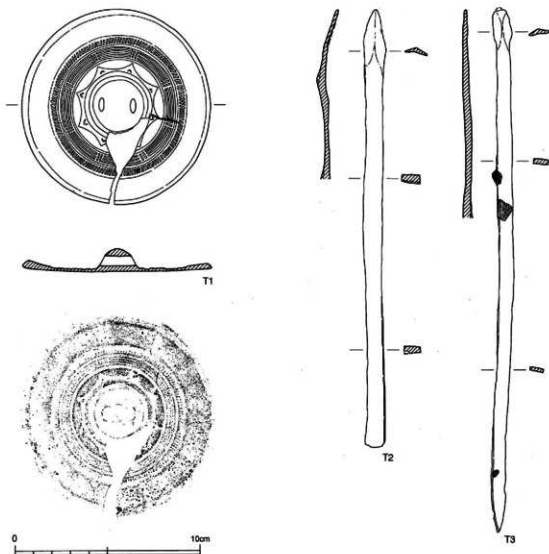
### 7. 第3主体部

木棺である。長軸方向は北から $51^{\circ}$ 西を向いている。墓壇の長さ2.95m、幅1.75m、高さ0.68mを測り、平面形は隅丸の長方形である。棺を据えるための掘り込みがあり、断面形はゆるい2段墓壇を呈す。2段目の墓壇は平面的にも立面的にも木棺より若干大きいため、木棺の下に黄灰褐色砂質土（第5層）を置くことによって高さの調節をしている。棺の裏込めは黄褐色砂質土（第2層）の1層からなり、墓壇の2段目から1段目にかけて置かれている。墓壇からは遺物は出土していない。

木棺は外法で長さ1.53m、幅0.45m、高さ0.18mを測る。棺の底に赤褐色砂質土（第4層）が認められる。棺内から遺物は出土していない。

### 8. 出土遺物

第2主体部石室内から金属器の鏡（T1）とヤリガンナ（T2・3）、墓壇内から土師器の壺（7・8）、



第22図 向山2号墳出土遺物（金属器）

墳丘・区画溝から土師器の甕(9)、小型高坏(10)、小型器台(11・12)、小型丸底鉢(13)が出土した。

#### 金属器

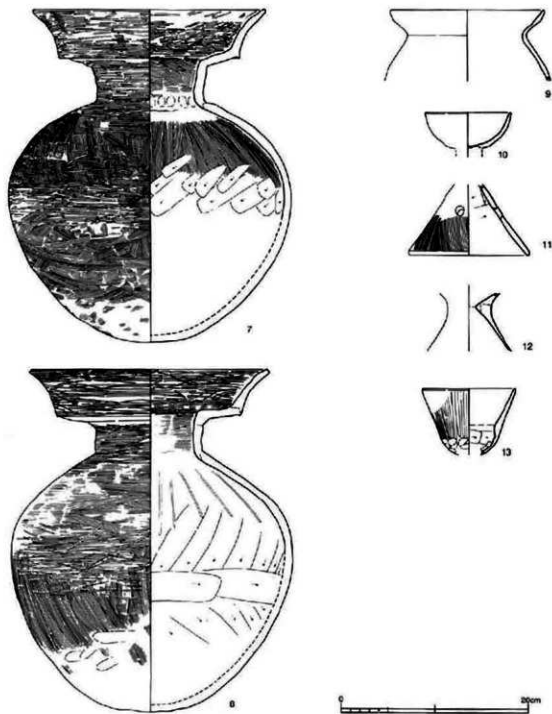
青銅製の鏡と鉄製のヤリガンナがある。

T1は内行花文鏡である。面径10.2cm、鈕高1.20cmを測る。意図的に4片に割られており、各破片には歪みが生じている。また、外縁及び鈕を含まない部分が欠けている。鏡背の文様構成は鈕区、内区、外区からなる。鈕区は円鈕で、鈕座として若干の段が認められる。内区は内周から順に平頂素文帯、内行花文帯、有節平行文帯、斜行歯歯文帯となっている。内行花文帯は8葉からなり、花文間文様は不明瞭ながらも三日月形を呈するものが存在する。有節平行文帯の節は3本の平行線によって表現されている。

T2・T3はヤリガンナである。T2は完形で、全長23.05cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、刃部長2.9cmを測る。刃部付近では若干上方へ反っている。T3も完形で、全長27.55cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。刃部先端は欠けており、現存長で2.0cmを測るが、本来は2.2cm程度であったと考えられる。茎部の先端は尖っている。部分的に布の痕跡が認められる。

#### 土器

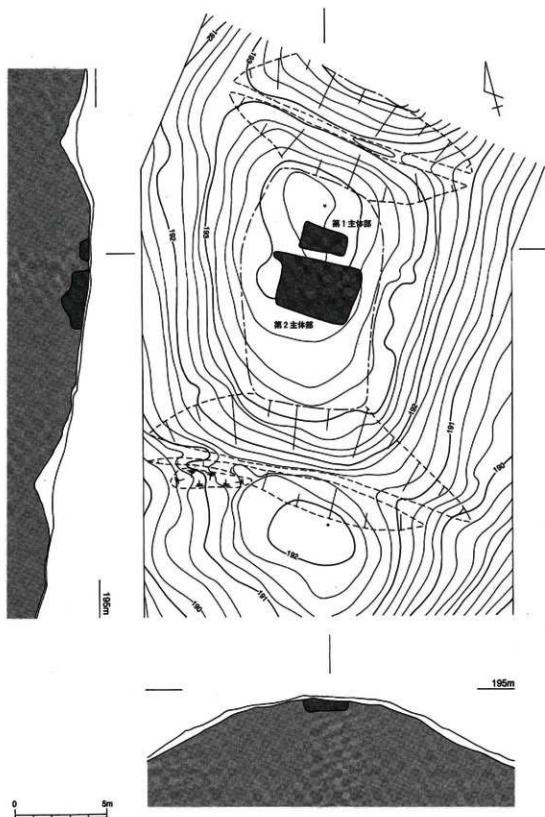
土師器のみ出土した。7・8は二重口縁壺である。墓墳内に据えられていたため、遺存状況はよく、



第23図 向山2号墳出土土遺物（土器）

調整も明瞭に観察できる。7は外面の体部上半が縦方向のハケ目、下半が横方向のハケ目であり、8とは逆になっている。また、上半には横方向の粗いヘラミガキが認められる。内面は口縁部のヘラミガキが横、一部縦方向、体部上半には縦方向のハケ目が認められる。8と比較して全体にミガキなどの調整は丁寧である。形態は、口縁部が丸く、体部はやや横に長い扁球形である。

8の外面の調整は、7と比較して粗い。7とは体部外面の調整が上半が横方向のハケ目、下半が縦方向のハケ目で、まったく逆となっている。また、体部上半のヘラミガキは認められず、中位で横方向の粗いヘラミガキが認められる。体部内面は、上位に縦方向の調整が認められ、中位は横、下位は斜めの方

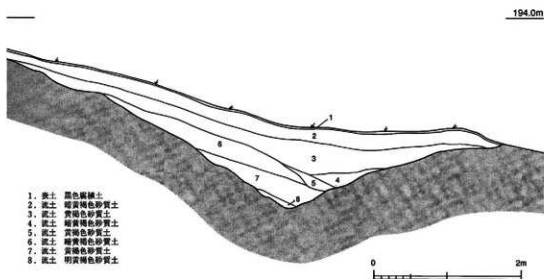
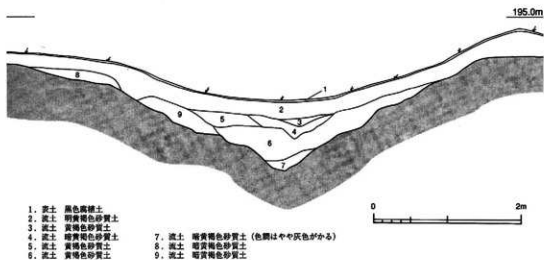


第24図 向山3号墳丘測量図

向のヘラケズリが認められる。形態の特徴は、頸部が直立し、1次口縁で水平方向に屈曲し、口縁は若干外反する。端部は平らで、にぶい沈線状のくぼみをもつ。体部はやや肩の張った球形である。

9は甕である。口縁部は若干内彎している。全体に磨滅のため調整は不明である。10は小型高坏の坏





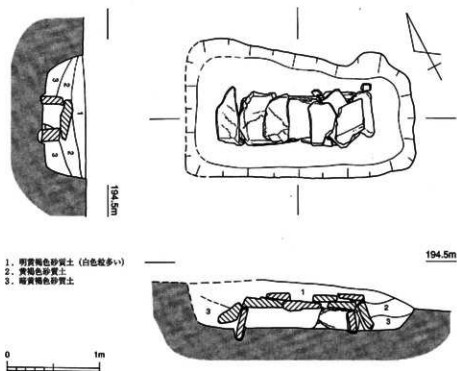
第25図 向山3号墳区画溝

部である。半球形の坏部で内外面ともハケ目調整である。11・12は小型の器台である。11は脚部で、3方向の透かしが穿たれる。外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のケズリが観察できる。13は小型丸底鉢で、外面は口縁部に縦方向のヘラミガキ、体部に指頭圧痕、内面はナデ調整、体部に横方向のヘラケズリが認められる。

## 第4節 向山3号墳

### 1. 概要

尾根の鞍部に立地する。方形を意識して成形された墳丘から2基の主体部が検出された。木棺と小型の箱式石棺で、墳丘中央には中心主体である木棺が位置し、その北側に寄り添うように箱式石棺が長軸



第26図 向山3号墳第1主体部

方向をほぼ同じくして並ぶ。遺物は、墳頂付近と北側区画溝から西斜面にかけてと南斜面の墳裾から出土しており、主体部からは出土していない。遺物はすべて土師器である。

## 2. 立地

向山2号墳が位置する尾根鞍部最高所からわずかに南へ下る。北側は区画溝を隔てて向山2号墳と接し、南側は区画溝によって一見墳丘状に残った鞍部端から切り離される。

## 3. 墳丘

長さ12.1m、幅7.7m、高さ3.0mを測る。直線的な区画溝により、墳形は方形を意識したものとなっているが、わずかに向きを変える尾根筋の形に沿って墳形も緩く屈曲する。古墳の南西側には、区画溝によって円形に取り残された尾根の先端部分がある。向山4号墳以下の古墳のように尾根先端の地形にあわせて墳形が半円形になるのではなく、区画溝によって墳丘を方形に切り出そうとする意志が感じられる。盛土は認められず、地山を削り出して墳頂部を平坦に整形しているが、区画溝の削平ほどには大きな地形の変更はされていない。長軸は北から23°東の方向に向け、尾根の方向とほぼ一致している。

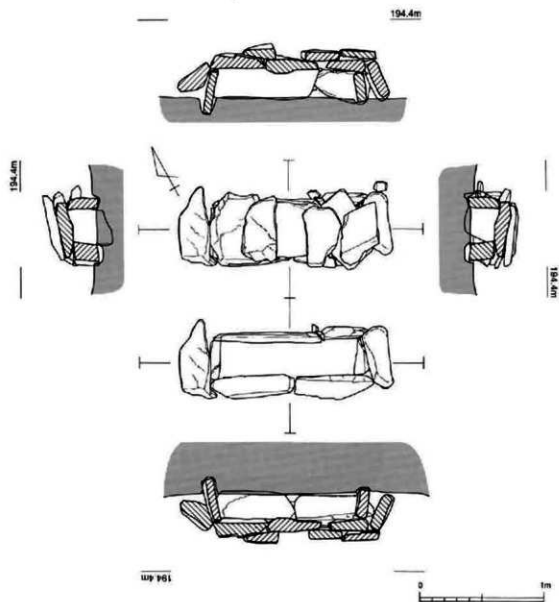
遺物が出土しており、21が1区墳裾から、14、19、20が6区墳頂から出土している。

## 4. 区画溝

北北東側と南側の2方向に認められ、北北東側は2号墳と共有する。北北東側の区画溝は2号墳の記述に準ずる。

南側の区画溝は長さ18.1m、上幅5.4m、下幅0.4m、高さ1.9mを測る。埋土は高位にある3号墳側から主に流れてきており、暗褐色砂質土と黄褐色砂質土が交互に堆積している。

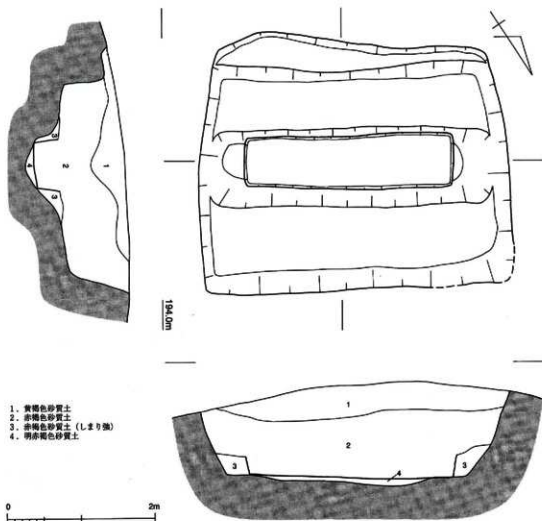
遺物が出土しており、15、16、18が5区、17が1区の区画溝から西面にかけての斜面から出土した。



第27図 向山3号墳第1主体部石棺



写真4 向山3号墳第1主体部



1. 黄褐色砂質土
2. 赤褐色砂質土
3. 赤褐色砂質土(しまり強)
4. 明赤褐色砂質土

第28図 向山3号墳第2主体部

## 5. 第1主体部

やや小型の箱式石棺である。長軸方向は北から $62^{\circ}$ 西に振っている。墓壇の長さ2.46m、幅1.32m、高さ0.50mを測り、平面形はやや歪な長方形である。墓壇の底は側石と小口石を据えるために部分的に溝状に掘り込んでいる。この掘り込みは深さ数cmの浅いものであるが、西側小口だけは約15cmと深い。

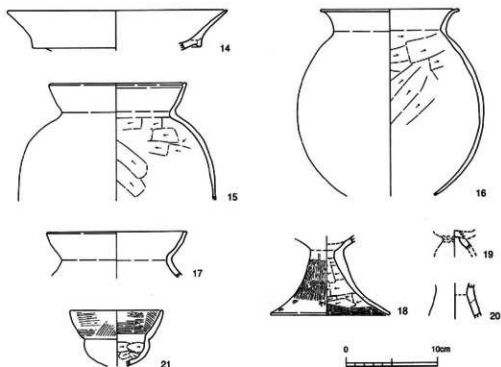
石棺は内法で長さ1.14m、幅0.29m、高さ0.23m、外法で長さ1.69m、幅0.54m、高さ0.43mを測る。棺材はすべて板状に割り取られた石材が使用されている。石棺は両小口に各1石、両側板に各2石を使用し、両小口の外側には控えの1石を斜めに立てかけるように置いている。小口石は長側石にはさみこまれ、北側側石の隙間は数個の小石で埋めている。

蓋石はまず平らな3石を並べ、その上に少し小さめの3石を置いて、隙間を埋めている。よって部分的に2重になっているものの、基本的には蓋石は1重である。

棺内は土が充満しており人骨は遺存しておらず、遺物も出土していない。

## 6. 第2主体部

木棺である。長軸方向は北から $57^{\circ}$ 西を向いている。墓壇の長さ4.13m、幅3.25m、高さ1.42mを測り、平面形は長方形で、南辺にごく浅い段を設ける。棺を据えるための掘り込みが両小口側までつながるため、横断面がゆるやかな2段墓壇を呈すのに対して縦断面は1段となっている。木棺の下には明赤



第29回 向山3号墳出土遺物（土器）

褐色砂質土（第4層）を敷いて墓墳の底の高さを調節し、平坦化している。棺の裏込めは赤褐色砂質土（第3層）の1層からなり、墓墳の2段目から1段目にかけて置かれている。墓墳から遺物は出土していない。

木棺は内法で長さ2.74m、幅0.68m、高さ0.33mを測る。棺内から遺物は出土していない。

#### 7. 出土遺物

すべて墳丘・区画溝から出土しており、磨滅が著しい。二重口縁壺・甕・高坏・小型丸底鉢がある。

#### 土師器

14は二重口縁壺である。口縁部のみ残存しており、受部は粘土を貼り付けることにより外方へ張り出してあり、その上に口縁部をのせている。調整は摩滅のため不明である。15・16・17は甕である。15は球形の体部にやや外傾した口縁部をもつ。口縁部は若干内彎し、端部は内側へ肥厚する。体部内面にヘラケズリが認められる。口縁部はナデにより調整される。16は球形の体部に外反する口縁部をもつ。体部内面にはヘラケズリが認められ、口縁部はナデにより調整される。17は口縁部のみで、若干内彎している。端部は上方にやや面をもつものの丸くおさめている。

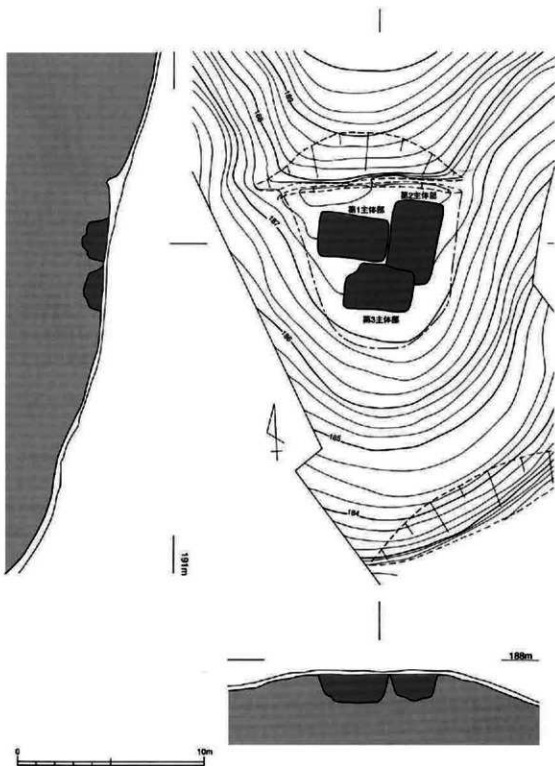
18は高坏である。ラップ状に大きく開く脚部で、外面には縦方向のミガキ、内面上方には横方向のヘラケズリ、下方には横方向のハケメが認められる。19は脚部片で、全体に小型のつくりである。20も高坏の脚部片と思われるが、破片のため明らかでない。調整は摩滅のため不明である。

21は小型丸底鉢である。偏球形の体部に、内彎する口縁部をもつ。体部内面はヘラケズリ、口縁部は内外面ともハケメが確認できる。

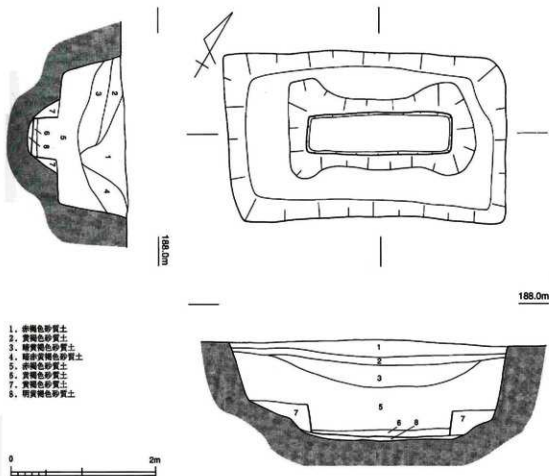
## 第5節 向山4号墳

### 1. 概要

向山1～3号墳の存在する尾根鞍部から南側に下った場所に位置する。主体部は3基で、尾根筋と直交する位置で第1および第3主体部が、平行する形で第2主体部が検出された。いずれも木棺である。



第30図 向山4号墳墳丘測量図



第31図 向山4号墳第1主体部

また、出土遺物は北側区画溝内から出土したのみである。

## 2. 立地

3号墳の南側で、尾根鞍部を少し下った尾根先端部に位置し、標高は187mである。

## 3. 墳丘

尾根先端部に築造されており、山側を削ったため半円形になる。規模は長さ8.50m、幅9.50m、高さ0.2mを測る。墳丘の高さは山側（北側）からの溝のため低く、南側はなだらかに傾斜する。壘土は認められなかった。

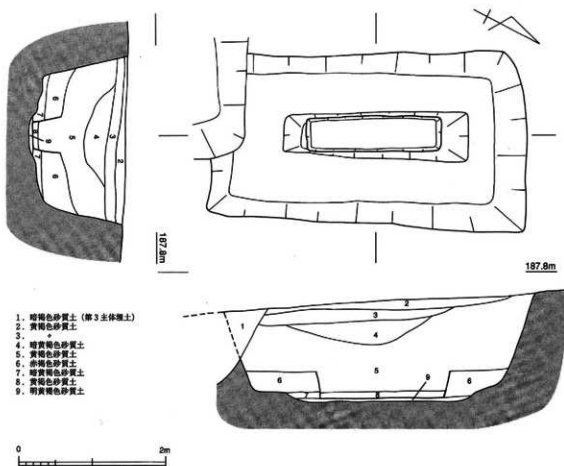
## 4. 区画溝

墳丘の北側には区画溝があり、長さ11.20m、上幅2.80m、下幅0.30m、高さ1.7mを測り、溝の断面形はU字形である。溝内からは22の須恵器（坏身）が出土しているが、この古墳に伴うものではなく、むしろ上方から流れ込んだ状況である。

## 5. 第1主体部

木棺である。長軸方向は北から59° 東に振っている。墓壇の長さ3.75m、幅2.14m、深さ1.34mを測り、平面形は長方形である。断面については長軸側はゆるやかな台形を呈するが、短軸方向は棺を据えるために墓壇底部分は2段となっている。

木棺は内法で長さ1.88m、幅0.56m、高さ0.35mを測る。棺底には置き土（第8層）が認められ、その上の第6層は棺底材を反映する土層の可能性がある。



第32図 向山4号墳第2主体部

## 6. 第2主体部

木棺で、長軸方向は北から28°西に振っている。墓壇の長さ4.20m、幅2.23m、深さ1.32mを測り、平面形は長方形である。南西部の一部は第3主体部に切られている。断面は、長軸方向にはゆるやかな台形を呈するが、短軸方向は棺を据えるために墓壇底部分がやや2段になっている。

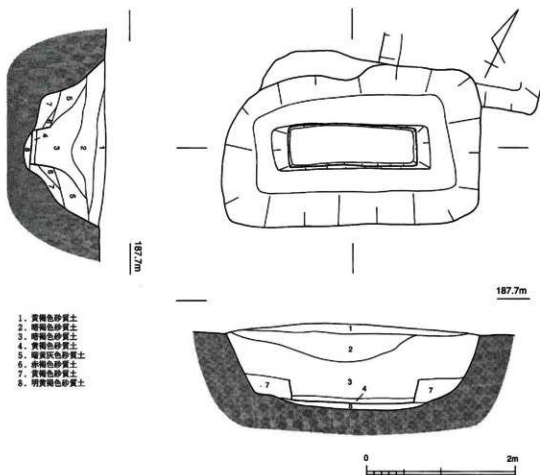
木棺は内法で長さ1.68m、幅0.35m、高さ0.38mを測る。棺底には置き土が施され(第9層)、その上部に棺底材を反映した土層(第8層)も確認された。なお、遺物は出土しなかった。

## 7. 第3主体部

木棺で、長軸方向は北から63°東に振っている。墓壇の長さ3.41m、幅2.22m、深さ1.11mを測り、平面形は歪な長方形である。断面は長軸方向にはゆるやかな台形を呈するが、短軸方向は棺を据えるために墓壇底部分はやや2段になっている。

木棺は内法で長さ1.66m、幅0.44m、高さ0.30mを測る。棺底には置き土(第6層)が認められ、その上部に棺底材を反映した土層(第4層)が検出された。なお、遺物は出土しなかった。





1. 黄褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土
3. 暗褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗黄灰色砂質土
6. 赤褐色砂質土
7. 黄褐色砂質土
8. 明黄褐色砂質土

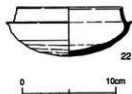
第33図 向山4号墳第3主体部

## 8. 出土遺物

須恵器が1点、区画溝から出土した。

### 須恵器

坏身1点が図化できた。22は全体に深いつくりである。立ち上がりが長く、端部に斜めの段をもつ。受部は平らで外側に張り出している。ヘラケズリが1/2以下に認められる。



第34図 出土遺物

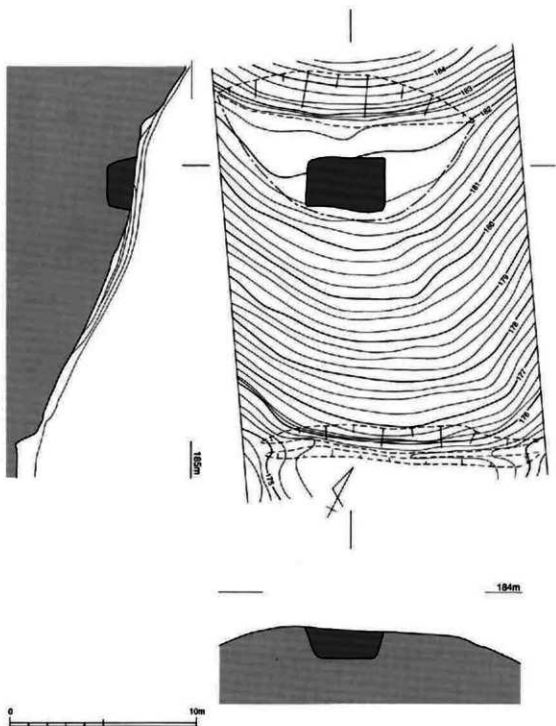
## 第6節 向山5号墳

### 1. 概要

向山4号墳から南東方向に下降しながら延びる尾根上に位置する。主体部は1基で墳丘の斜面下方に片寄ったところにあり、主軸を尾根筋と直交させる。箱式石棺が検出された。棺内には人骨が遺存し、墓壇底からは土器（土師器高坏）、金属器（鉄鏃、ヤリガンナ、刀子）が、石棺内からは金属器（刀、短刀、鉄鐔）がそれぞれ出土している。

### 2. 立地

向山古墳群の立地する丘陵は向山4号墳から南東方向と西方向へ向かって高度を下げながら二筋の尾根を延ばすが、5号墳は南東方向側の尾根の中程に位置する。標高は182mである。尾根筋はさらに下



第35区 向山5号墳墳丘測量図

へ並び、その先には6号墳が築造されている。

### 3. 墳丘

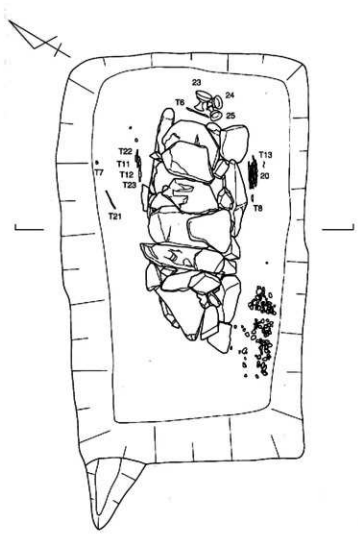
尾根筋の中程に築造されており、山側を削っているため墳形は半円形に類するが、長さよりも幅が広いのでどちらかといえば弓形である。長さ4.90m、幅13.80mを測るが、高さは無く平坦にしているのみである。盛土は認められず、山側を削ることにより平坦面を造り出している。山側の削平は、広く緩やかな1段目と、平坦部の際を急角度に切り落とした2段目があり、後者を区画溝を意識したものとするとその長さ13.80m、高さ1.90mを測る。

4. 第1主体部

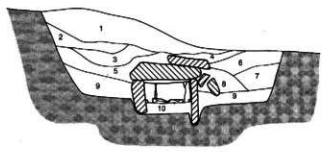
箱式石棺である。長軸方向は北から62°東に振っており、長軸方向は半円形をした墳丘の直線方向にほぼ揃っている。墓壇の長さ4.30m、幅2.59m、高さ0.92mを測り、平面形は長方形である。墓壇の底は小口石と長側石を据えるための掘り込みがあり横断面、縦断面とも2段墓壇となっている。

1段目の墓壇は底の高さに差があり、短軸方向では山側が谷側に比べてやや高く、長軸方向では被葬者の足側から頭側にむかって緩く傾斜している。

2段目の墓壇と石棺の外法はほぼ同じ大きさで、掘り込みの壁に接して側石を据えている。小口石はさらに一段深く溝を掘って石を据えているが、足側では溝の幅が石の厚みの倍ほどあり、深さも5cmほど深い。長側石では上面の高さが揃うよう、石の形や大きさに合わせて部分的に溝を掘り込んで調整している。底面の高さは長軸方向の方向で足側から頭側にむけての緩やかな傾斜があるものの、短軸方向では水平に調整されている。このため、1段目の墓壇からの掘り込みの深さは谷側が浅く5cm程



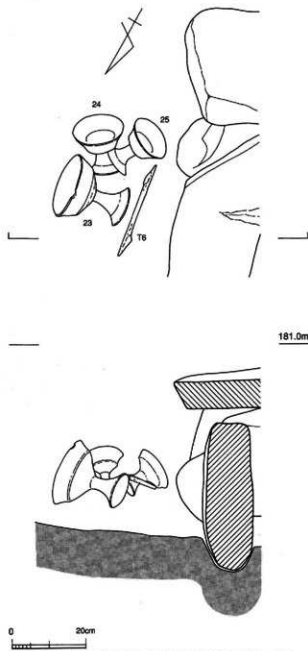
182.0m



- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1. 黄褐色砂質土          | 6. 灰褐色砂質土 (赤褐色混じる)   |
| 2. 赤褐色砂質土          | 7. 灰褐色砂質土            |
| 3. 赤褐色砂質土 (白色粒混じる) | 8. 灰褐色砂質土 (白色粒混じる)   |
| 4. 赤褐色砂質土          | 9. 灰褐色砂質土 (しまりやや細かい) |
| 5. 赤褐色砂質土 (やや明るい)  | 10. 黄褐色砂質土           |



第36図 向山5号墳第1主体部



第37図 向山5号墳第1主体部石棺外遺物出土状況

出面の高さは他よりも高い位置にある。T21は墓底の鉄鍔と同じく先端を上に向ける。

南群の鉄鍔と刀子も同様に刃先の向きを上向きに揃える。鉄鍔8点は多少の重なりはあるがばらけたような状態で、筒状の東にはなっていなかった。布の痕跡もまったく認められなかったため、向山11号墳や市条寺1号墳出土例のように布でくるまれてはいなかったと考えられる。

小塚は墓南隅の一角に約1m×0.5mの範囲に撒かれており、西側ほど散漫である。また北群の鉄器の近くにも数個の小石がある。これらは墓底ではなく第9層の上面で撒かれたものである。

石棺は内法で長さ1.85m、幅0.47m、高さ0.28m、外法で長さ2.58m、幅1.13m、高さ0.77mを測り、平面形は両端部に対して中央部が膨らむ。石棺は両小口に各1石を使用し、長側石がこれを挟み込んでいるが、右足側の1個石だけは飛び出さず、小口石にそろう。北側石は1段で3石を使用し、2ヶ所ある隙間を小さな板石4枚で塞いでいる。南側側板は2段で内側に4石、外側には6石を使用している。

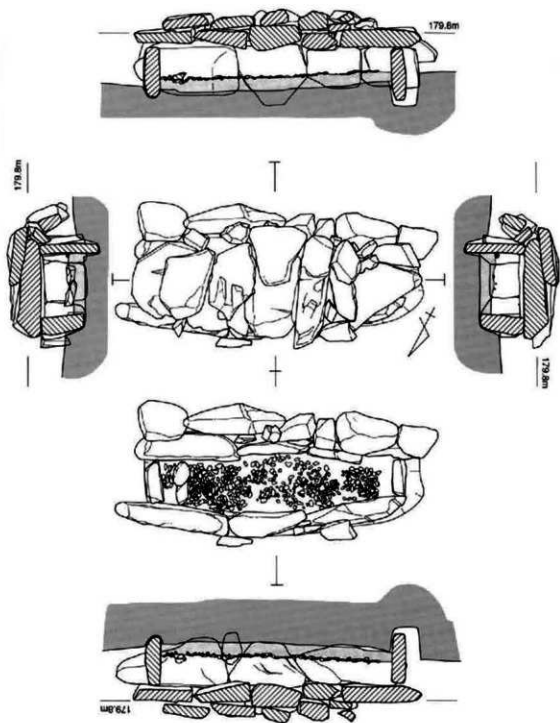
で、山側が深く約20cm程となっている。

墓底の底には、部分的に小塚が敷かれていた。遺物が出土しており、墓底に直接置かれたものと、灰褐色砂質土(第9層)で10~20cm程埋めた後に置かれたものがある。

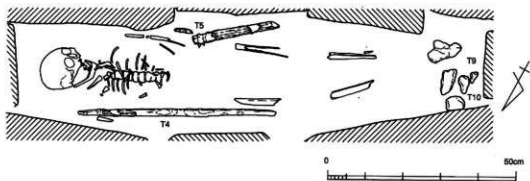
墓底の遺物は鉄鍔4点(T11・12・22・23)で被葬者の頭の右あたりに先端を上にして置かれていた。第9層上面の遺物は被葬者の頭側(北東側)に東と南と北の3群に分けて置かれており、ちょうど頭部の三方を囲むような位置にある。小口石から10cmほど離れた東群には土師器高坏3点(23~25)とヤリガンナ1点(T6)があり、北群では北側石から離れてヤリガンナ1点(T7)と鉄鍔1点(T21)が、南群では南側石に沿うように刀子1点(T8)と鉄鍔8点(T13~20)が出土した。墓底の鉄鍔4点も位置的に言えば北群の一部を構成するといえる。

東群の土師器高坏は倒れているが3点とも完形で、互いにほとんど接している。ヤリガンナは小口石に沿わせて、土師器高坏の脇に置き、刃先を南に向けている。

北群ではヤリガンナ(T7)と鉄鍔(T21)は長側石から離れて墓壁際であり、第9層の厚みが増すことから、検



第38図 向山5号墳第1主体部石棺



第39図 向山5号墳第1主体部石棺内遺物出土状況

外側の石は墓坑底を第9層で埋めた後に斜めに置かれており、北側石に比べ幾分小さい内側の石を支えようとしたものと思われる。両側石とも頭側側の1石は最も大きく安定感のある石のが用いられており、頭部を強く意識していることがうかがえる。

蓋石は大型で平らな5石を中心とし、その隙間にやや小型の石を4枚乗せた後に、さらに小さな割石を詰めている。よって部分的に2重になっているものの、基本的には蓋石は1重である。

棺身を構成する小口石と長側石の石材は川原石が使用されているのに対して、蓋石のうち最初に置かれた頭側の2枚には割石が使用されている。隙間を塞ぐ小さめの板石や詰め石にも一部割石が用いられている。

棺内は2段墓坑のため墓坑の底よりも1段深くになっているが、これを埋めるように約10cmの厚さの置き土があり、その上には3～4単位に分かれて小礫が敷かれている。小礫はほぼ全面に敷かれているが、石枕の北隅、足側（西側）の小口石付近などには空白部がある。石材は墓坑底に撒かれたものと同様で、やや緑がかった砂利石である。

棺内の北東側には小礫の上に石枕が置かれ、2枚の割石を谷形に据えて頭部を受けている。石枕と小礫は長側石と接するものがあり、棺内に木棺が置かれた可能性は無い。

棺内からは人骨と遺物が出土しており、赤色顔料が認められた。棺内は流入した土によって約半分ほどが埋まっており、蓋をあけた時には頭骸骨の上半分だけが見えていた。

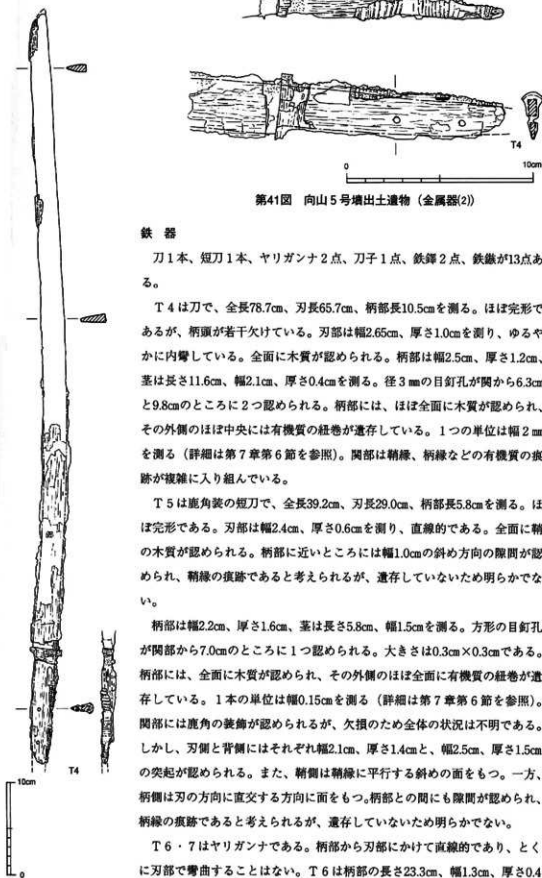
人骨は頭を石枕の上に乗せて北東を向いている。頭骸骨、下顎骨、椎骨と肋骨の一部、および四肢骨の一部などが残るものの、胸部以下の残存状態は悪かった。鑑定の結果、被葬者は40代～60代の男性と判明した（第7章第1節参照）。

棺内の遺物は刀（T4）、短刀（T5）、鉄鐔（T9・T10）があり、被葬者の右側に刀を、左側に短刀をそれぞれ切先を下に向けて置き、足下には小口石の際に、粘土状の塊3個によって隔てられた鉄鐔を2点置く。刀と短刀は切先の位置が大腿骨の中程あたりではは揃い、鞘に入れて副葬している。鉄鐔の置かれた場所は礫敷きの無い一角である。

赤色顔料は頭骸骨と長側石の内面上方にかすかに認められた。いずれも土に埋まっていなかった部分である。サンプルが採取できず、分析を行えなかったため顔料の種類は不明である。

##### 5. 出土遺物

鉄器が20点、土師器が3点出土した。いずれも、主体部内からの出土で、T4・5・9・10は石棺内からの出土、それ以外は石棺外から出土している。



第41図 向山5号墳出土遺物(金属器(2))

### 鉄器

刀1本、短刀1本、ヤリガンナ2点、刀子1点、鉄錐2点、鉄鎌が13点ある。

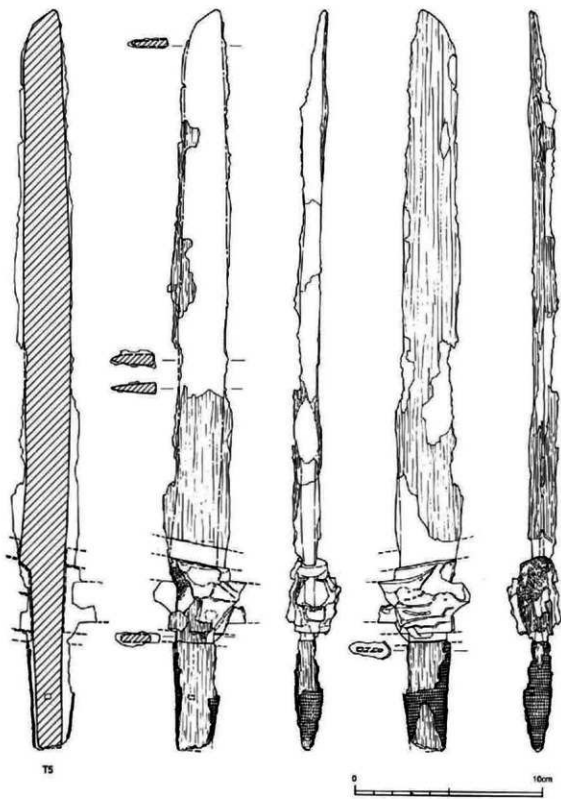
T4は刀で、全長78.7cm、刃長65.7cm、柄部長10.5cmを測る。ほぼ完形であるが、柄頭が若干欠けている。刃部は幅2.65cm、厚さ1.0cmを測り、ゆるやかに内彎している。全面に木質が認められる。柄部は幅2.5cm、厚さ1.2cm、茎は長さ11.6cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmを測る。径3mmの目釘孔が関から6.3cmと9.8cmのところに2つ認められる。柄部には、ほぼ全面に木質が認められ、その外側のほぼ中央には有機質の紐巻が遺存している。1つの単位は幅2mmを測る(詳細は第7章第6節を参照)。関部は鞘縁、柄縁などの有機質の痕跡が複雑に入り組んでいる。

T5は鹿角装の短刀で、全長39.2cm、刃長29.0cm、柄部長5.8cmを測る。ほぼ完形である。刃部は幅2.4cm、厚さ0.6cmを測り、直線的である。全面に鞘の木質が認められる。柄部に近いところには幅1.0cmの斜め方向の隙間が認められ、鞘縁の痕跡であると考えられるが、遺存していないため明らかでない。

柄部は幅2.2cm、厚さ1.6cm、茎は長さ5.8cm、幅1.5cmを測る。方形の目釘孔が関部から7.0cmのところに1つ認められる。大きさは0.3cm×0.3cmである。柄部には、全面に木質が認められ、その外側のほぼ全面に有機質の紐巻が遺存している。1本の単位は幅0.15cmを測る(詳細は第7章第6節を参照)。関部には鹿角の装飾が認められるが、欠損のため全体の状況は不明である。しかし、刃側と背側にはそれぞれ幅2.1cm、厚さ1.4cmと、幅2.5cm、厚さ1.5cmの突起が認められる。また、鞘側は鞘縁に平行する斜めの面をもつ。一方、柄側は刃の方向に直交する方向に面をもつ。柄部との間にも隙間が認められ、柄縁の痕跡であると考えられるが、遺存していないため明らかでない。

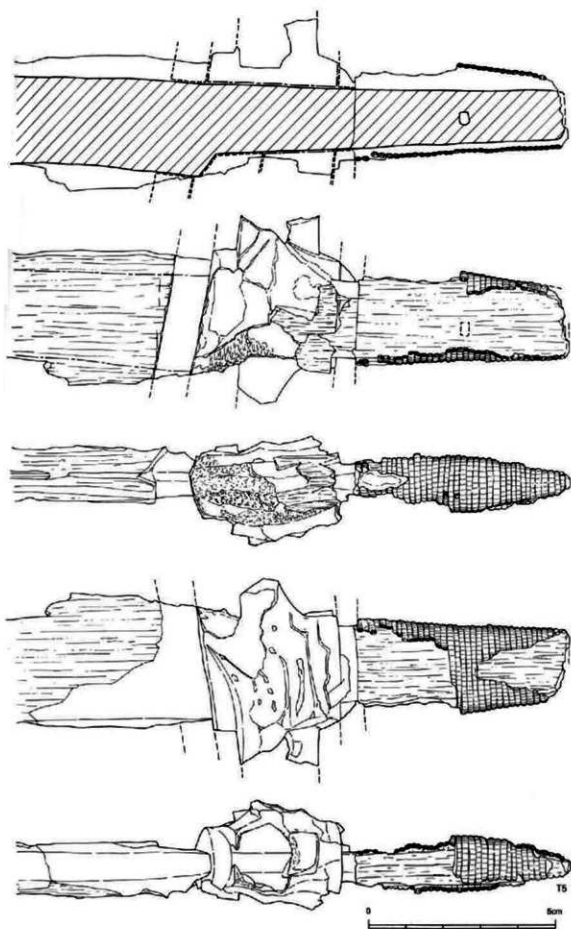
T6・7はヤリガンナである。柄部から刃部にかけて直線的であり、とくに刃部で彎曲することはない。T6は柄部の長さ23.3cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。柄部には木質とそこに斜め方向に巻かれた樹皮が認められる。

第40図 出土遺物

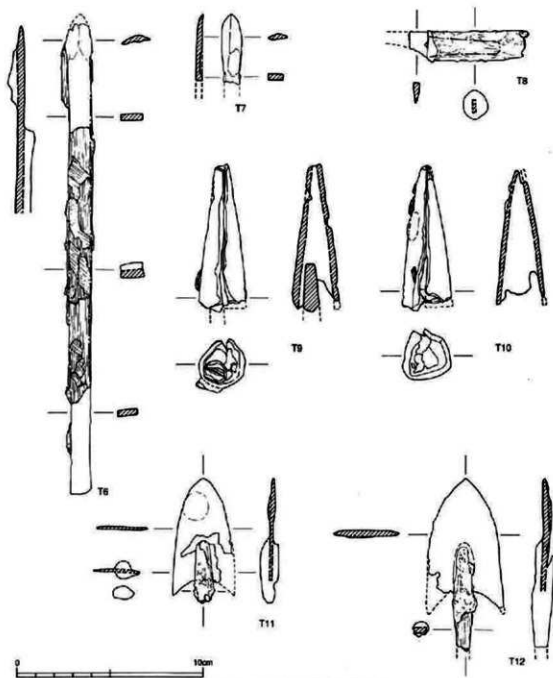


第42回 向山5号墳出土遺物（金属器(3)）





第43圖 向山5号墳出土遺物(金屬器(4))



第44図 向山5号墳出土遺物(金属器5)

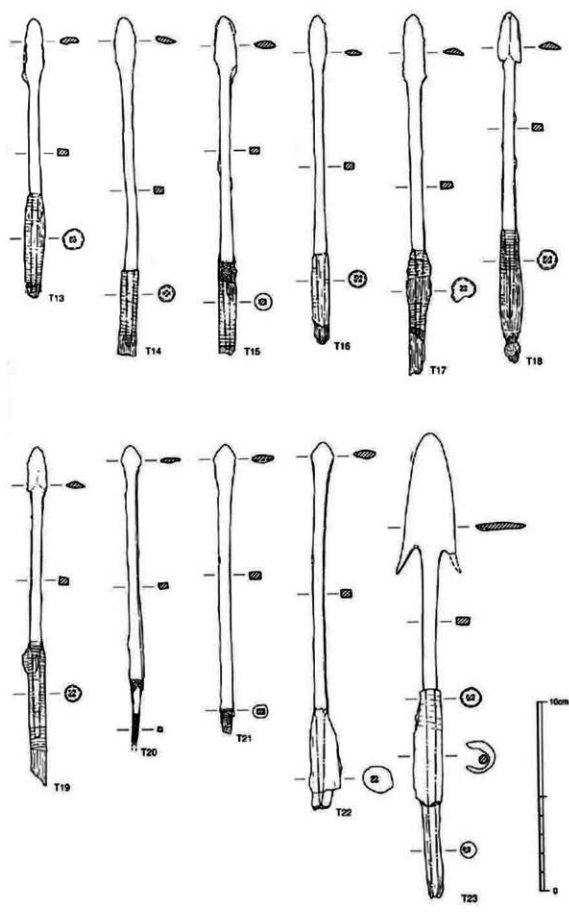
木質は刃部の近くまで認められている。刃部は現存長21.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。T7は刃部のみ残存している。現存長3.7cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。

T8は刀子である。刃部の大半が欠損しており、現存長は6.4cmを測る。刃部は現存する部分で長さ0.8cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。柄は鹿角製で、現存長5.3cm、幅1.6cm、厚さ1.3cmを測る。

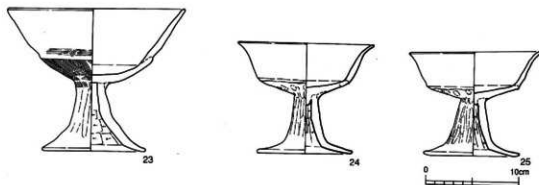
断面形は円形に近い。基は長さ3.9cm、幅0.7cmを測る。

T9・10は鉄鐔である。T9は厚さ約0.3cmの鉄板を曲げ、底径2.5cm、上径0.8cm、高さ7.6cmの円錐状である。内部には形状は不明であるが、長さ2.5cm、幅0.9cmの棒状の鉄製品が認められ、舌と思われる。

T10は厚さ約0.2cmの鉄板を曲げ、底径2.7cm、上径0.5cm、高さ7.6cmの円錐状である。舌は明らかでない。



第45图 向山5号墳出土遺物（金属器①）



第46図 向山5号墳出土遺物（土器）

T11～23は鉄器である。T11・12は無蓋式、T13～23は長頸式の鉄器である。

T11・12の平面形はやや長細い三角形で、逆刺は浅くゆるい弧を描いている。いずれも矢柄が認められ、それぞれ現状で厚さ1.0cm、0.8cmを測り、断面形は円形を呈する。T12には樹皮と紐の痕跡が認められる。

T13～19は鐵身の平面形態が柳葉形を呈し、鐵身間部は直角であるが、T18・19は角間である可能性がある。断面形は片丸造である。頸部は断面形が方形で、直線的に長く延びるが、T13は若干短い。間は矢柄のため明らかではないが、角間と思われる。茎部にはいずれも矢柄が遺存しているため明確ではない。矢柄には外側に樹皮が巻かれている。

T20～22は鐵身の平面形態が三角形を呈しており、鐵身間部は直角である。間は直角が確認できる。基部の断面形は円形に近い。また、T20のように糸が巻かれているものもある。

T23は鐵身の平面形態が長細い三角形を呈し、鐵身間部には深い逆刺がある。断面形は平造である。筈は矢柄のため明らかではないが、角間と思われる。

#### 土師器

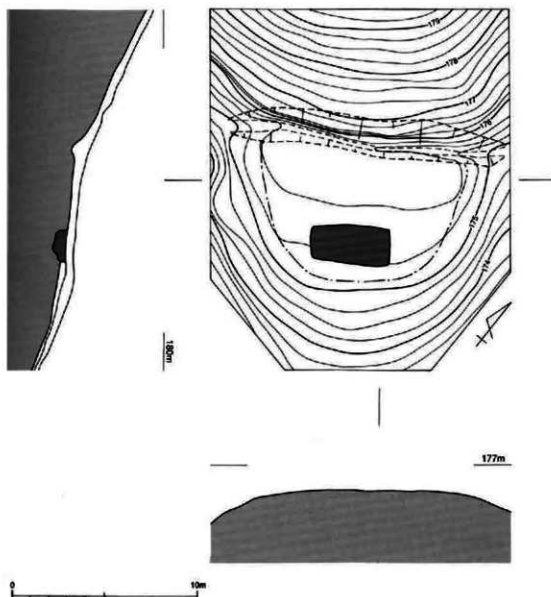
23～25は高坏である。23はやや大型の高坏で、口縁部と体部の境にはふい段が認められる。脚部はゆるやかに外反している。調整は体部外面に縦方向にハケ目、口縁部外面に横方向のナデ、内面は口縁部付近のみ横方向のナデが認められる。脚部外面は縦方向のナデ、内面の上方は横方向のケズリ、下方は横方向のハケ目が認められる。色調は橙色である。

24・25はやや小型の高坏で、形態、色調、調整ともほぼ同じである。体部から口縁部にかけて大きく屈曲しており、口縁部は外反している。脚部は下方が大きく外反して開いている。調整は、体部内外面は横方向のナデ、脚部外面は上方が縦方向のヘラミガキ、下方が横方向のナデ、内面上方は横方向のケズリ、下方は横方向のナデが認められる。色調は橙色である。

## 第7節 向山6号墳

### 1. 概要

向山4号墳から南東方向に下がってゆく尾根の先端に位置する。主体部は1基で斜面下方側の墳丘端近くにあり、主軸は尾根筋と直交する。木棺が検出された。出土遺物は墳丘上から土器（土師器短頸壺）が、墓壇上からは土器（土師器高坏）、石製品と玉（有孔円盤、白玉、管玉）が、木棺上からは金属器（剣、刀子）、玉（管玉）が、木棺内からは玉（管玉、勾玉、ガラス玉）がそれぞれ出土している。



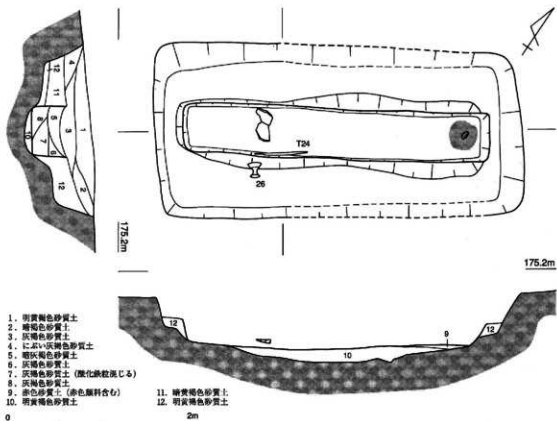
第47図 向山6号墳丘測量図

## 2. 立地

向山古墳群の立地する丘陵は向山4号墳から高度を下げながら南東へ向かって主たる尾根筋を延ばすが、その先端近くに位置する。標高は175mである。この先にも少し緩斜面が続くが、6号墳から先には古墳は築造されていない。

## 3. 墳丘

尾根の先端に築造されており、山裾を削っているため半円形を呈する。長さ6.80m、幅11.10m、高さ0.2mを測る。盛土はなく、山を削ることにより直線的な区画溝とごく緩やかに傾斜した平坦面を造り出す。縦断面を見るとこの地点は尾根の傾斜変換点にあっていたと想定され、自然地形を利用することで墳丘造成の省力化が図られていると考えられる。遺物が出土しており、27と28が平坦面から出土したが、28は古墳に伴うものではない。



第48図 向山6号墳第1主体部

#### 4. 区画溝

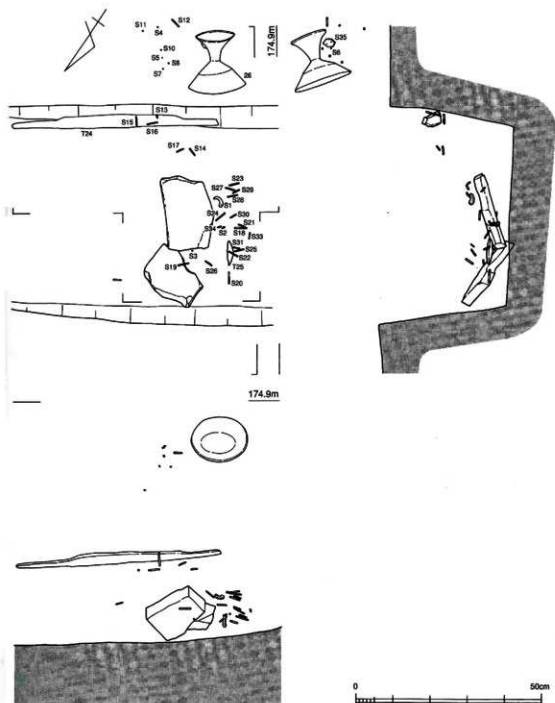
墳丘の山側斜面を切り落として掘削している。小さく緩やかに蛇行するものの、ほぼ直線的な溝である。長さ14.90m、上幅2.10m、下幅0.20m、高さ1.6m、平坦面からの高さ0.15mを測り、溝の断面形はU字形である。

#### 5. 第1主体部

木棺である。長軸方向は北から $54^{\circ}$  東に振っている。墓塚の長さ3.91m、幅1.82m、深さ0.72mを測り、平面形は長方形である。墓塚の底には棺を据えるための掘り込みがあり、断面形は縦横ともゆるい2段墓塚を呈す。2段目の墓塚は平面的にも立面的にも木棺より若干大きいため、木棺の下に明黄褐色砂質土（第10層）を置くことによって高さの調節をしている。棺の表込めは明黄褐色砂質土（第12層）と暗黄褐色砂質土（第11層）の2層からなるが、後者は北長辺側にのみ認められる。裏込めは墓塚の2段目から1段目にかけて置かれている。

墓塚の埋土中から遺物が出土している。遺物は墓塚検出面の直下で、墓塚中央より少し南西隅に寄ったところから石製品、玉、土器が出土した。この位置は被葬者の頭部右脇にあたり、5号墳の墓底から出土した遺物に認められたような被葬者頭位に対する意識がうかがわれる。横転した高坏の口縁部側が沈み込み、石製品と玉は高坏脚部の下レベルとほぼ同じか、最大でも10cmほど深い位置から出土している。高坏口縁部の上端が墓塚検出面の高さで、墓塚がほとんど埋められた段階で置かれたか、あるいは埋土が後世沈み込んだために墓塚検出面より若干下側から出土したのかは明らかでない。

遺物が出土しており、石製品は有孔円盤2点（S35・36）、玉は白玉8点（S4～11）と管玉1点（S12）、土器は土師器高坏(26)がある。石製品と玉は若干の高低差をもって横転した高坏の横約20cm四

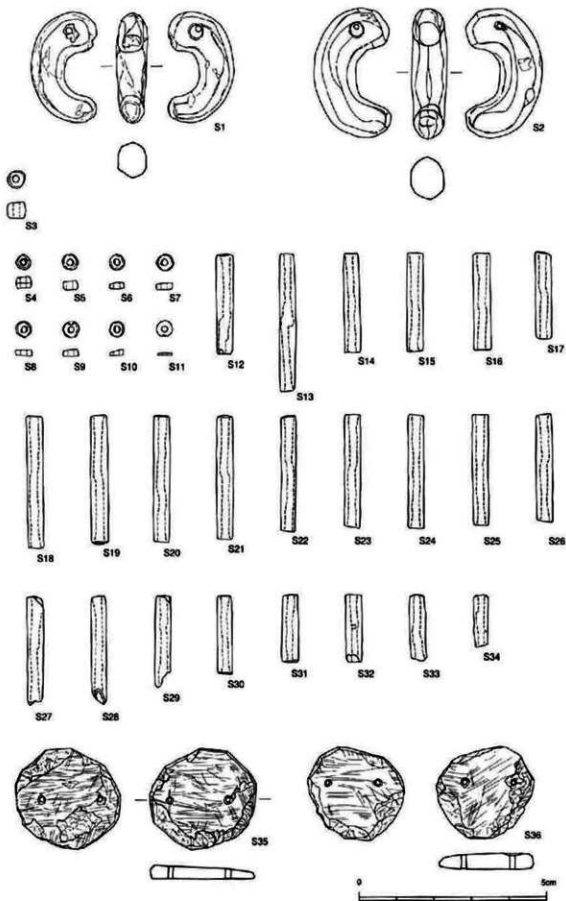


第49図 向山6号墳第1主体部遺物出土状況

方に散在しており、一部は高環の下に隠れる。高低差が10cm程度と小さく、同じ段階で置かれたものと考えられる。高環の横転方向と石製品、玉の分布範囲には約90度異なるが、高環が横転後に回転したと考えれば、高環内に石製品と玉が置かれていた可能性も考えられる。

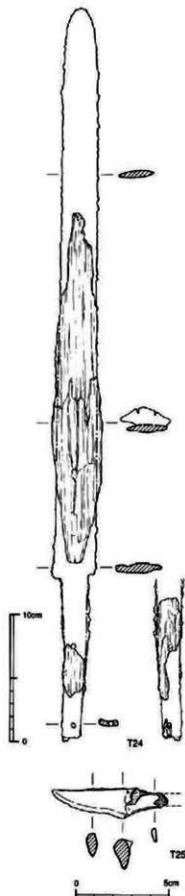
木棺は内法で長さ3.08m、幅0.51m、高さ0.38mを測る。棺上と棺内からそれぞれ玉と金属器が出土し、棺底には南西側に石枕が据えられ、足元側には赤色顔料が撒かれていた。

棺上の遺物には管玉5点(S13~17)と剣1点(T24)があり、棺の南側板際の中央よりやや西手(被葬者の頭部右側付近)で、棺上面から20cm弱沈み込んだ位置から検出された。剣は鞘に収め、切先



第50図 向山6号墳出土遺物（玉類・石製品）





第51図 向山6号墳出土遺物

を足側に向けて副葬されており、置き場は異なっても被葬者に対する位置関係や向きは、向山5号墳と同じである。剣はほぼ水平状態を保っており、管玉も高さの差は極めて少ない。木棺内が流れ込んだ土で半分以上が埋まった段階で、棺蓋が腐り棺内に落ち込んだものであろう。

棺内の遺物には勾玉2点(S1・2)、ガラス玉2点(S3)、管玉17点(S18~34)、刀子1点(T25)がある。

ガラス玉のうち1点は、残存状態が悪くその一部を確認したのみである。管玉は発掘調査時に破損し、長さが復元できなくなってしまったものがいくつかある。管玉の1点を除いて、石杖の西側から出土し、石杖の上に被葬者の後頭部があったとすると、これらはほぼ額の上あたりに置かれていたことになる。しかし、出土状況の横断面見通し図(第49図)を仔細に検討すると、棺中央付近の玉ほど深い位置から出土している傾向にあり、鉄剣などと共に棺上に置かれていたものがいち早く棺内に落ち込んだ可能性も否定できない。

石杖は棺の端から約70cm内側にあり、2枚の板石を谷形に組み合わせ合わせて杖としたものである。板石の下に土あるいは木片のようなものを置いて支えとしていたのであろう。

赤色顔料は元側の棺端近くで検出され、直径約30cmの範囲が赤く色づいていた。分析の結果、顔料は朱及びベンガラと判明した(第7章第5節参照)。

## 6. 出土遺物

玉類が36点、鉄器が2点、土師器が2点、墓室内、木棺内、および墳丘から出土した。また、須恵器が1点、墳丘から出土しているが時期的に古墳に伴うものではない。

## 玉類

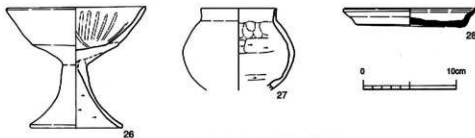
勾玉2点、ガラス製小玉1点、白玉8点、蛇紋系岩製管玉23点、有孔円盤2点がある。

S1・2は瑪瑙製勾玉である。平面形は「コ」字形を呈し、全体になめらかな縦方向の稜線が認められる。断面形はやや楕円形を呈しているものの、ほぼ円形に近い。穿孔は片側から行われており、穿孔側の反対側では剥離した痕跡が認められる。

S3はガラス製小玉である。やや縦長で、青緑色を呈す。

S4~11は白玉である。高さは0.85~2.8mmと幅があるが、直径は3.75~4.25mmと比較的まとまっている。S4は側面に稜をもち、そろばん玉状を呈する。

S12~34は蛇紋系岩製管玉である。長いものは3.6cm、短い



第52図 向山6号墳出土遺物（土器）

のは1.8cmである。厚さは0.4cmで、いずれも断面形は円形である。穿孔はX線写真より両側から行われていることが明らかである（石材については第7章第4節参照）。

S35・36は有孔円盤である。周囲を荒く加工し、円形に整えているが、歪である。表面には平行する調整痕が横、あるいは斜め方向に認められる。円孔が2ヶ所認められ、S35の直径は1mm、間隔は1.6cm、S36の直径は1mm、間隔は1.3cmである。

#### 鉄器

剣が1本、刀子が1本ある。

T24は剣で、全長57.3cm、刃部長44.5cm、茎部長13.1cmを測り、ほぼ完形である。刃部は幅3.7cm、厚さ0.8cmを測り、直線的である。全面に木質が認められ、幅1.6cm、厚さ0.5cmを測る。径0.3cmの目釘孔が岡から11.7cmと5.5cmのところの2箇所認められる。柄部には、一部に木質が認められる。

T25は刀子で、全長6.2cm、刃長4.0cm、茎部は現存長さ2.2cmを測る。茎の一部が欠損しているが、ほぼ完形である。刃部は幅1.6cm、厚さ1.0cmを測り、木質は認められない。柄部には木質が認められる。

#### 土師器

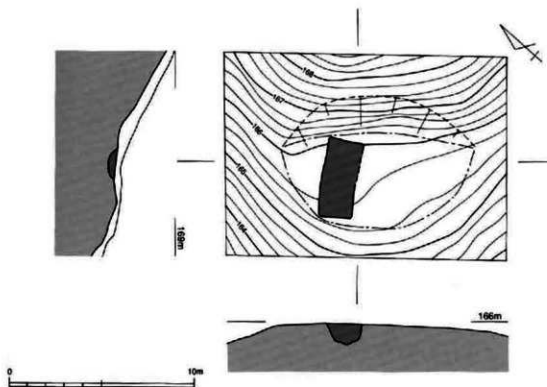
高坏、壺がある。

26は高坏である。やや大型の高坏で、口縁部と体部の境にはにぶい稜が認められる。脚部はゆるやかに外反している。調整は坏部外面に横方向にナデ、内面は横方向のナデの後、縦方向のミガキが認められる。脚部は内面に横方向のケズリが認められるが、それ以外は磨滅のため調整は不明である。色調は橙色である。

27は直口壺である。体部内面に横方向のケズリが、上方には指頭匠痕が認められる。

#### 須恵器

28は皿である。底部は平らで、口縁端部は上方へ屈曲させている。底部外面はヘラケズリの後、ナデている。



第53図 向山7号墳墳丘測量図

## 第8節 向山7号墳

### 1. 概要

向山4号墳から西方向に向かって下降しながら延びる尾根の中段に位置する。主体部は1基で墳丘の北寄りにあり、主軸を尾根筋に対して平行させる。主体部の主軸が尾根筋に平行するものは、今回の調査で向山7号墳と向山11号墳第1主体部だけである。木棺が検出されたが、遺物は出土していない。

また、墳丘上の平坦面を利用して、中世の須恵器埋納遺構が検出された。

### 2. 立地

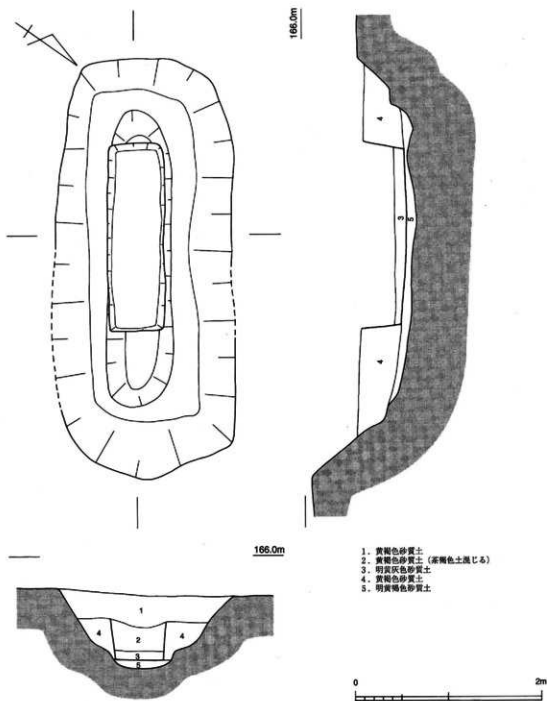
向山古墳群の立地する丘陵は向山4号墳から高度を下げながら西へ向かって尾根筋を延ばすが、その中段に位置する。標高は166mである。この尾根の先には向山9号墳、10号墳が築造されている。

### 3. 墳丘

尾根に築造されており、山側を削っているため半円形を呈する。長さ4.90m、幅10.30mを測るが、高さは無く平坦にしているのみである。盛土は認められず、山を削ることにより平坦面をつくりだしている。山側の削りは1段であるが、これを区画溝とすれば長さ13.30m、上幅1.90m、高さ1.4mを測る。縦断面を見ると、この地点は尾根の傾斜変換点にあっていたと想定され、自然地形を利用することで墳丘造成の省力化が図られていると考えられる。墳丘から遺物は出土していない

### 4. 第1主体部

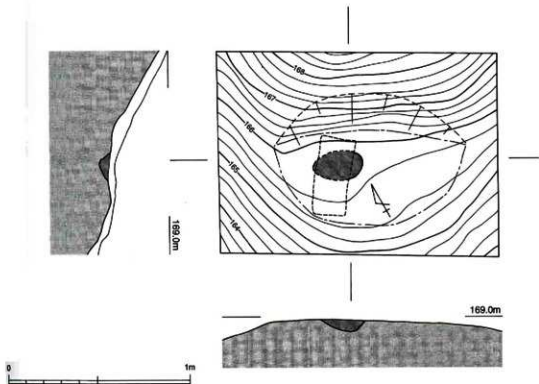
木棺である。長軸方向は北から55°東に振っている。墓塚の長さ4.45m、幅1.88m、深さ0.77mを測り、平面形は長方形である。墓塚両側辺の一部は須恵器埋納遺構によって削り取られている。墓塚の底には棺を据えるための掘り込みがあり、断面形は縦横ともゆるい2段墓塚を呈す。1段目の墓塚の横断



第54図 向山7号墳第1主体部

面は1号墳～6号墳でみられたような箱形ではなく、上幅の広いU字形である。2段目の墓壇は平面的、立面的に木棺より大きく、これは長軸方向で顕著である。木棺の下には明黄褐色砂質土（第5層）を置くことによって高さの調節をしている。棺の裏込めは黄褐色砂質土（第4層）の1層からなり、墓壇の2段目から1段目にかけて置かれている。墓壇から遺物は出土していない。

木棺は内法で長さ1.88m、幅0.53m、高さ0.32mを測る。棺の底に明黄褐色砂質土（第3層）が認められる。棺内から遺物は出土していない。



第55図 向山7号墳上須臾器壘埋納遺構測量図

#### 5. 須臾器埋納遺構

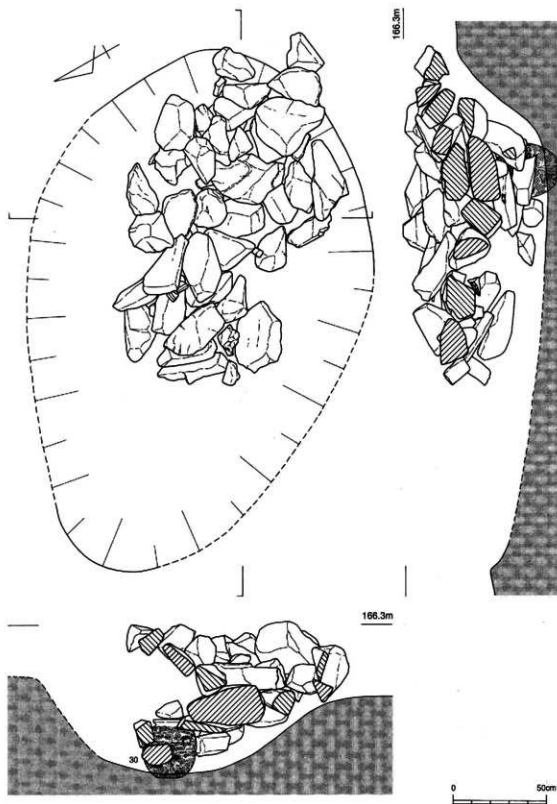
卵形を呈し、長径2.80m、短径1.86m、深さ0.46mを測る。長軸方向は北から43°西に振っており、尾根筋とはほぼ直交する。最深部は短径が最も広くなる位置よりもさらに端に寄っており、幅も深さも偏って掘削されている。

幅と深さが最大となる所の近くを一段掘り窪めて須臾器の壘(30)が据えられていた。30は埋納坑の底に直立し、口縁部には厚みのある石がちょうど蓋をするように載っており、その脇には須臾器コネ鉢(29)の体部～底部にかけての破片が内面を下に向けて置かれていた。コネ鉢の破片の大きさは壘(30)の口径とはほぼ同じである。なお、埋納された壘の中には少量の土が流入していたが、ほとんどは空洞であった。

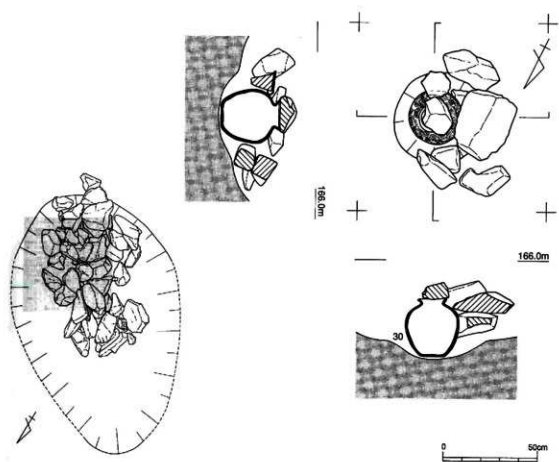
また、埋納された壘を中心に埋納坑の長軸に合わせて川原石が積み重ねられていた。積み石の範囲は埋納坑よりもかなり小さく西半部にほとんど及んでいない。埋納坑の底面に接した石がまったく見られないことから、土で埋めながら石を積んでいったものと思われる。積み石の状況を横断面でみると、壘の上に位置する石は口縁部を塞ぐ1石を除いて全く存在せず、石は埋納された壘の南側に偏って積み重ねられていることがわかる。壘の上には土が被せられ、埋納坑が埋まってからはその上にも石が置かれている。積み石は低いながらも地表面よりも高く積み上げられ、長年の風雨にさらされることとなった。

なお、市条寺3号経塚でも埋納された須臾器壘が検出されたが、積み石の状況はまったく異なっている(第5章第6節参照)。

積み石の間隙からはコネ鉢(29)が口縁部破片中心に小片となって出土し、銅銭3枚(T26～28)も出土した。コネ鉢は埋納された壘の蓋としてしばしば使用されるものであり、最も大きな破片は壘の脇から出土したが、本例の場合は、蓋としては使用しなかったようである。



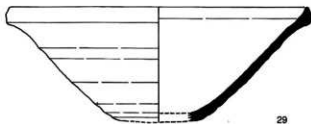
第56图 向山7号墳上須惠器變埋納遺構上層



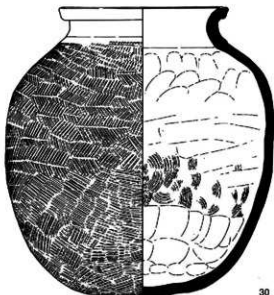
第57图 向山7号墳上須恵器壺埋納遺構下層



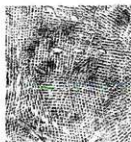
写真5 須恵器壺埋納遺構



29



30



## 6. 出土遺物

### 第58回 向山7号墳上須恵器甕埋納遺構出土遺物

銅製品3点、須恵器2点が須恵器埋納遺構から出土した。時期的に古墳に伴うものではない。

#### 銅製品

銅銭3点がある。T26は政和通寶、T27は開元通寶である。あと1点は判読不可能である。

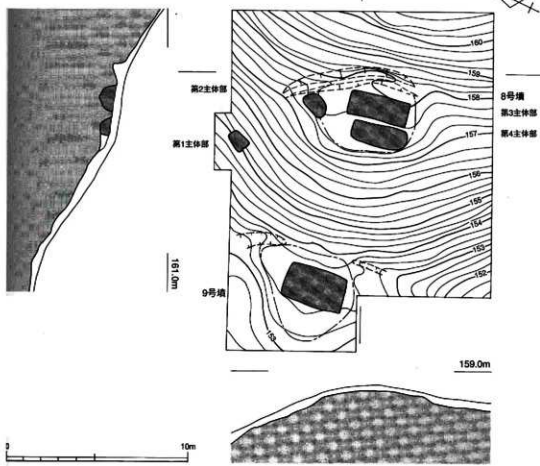
#### 須恵器

コネ鉢1点、甕1点がある。

29はコネ鉢である。体部は直線的に延び、口縁部付近で若干外反している。端部は上方につまみ上げている。

30は甕である。底部がやや平で、肩も若干張り出しているため、全体に四角い形状となっている。口縁部は短く外反し、端部の上面にはふい沈線が認められる。体部外面は平行タタキにより成形され、その後、中央から上半にかけて綾杉文タタキにより装飾されている。体部内面は横方向のナデが認められるが、中位のやや下方に同心円文のあて具痕が確認できる。





第59図 向山8・9号墳丘測量図

## 第9節 向山8号墳

### 1. 概要

向山4号墳から南西方向に下降しながら延びる尾根の先端に位置する。主体部は4基で墳丘中央部に2基（第3・4主体部）、墳丘平坦部北側に1基（第2主体部）、北斜面側の墳丘端近くに1基（第1主体部）を検出した。第1・2主体部は箱式石棺で、第3・4主体部は木棺であった。

### 2. 立地

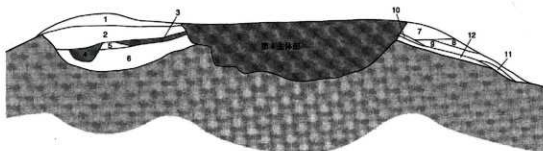
向山古墳群の立地する丘陵は向山4号墳から南東方向と西方向へ向かって高度を下げながら尾根筋を延ばすが、その南西方向側尾根筋の先端に位置する。他の古墳と異なり、かなり急な傾斜にへばりつくように築かれている。標高は158mである。尾根筋はさらに下へ延び、その先には9号墳が築造されている。

### 3. 墳丘

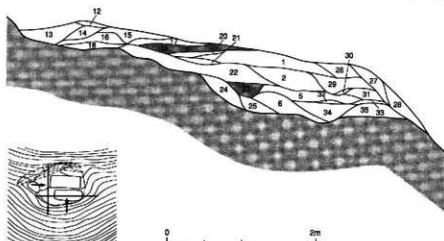
尾根の先端に築造されており、長さ3.7m、幅5.4m、高さ0.3mで、山側にはゆるやかな円弧を描くように、明確な溝を掘りこんでいるほか、厚さ約90cmの盛土をもち、円形を意識しているようである。なお、溝は長さ7.20m、上部幅1.00m、下部幅0.2m、高さ0.6mを測る。

遺物は溝内から34・35（須恵器坏身）が、墳丘裾からは31・32（須恵器坏蓋）が出土している。

158.2m

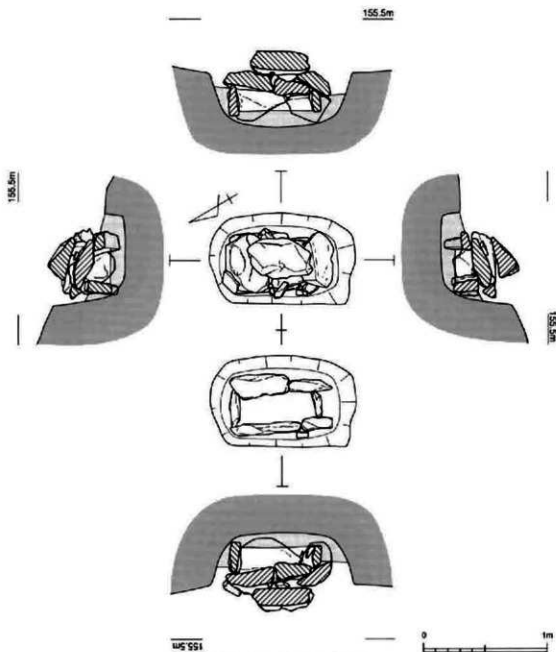


158.2m



- |                 |                        |                           |            |
|-----------------|------------------------|---------------------------|------------|
| 1. 暗灰色砂質土       | 11. 灰色砂質土              | 21. 灰色砂質土                 | 31. 暗灰色砂質土 |
| 2. 灰色砂質土        | 12. 暗灰色砂質土             | 22. 暗灰色砂質土                | 32. 灰色砂質土  |
| 3. 黒色砂質土 (炭泥じり) | 13. 灰色砂質土 (白色炭泥じり)     | 23. 黒色砂質土 (炭泥じり)          | 33. 黒色砂質土  |
| 4. 暗灰色土 (炭泥じり)  | 14. 赤褐色砂質土             | 24. 暗灰色砂質土                | 34. 灰色砂質土  |
| 5. 暗灰色砂質土       | 15. 赤褐色砂質土 (ブロック状に見える) | 25. 明褐色砂質土 (堆山のブロック)      | 35. 暗褐色砂質土 |
| 6. 灰色砂質土        | 16. 明褐色砂質土 (堆山のブロック)   | 26. 灰色砂質土                 |            |
| 7. 明褐色砂質土       | 17. 灰色砂質土 (堆山のブロック)    | 27. 暗灰色砂質土                |            |
| 8. 褐色砂質土        | 18. 灰色砂質土 (白色炭泥じり)     | 28. 灰色砂質土                 |            |
| 9. によい褐色砂質土     | 19. 暗灰色砂質土 (炭まじり)      | 29. 暗灰色砂質土 (堆山のブロック状に見える) |            |
| 10. 灰色砂質土       | 20. 灰色砂質土              | 30. 褐色砂質土                 |            |

第60図 向山8号墳横断面図

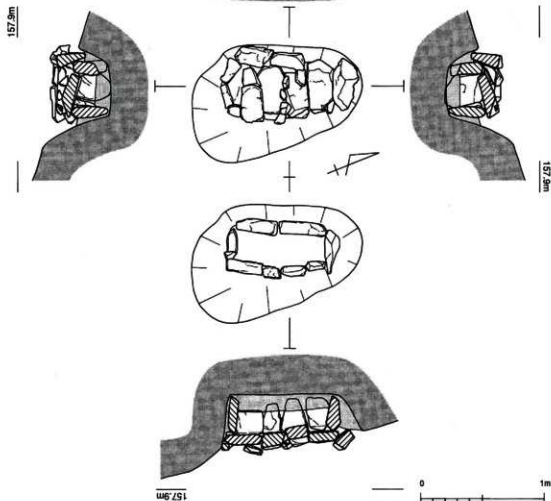


第61図 向山8号墳第1主体部

#### 4. 第1主体部

石棺で、長軸方向は北から29°東に振っている。墓壇の長さ1.56m、幅0.96m、高さ0.76mを測り、平面形はやや楕円形を呈する長方形である。断面は台形を呈する。石棺は外法長さ1.00m、幅0.64m、高さ0.76m、内法長さ0.80m、幅0.28m、高さ0.28mで、小口板をはさむように備板が働えられている。蓋石は板石を2段に重ねている。

157.9m



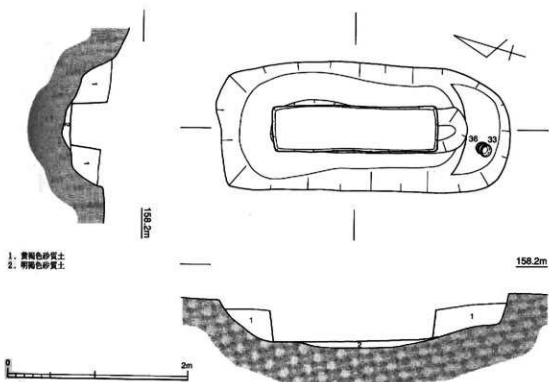
第62図 向山8号墳第2主体部

## 5. 第2主体部

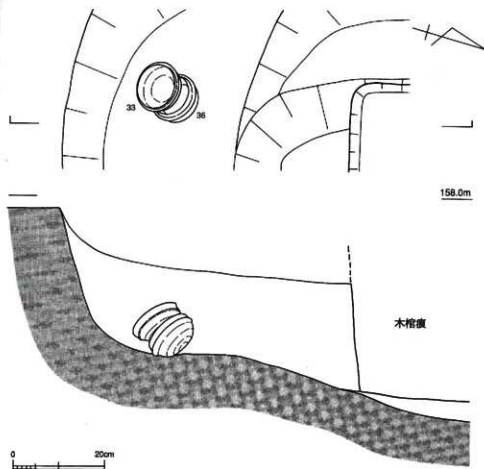
石棺で、長軸方向は北から $21^{\circ}$  東に振っている。墓壁の長さ1.36m、幅0.80m、高さ0.55mを測り、平面形は歪な楕円形を呈する。断面は台形である。石棺は外法長さ1.11m、幅0.62m、高さ0.49m、内法長さ0.70m、幅0.26m、高さ0.18mで、北側は小口板が側板をはさむように、南側は側板が小口板をはさむように据えられている。

## 6. 第3主体部

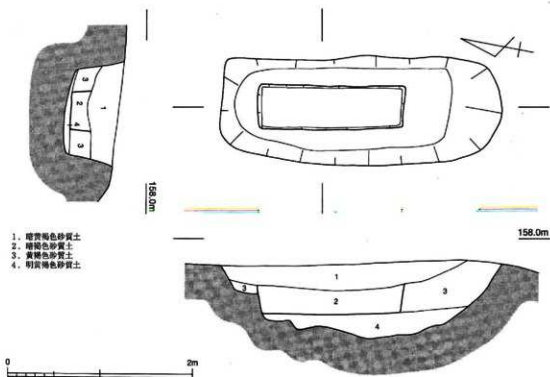
木棺で、長軸方向は北から $16^{\circ}$  西に振っている。墓壁の長さ3.08m、幅1.35m、高さ0.33mを測り、平面形は先の丸い長方形を呈する。横断面はゆるい2段になっている。墓壁底南側には、棺外的位置に33・36の須恵器（坏身・坏蓋）を検出した。木棺は内法長さ1.71m、幅0.43m、高さ0.33mを測る。



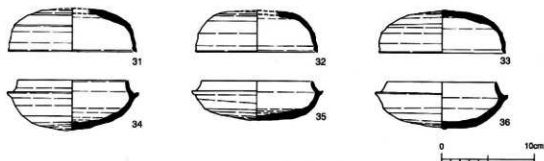
第63图 向山8号墳第3主体部



第64图 向山8号墳第3主体部遺物出土状况



第65図 向山8号墳第4主体部



第66図 向山8号墳出土遺物(土器)

#### 7. 第4主体部

木棺で、長軸方向は北から $12^{\circ}$ 西に振っている。墓壇の長さ3.03m、幅1.10m、高さ0.57mを測り、平面形は先の丸い長方形を呈する。横断面は台形であるが、長軸方向の断面は、墓壇底の凹凸が激しく、北側では2段になっている。木棺は内法長さ1.49m、幅0.38m、高さ0.30mを測る。

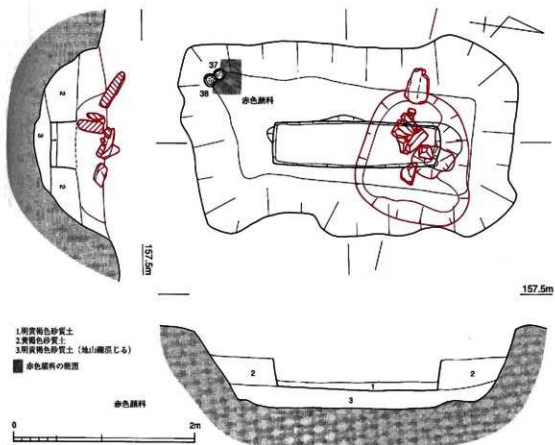
#### 8. 出土遺物

須恵器6点(坏蓋3点、坏身3点)が出土した。そのうち2点(33、36)は第3主体部墓壇内から出土し、それ以外は墳丘・区画溝から出土した。

##### 須恵器

31～33は坏蓋である。31は体部ににぶい稜をもち、口縁端部には内傾する段をもつ。体部の1/3には回転ヘラケズリが認められる。

34～36は坏身である。34は深い体部をもち、立ち上がりは若干内傾するもの、上方にのびる。端部



第67図 向山9号墳第1主体部

は面をもつ。35は浅い体部に短く内傾する立ち上がりをもち、端部は面をもたず、丸くおさめている。36はやや深い体部をもち、立ち上がりは内傾しながら上方へのびる。全体に厚みがある。

## 第10節 向山9号墳

### 1. 概要

向山4号墳から南西方向に下降しながら延びる尾根の先端に位置し、8号墳の下方にあたる。主体部は1基である。

### 2. 立地

向山古墳群の立地する丘陵は向山4号墳から南東方向と西方向へ向かって高度を下げながら尾根筋を延ばすが、その南西方向側尾根筋の最先端に位置する。標高は154mである。

### 3. 墳丘

尾根の先端に築造されており、長さ4.8m、幅5.5m、高さ0.3mで、盛土はみとめられなかった。なお、山側を削ったため、半円形になっているが、4～6号墳に比べて不整形である。墳丘を区画する溝状のくぼみが山側の両端に認められ、北側は、長さ2.5m、上部幅0.8m、下部幅0.3m、高さ0.2mで、南側は、長さ1.8m、上部幅0.2m、下部幅0.1m、高さ0.2mである。

#### 4. 第1主体部

木棺で、長軸方向は北から8°西に振っている。墓塚の長さ3.45m、幅2.02m、高さ0.84mを測り、平面形は歪な長方形である。断面は丸みのある台形を呈する。墓塚内の南西隅に37・38の須恵器（坏身）が副葬されており、その下には赤色顔料の散布が認められた。木棺は内法長さ1.70m、幅0.43m、高さ0.21mで、棺底に置き土（第3層）が認められた。

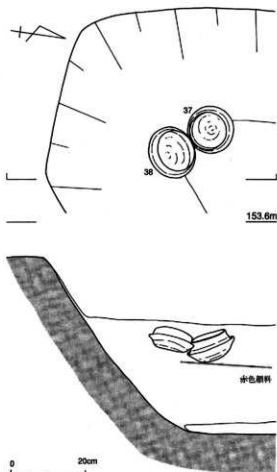
また、主体部の上部には配石遺構が認められた。長さ40cm、幅20cm、厚さ10cm程度の板状の石や人頭大、拳大の角礫が長さ1.4m、幅1.2m、深さ25cm程度の不整形な掘り方にもなって検出された。

#### 5. 出土遺物

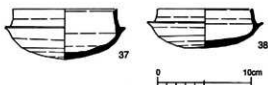
須恵器2点が第1主体部墓塚内から出土した。

##### 須恵器

37・38は坏身である。37は深い体部をもち、受部は上方に平らな面をもつ。立ち上がりは長く直立し、端部は上方を向いたややくぼんだ面をもつ。回転ヘラケズリが体部1/3に認められる。焼成はやや不良で、灰白色を呈し、軟質である。38はやや浅い体部をもち、受部は薄く外方へ張り出す。立ち上がりはやや内傾し、端部は平らな面を上方に向いている。回転ヘラケズリが体部の1/2に認められる。焼成は良好で、やや暗い灰色を呈する。



第68図 向山9号墳遺物出土状況



第69図 向山9号墳出土遺物（土器）

## 第11節 向山10号墳

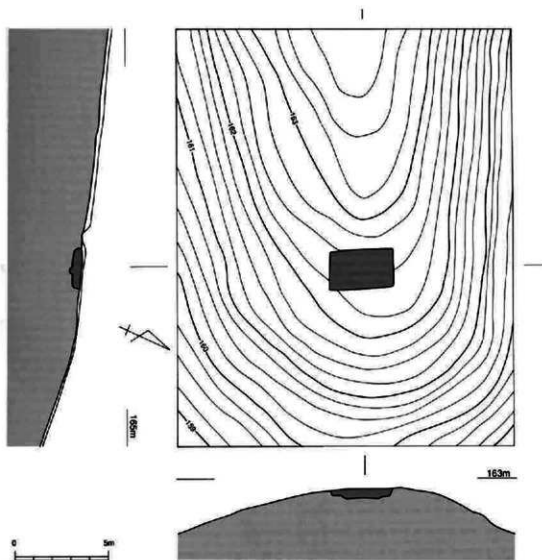
### 1. 概要

向山1～9号墳の立地する尾根とは離れている。主体部は1基のみ検出され、炭を多く含む土坑により切られている。出土遺物は墓塚上から土器（土師器壺、須恵器椀）が、墓塚底から金属器（鉄鏃、鏝）が、棺内からは金属器（短剣）がそれぞれ出土している。

### 2. 立地

向山1～9号墳が1～3号墳を最上位とし、そこから南側に続いているのに対し、当墳は反対の北西





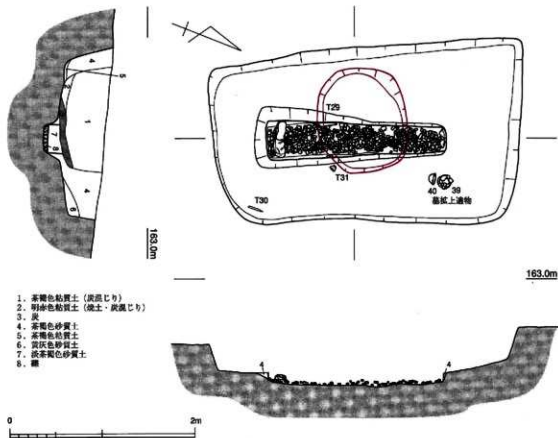
第70図 向山10号墳丘測量図

側に離れて位置する。標高は162mである。当墳は東側に延びる尾根の先端に立地しているが、尾根は当墳からさらに東側に延びており、その尾根上にはさらに3基の古墳状地形が認められる。しかし、今回の調査対象範囲外にあるため詳細は不明である。

### 3. 墳丘

尾根の先端に築造されており、自然地形をそのまま利用している。よって、特に地形を改変した痕跡は認められず、墳丘の規模は明らかにできない。参考として当墳の立地する尾根の平坦面の幅はおよそ7.0m、高さは0.5mである。墳形についても特に意識した形ではなく、尾根の先端が自然に丸くなっているのみである。盛土も確認できなかった。尾根の方向は北から58°東に振っている。

墳丘からは遺物は出土していない。



第71図 向山10号墳第1主体部

#### 4. 第1主体部

木棺である。長軸方向は北から21°西を向いている。墓壇の長さ3.37m、幅1.83m、高さ0.72mを測り、平面形は隅丸の長方形である。棺を据えるための掘り込みがあり、2段墓壇となっている。2段目の墓壇は木棺の大きさとほぼ同じ大きさである。木棺の裏込めは茶褐色砂質土（第4層）であり、墓壇2段目から1段目にかけて置かれている。

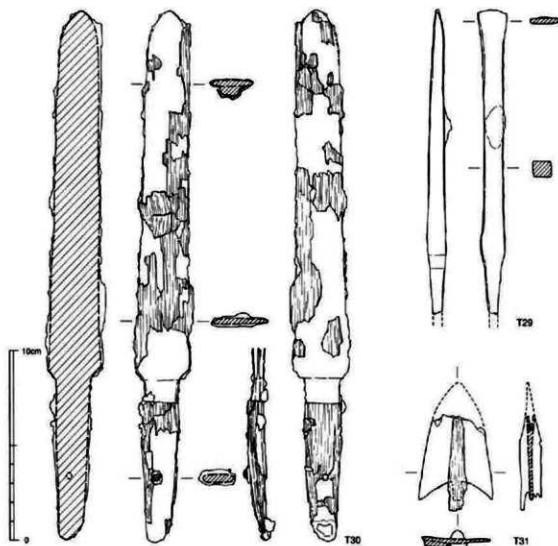
墓壇の上と底から遺物が出土している。墓壇の上から出土した遺物は土師器<sup>94</sup>と須恵器<sup>94</sup>がある。いずれも完形で、土師器は正置した状態、須恵器は横向き状態で出土した。墓壇の底から出土した遺物は鉄器がある。鉄鎌（T31）は木棺中央の東脇から、鋳（T30）は墓壇の東隅から出土した。いずれも墓壇底に接して置かれていた。

木棺は内法で長さ1.89m、幅0.28m、高さ0.20mを測る。棺の底には全体に直径2cm程度の小礫が敷かれており、南西側ではその上に2石からなる石枕がある。また反対の北東側にも小礫よりやや大きめの石が2石置かれていた。

木棺内の中央西側から短剣（T29）が出土した。剣先を足方向へ向けている。

#### 5. 焼土坑

第1主体部の墓壇上で、墓壇内におさまる範囲で焼土坑が検出された。規模は長径1.10m、短径0.95m、深さ0.56mを測り、長軸は北から70°東を向いている。第1主体部の墓壇が完全に埋められてから掘りこまれており、焼土坑が第1主体部の後に掘削されたことが明らかであるが、第1主体部を意識していたかどうかは明らかでない。土坑の底には炭（第3層）が厚さ約10cm堆積し、その上に焼土・炭を含む層（第2層）が部分的に認められる。遺物は出土しなかった。



第72図 向山10号墳出土遺物（金属器）

## 6. 出土遺物

鉄器が3点、土師器が1点、須恵器が1点出土した。鉄器は主体部内からの出土で、T29は棺内、T30・31は墓境内からの出土である。土師器と須恵器は墓壇上から出土している。

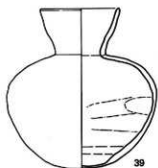
### 鉄器

短剣1本、鏃1本、鉄鏃1点である。

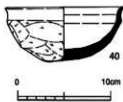
T29は鏃で、全長15.9cm、刃長12.7cm、基部は現存で長2.6cmを測り、基部の一部が欠損している。刃部は幅1.6cm、厚さ0.3cm、基部は長さ11.3cm、幅1.1cm、厚さ0.8cmを測る。木質は認められない。刃部は若干ふくらんでおり、茎へと徐々に細くなっている。

T30は短剣で、全長27.8cm、刃長18.7cm、柄部長7.4cmを測り、完形である。刃部は幅3.0cm、厚さ0.4cmを測り、全面に木質が認められる。柄部は幅2.0cm、厚さ1.3cm、茎は長さ8.4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。径3mmの目釘孔が間から5.1cmのところから1つ認められる。柄部には、ほぼ全面に木質が認められ、その外側のほぼ中央には有機質の緑色が遺存している。1つの単位は幅1.5cmを測る（詳細は第7章第6節を参照）。刃部側は柄の木質が直線的な面をもっており、柄縁の直線であると思われる。

T31は短基式の鉄鏃である。平面形はやや長細い三角形で、逆刺は浅くゆるい弧を描いている。矢柄



第73図 向山10号墳出土遺物（土器）



が認められ、現状で厚さ1.2cm、断面形は円形を呈する。

#### 土器

39は土師器壺である。体部は最大径をやや上位にもち、口縁部は直線的に外方へ開いている。調整は体部内面が横方向のヘラケズリ、口縁部は内外面とも横方向のナデが一部に確認できるが、それ以外は磨滅のため不明である。40は須恵器

椀である。体部はゆるやかに内彎しており、口縁部で短く外反する。体部は不定方向の手持ちヘラケズリが認められる。焼成は不良で、灰色から灰白色を呈し、軟質である。胎土には白色砂粒や赤色粘土（焼土）を含み、粗い。

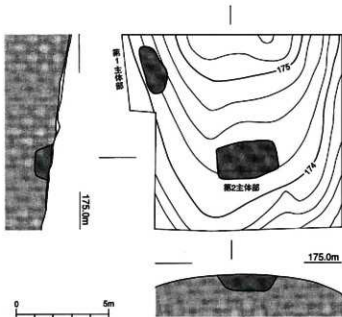
## 第12節 向山11号墳

### 1. 概要

向山1～10号墳の立地する丘陵と市条寺古墳群の立地する丘陵に挟まれた小さな谷に面する尾根上にある。自然地形をそのまま利用した墳丘から主体部が2基検出された。小石室と箱式石棺がそれぞれ1基である。尾根中央に位置し箱式石棺をもつ第2主体部が中心主体で、第1主体部はその西斜面にある。出土遺物は第1主体部の石室内から土器（須恵器壺と高坏）が出土し、第2主体部の墓室内から金属器（鍬先、釵、ヤリガンナ、鉄鏃）と土器（須恵器坏）が、石棺内から玉（白玉）と金属器（鉄斧、刀子、劍、鉄鏃）がそれぞれ出土している。

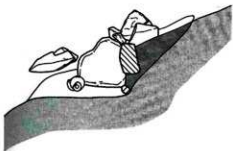
### 2. 立地

向山11号墳は向山1～10号墳の立地する丘陵の北西側にあり、谷を一つ隔てた小尾根の先端に位置する。その尾根は背後に連なる山並みから派生したもので、どちらかといえば単独墳の様相を示す。尾根自体は南に延びるが、谷からの比高が20mほどしかない。このため、本墳は、向山1～10号墳の立地する丘陵や市条寺1～4号墳から東へ

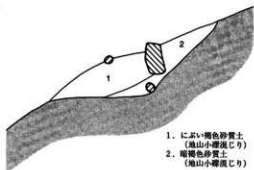


第74図 向山11号墳墳丘測量図

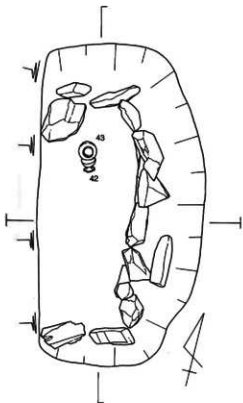
175.0m



175.0m



1. におい褐色砂質土  
〔地山小礫混じり〕
2. 暗褐色砂質土  
〔地山小礫混じり〕

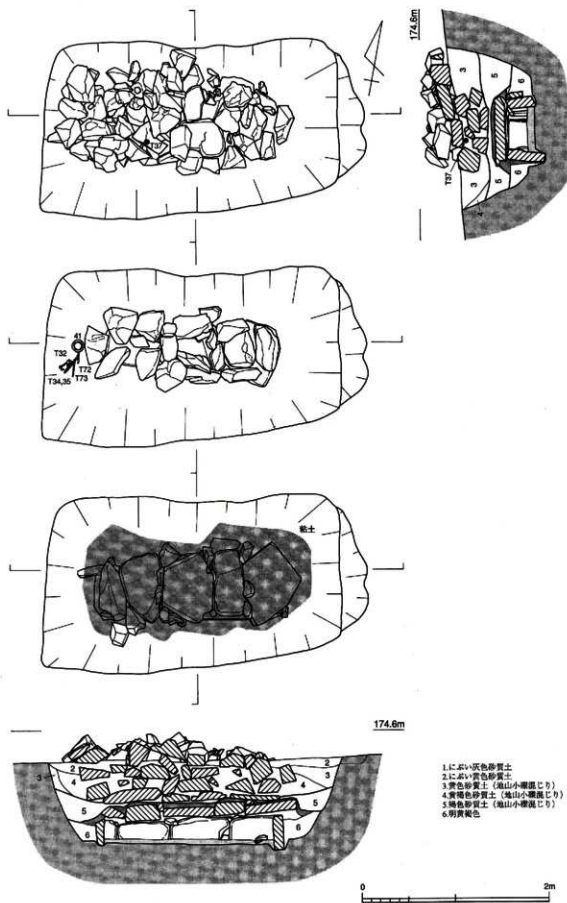


175.0m

175.0m



第75図 向山11号墳第1主体部



第76図 向山11号墳第2主体部

連なる丘陵に前面を阻まれて南への眺望は悪い。

### 3. 墳丘

尾根の先端に築造されており、自然地形をそのまま利用している。よって、特に地形を改変した痕跡は認められず、墳丘の規模は明らかにできない。参考として当墳の立地する尾根の平坦面の幅はおよそ8m、高さは0.5mである。墳形についても特に意識した形ではなく、尾根の先端が自然に丸くなっているのみである。盛土も確認できなかった。尾根の方向は北から20°東に振っている。

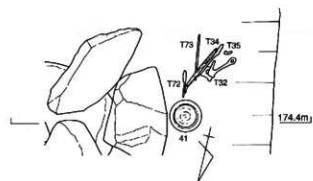
墳丘からは遺物は出土していない。

### 4. 第1主体部

小石室である。長軸方向は北から15°西に振っており、等高線に沿う。西側面はおそらく地滑りのようなものによって失われている。

墓壇の長さ2.57m、残存幅1.47m、深さ0.70mを測り、平面形は長方形であったと想定される。墓壇の横断面形は逆台形で上幅が下幅にくらべかなり広がっている。墓壇埋土は暗褐色砂質土（第2層）の1層で、裏込め石は無くただ土を置いているのみである。

小石室は内法で長さ1.77m、残存幅0.77m、高さ0.70m、外法で長さ2.15m、幅1.09m、高さ0.70mを測る。向小口にはそれぞれ1段2石が残存するのみであるが、東側壁には2～4段の石積みが残る。石



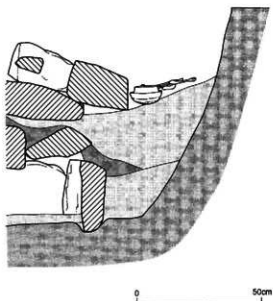
の積み方は粗雑で隙間が各所に認められる。基底にも特に大きな石は使用されておらず、厚みの無い板状の石をそのまま直立させているため不安定な感を受ける。蓋石と想定されるような石材はまったく認められなかった。

遺物が出土しており、須恵器高坏(42)と壺(43)が石室内の北寄りにあり、床面から約10cmほど浮いた位置から出土した。

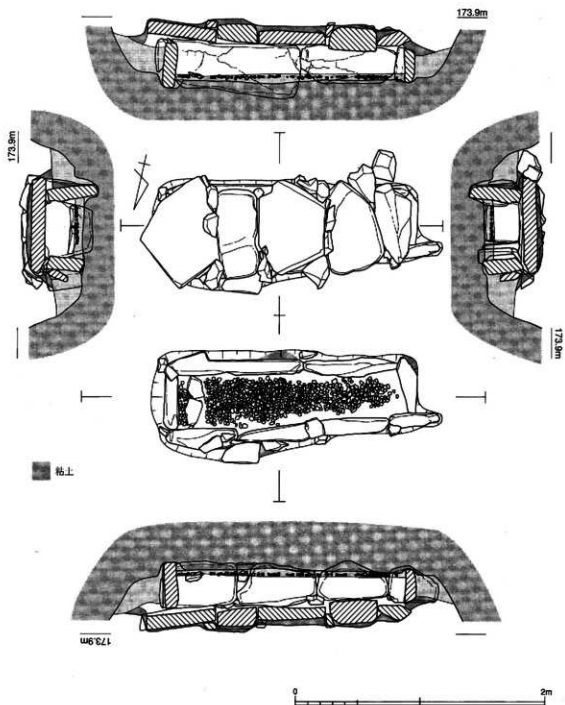
### 5. 第2主体部

石棺である。長軸方向は北から80°西に振っている。墓壇の長さ3.44m、幅1.73m、深さ1.19mを測り、平面形は一辺が室に突出した長方形である。墓壇の東側は浅い段があり、その段を除いた長さは3.10mを測る。墓壇の断面形は逆台形で、側石を据えるために底を溝状に掘り下げている。溝の深さは側石と小口石の面の高さが揃うよう石の形や大きさに応じて調整している。

本主体部で特筆すべきことは、大量の石で墓壇を埋めていることである。石は



第77図 第2主体部墓壇内遺物出土状況

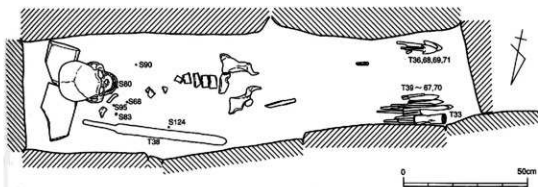


第78図 向山11号墳第2主体部石棺

最初のうちは石棺の上にだけ積み上げ、周りには土を入れているが、墓墳が埋め尽くされると積み上げる範囲を北側に広げている。最終的に墓墳検出面よりも約30cmほど石が盛り上がる。石の積み上げ方に規則性は認められないが、平らな面を水平に置き、崩れないように丁寧に積み上げられているようである。使用される石の大きさは人頭大前後のものを中心に大小様々であるが、最初に積まれた石には比較的大きなものが多い。

墓墳から遺物が出土している。墓墳西壁と石の間には金属器と須恵器坏(41)が置かれていた。金属器は髀1点(T32)、ヤリガンナ2点(T34・35)、不明鉄製品2点(T72・73)で、ヤリガンナは2点横並びに、不明鉄製品はこれと斜めに交わるように水平に置かれていた。髀はヤリガンナの脇にあり、須





第79図 向山11号墳第2主体部石棺内遺物出土状況

意器坏もこれらと接して据えられていた。さらに、中央付近では石の隙間から鉄製鋤先（T37）が出土した。壺などの一群は石棺上に石を積み上げながら周りを土で埋めてゆく途中の褐色砂質土（第5層）上面で副葬されたもので、出土位置が離れる鉄製鋤先もほぼ同時か若干遅れて副葬されたものである。

石棺は内法で長さ1.83m、幅0.45m、高さ0.24m、外法で長さ2.25m、幅0.93m、高さ0.55mを測る。平面形では頭部側が足側にくらべわずかに広がる。石棺は両小口に各1石、南側側石に2石、北側側石に4石を使用しており、いずれも1段で棺を構成している。小口石は長側石にはさみこまれているが、南西側の隅のみ逆になっている。北側石は頭部側では小口石の外面とほとんど同じ位置で収まるが、足側では外に大きく飛び出ている。蓋石は大型で平らな5石を並べ、その隙間に小型の石を詰めている。したがって、蓋石は1重で、5石の中では被葬者の頭の上に位置する東端の蓋石が最も大きい。蓋石の上には棺全体を覆うように粘土で目張りがされており、棺身も最上部が部分的に粘土で裏込めされていた。

棺を構成する石材は、詰め石の一部に割石が使用されている以外は河原石が使用されている。角張りが強く平坦な面で構成されるため一見したところ割石と思えるような石が選択されている。

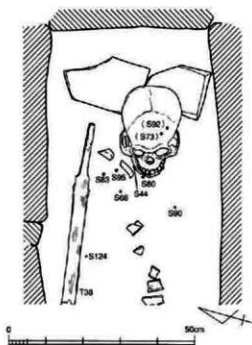
棺内は5～8cmほどの厚さの置き土で水平に均され、その上に小礫が敷かれている。東端際では小石上に石枕があり、2枚の割石を谷形に並べて被葬者の頭部を受けている。小礫はやや緑がかった砂利石で、ほぼ全面に密に敷かれているが、側石際からは数cm離れている。石枕は長側石に接し、その東側の小礫は小口石と接しており、棺内に木棺が置かれた可能性は無い。

棺内には人骨が遺存しており、玉と金属器を副葬し、赤色顔料が認められた。粘土の目張りによって土の流入が比較的少なく、蓋をかけた時には骨や金属器が顔を覆っていた。人骨は頭を石枕の上に乗せて東を向いている。頭骨、下顎骨、椎骨と背盤の一部などがあつたが、四肢骨はほとんど残っていなかった。T36他の鉄鏃の北側にみえる小片は左長管骨の中程あたりの部位で、これから判断すると、つま先は鉄鏃先端よりも少し手前に位置すると推定される。鑑定の結果、被葬者は20代～40代の男性と判明した（第7章第1節参照）。

棺内の遺物には白玉122点（S37～156）、鉄斧1点、刀子1点、剣1点、鉄鏃33点があり、被葬者の右肩から腰にかけて剣（T38）を、左の踵の脇には刀子1点（T36）と鉄鏃4点（T68～71）を、右の踵の脇あたりには鉄鏃一束30点（T39～67）の上に鉄斧1点（T33）を置いている。

剣は切先を足側に向けて鞘に入れた状態で副葬している。鉄鏃は右側の一群と左側の一群では形態が異なっており、先端を足側に向けて置いている。これに対して鉄斧は刃を頭側に向けている。

右踵側の鉄鏃の一群は、全体で筒状に重なって出土しており、最下位にあった2点（T39・52）には



第80回 石棺内出土状況

朱（詳細は第7章第5節）は頭骨の一部と頭側の棺内面上半部にかすかに認められた。朱の範囲は土で埋もれていなかったところに限られるが、足側ではまったく認められなかった。

#### 6. 第1主体部出土遺物

須恵器（42・43）の2点が出土した。

##### 須恵器

42は短脚の無蓋高坏である。ゆるやかに内彎する体部に若干外反する口縁部をもつ。脚部は大きく外反して開いている。端部は面を外方に向けている。43は短頸壺である。肩部は若干張り出し、沈線をもつ。底部は回転ヘラケズリにより調整される。

#### 7. 第2主体部出土遺物

玉類が122点、鉄器が40点、須恵器が1点出土した。

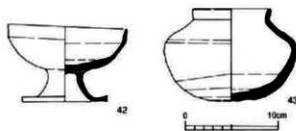
##### 玉類

白玉が122点ある。いずれも扁平であり、直径は大きいもので4.90mm、小さいもので3.35mm、孔径は大きいもので2.20mm、小さいもので1.40mmを測る。高さは高いもので3.85mm、低いもので0.65mmを測る。平均値は直径4.01mm、孔径1.89mm、高さ2.15mmとなる。S37~58は側面に稜をもち、そばん玉状を呈す

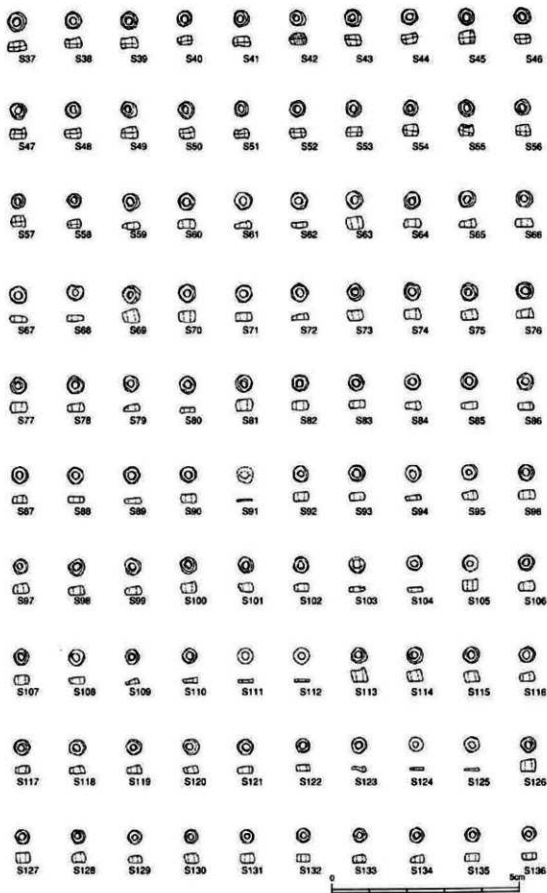
る。

##### 鉄器

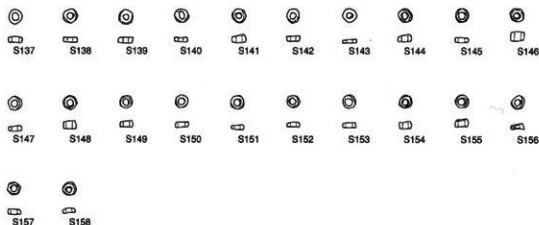
馬具（轡）1点、鉄斧1点、ヤリガンナ2点、刀子1点、鋤先1点、刺1点、鉄鏃33点、不明鉄製品2点がある。



第81回 向山11号墳第1主体部出土須恵器



第82图 向山11号墳第2主体部出土遺物(五1)



第83図 向山11号墳第2主体部出土遺物(玉2)

T32は轡である。銜(T32-A)は2連式のねじり銜で、同じ方向にねじられている。図面の左側は長さ11.6cm、右側は11.7cmを測る。左右に付けられた円環はいずれもほぼ同じ大きさである。鏡板(T32-B・C)は、立間をもつ楕円形をした円環の鏡板であるが、中央に外側から棒状のものを接合している。銜とはこの棒状部で連結される。横幅9.0cm、高さ8.7cm、厚さ0.3cmを測る。立間には外側から木質が付着している。引手(T32-D)は鏡板の外側から銜の円環と連結される。長さ2.2cm、厚さ0.7cmを測る。銜と連結する円環は径1.5cmを測り、小さく円形を呈するが、反対側は四角い。完存しないため、全体の形状は不明であるが、復原で幅2.8cm、高さ1.4cmと考えられる。

T33は肩の張った袋状鉄斧である。全長11.3cmを測る。刃部は横に長く、長さ4.8cm、幅7.3cmを測る。袋部は折り返しによって成形されており、断面形は横に長い楕円形で幅4.1cm、高さ3.2cmを測る。袋部内には木質が遺存している。

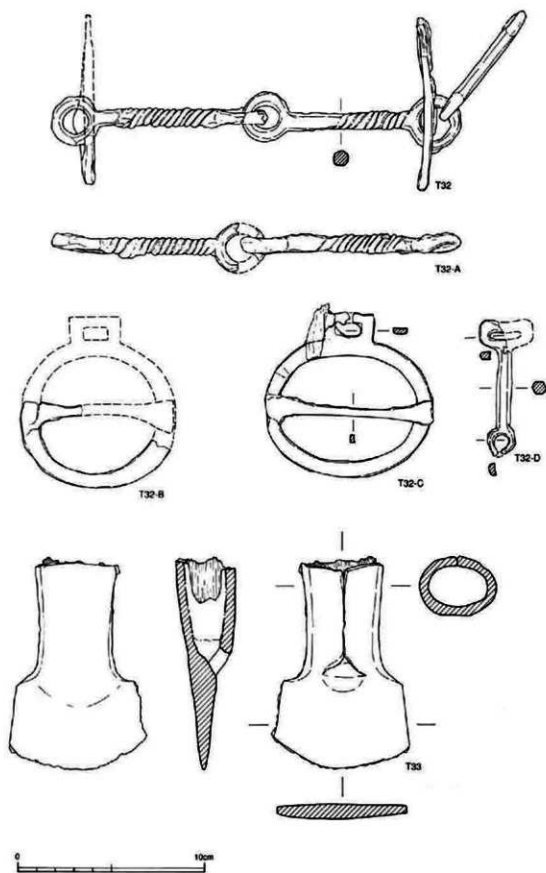
T34・35はヤリガンナである。T34はほぼ完形で、全長23.6cm、厚さ0.4cmを測る。木質が柄部の表面、表面の両方に認められ、その外側には樹皮が巻かれているのが確認できる。尻部は直線的に徐々に細くなっている。刃部は長さ4.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測り、断面形は「へ」字状を呈する。柄部から刃部にかけて大きく約30°の角度で屈曲している。

T35は柄部の一部が欠損している。刃部は薄く、若干反っているが、ほぼ直線的である。全長15.9cm、刃部長1.3cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、柄部長14.6cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。木質は認められない。

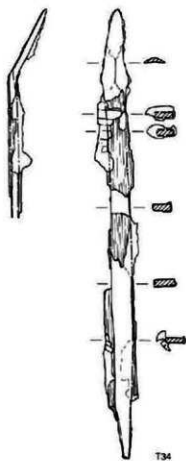
T36は刀子である。ほぼ完形で、全長9.3cm、刃部は長さ3.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、柄部は長さ5.4cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、茎部は長さ2.0cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る。茎の上には有機質が認められ、その外側を2つの鹿角によってはさまれ、さらに外側には有機質の膜が認められる。茎の上の有機質はすべり止めとして使用された布、鹿角の外側に認められる有機質は2つの鹿角をまとめるための漆、または布である可能性があるが、現状では確認できない。

T37は鎌先である。2片に分かれているが、復原長10.4cm、幅17.5cm、厚さ1.0cmと復原される。内側には鎌の本体に装着するための袋状のくぼみが存在する。くぼみの深さは0.4~0.6cmを測り、側面まで続いている。

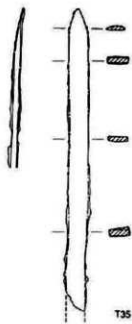
T38は剣である。全長58.7cm、刃部は長さ43.8cm、幅3.8cm、厚さ0.5cm、茎部は長さ12.5cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmを測る。刃部から茎部まで部分的に縦方向の木質が認められる。刃部から茎部にかけて大き



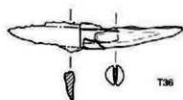
第84图 向山11号墳第2主体部出土遺物（金属器1）



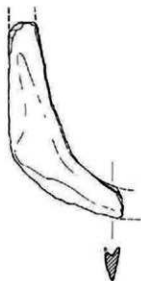
T34



T35



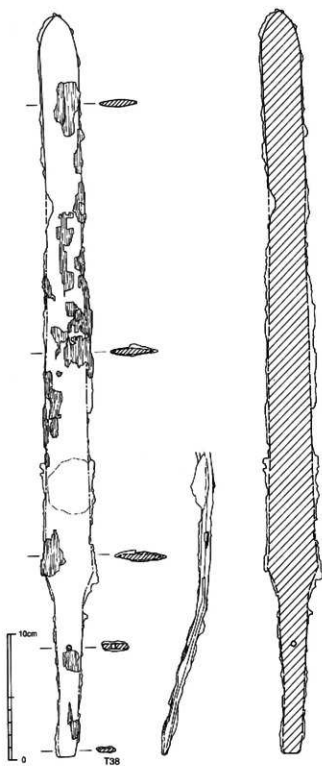
T36



T37



第85图 向山11号墳第2主体部出土遺物(金屬器2)



第86図 向山11号墳第2主体部出土遺物(金属器3)

大きさは平均すると全長14.9cm、鐵身長5.4cm、鐵身幅3.0cm、莖部長4.7cm、幅0.4cmを測る。

T71は鐵身が長三角形を呈す短莖式の鉄鐵で、やや浅い直線的な逆刺をもつ。全長7.6cm、幅4.4cm、厚さ0.2cm、莖部長1.0cmを測る。鹿角と思われる有機質が認められ、矢柄との接合部を覆っていたものと思われる。鐵身の中央には小孔が認められ、大きさは縦0.3cm、横0.5cmを測る。逆刺付近に布痕が遺存する。裏面には別個体の鉄製品が付着している。

く屈曲している。柄部には目釘穴が1箇所確認できる。

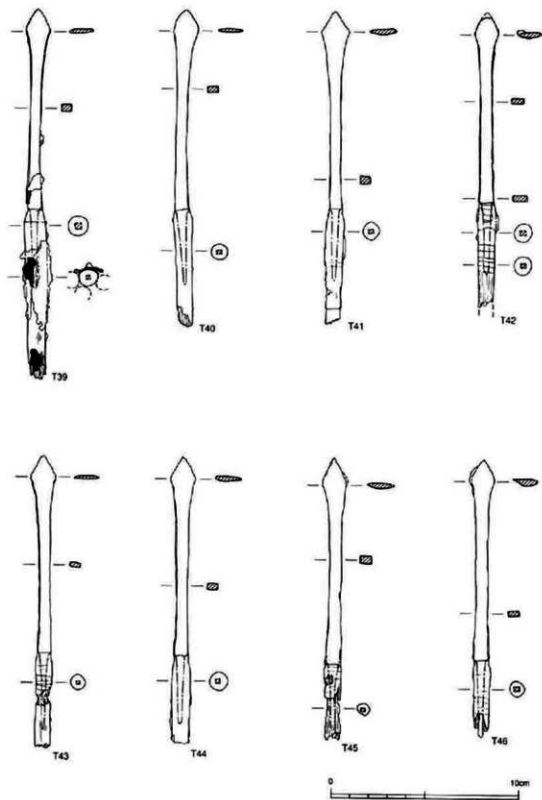
T39~71は鉄鐵で、T39~70は長莖式、T71は短莖式である。

T39~57は鐵身が小さい三角形を呈するものである。大きさは平均すると全長14.0cm、鐵身長2.6cm、鐵身幅1.3cm、莖部長3.9cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。鐵身の間は撫角で、寛被は角間または撫角である。T39の矢柄片側には、3重に重なった布痕が認められる。T52にも頭部の片側に布痕が認められる。T53には茎に巻き付けられた糸の痕跡が認められ、矢柄はその上に挿入されているのがわかる。T58は鐵身が柳葉形を呈す。T53と同様に茎には糸が巻き付けられている。

T59~61は鐵身が長細い柳葉形を呈す。鐵身長が7.3cmと長細い。鐵身間は撫角で、寛被は角間である。

T62~67は片刃の鐵で、鐵身には深い逆刺をもつ。寛被は角間または撫角である。大きさは平均すると全長18.3cm、鐵身長4.0cm、鐵身幅0.9cm、莖部長4.6cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。

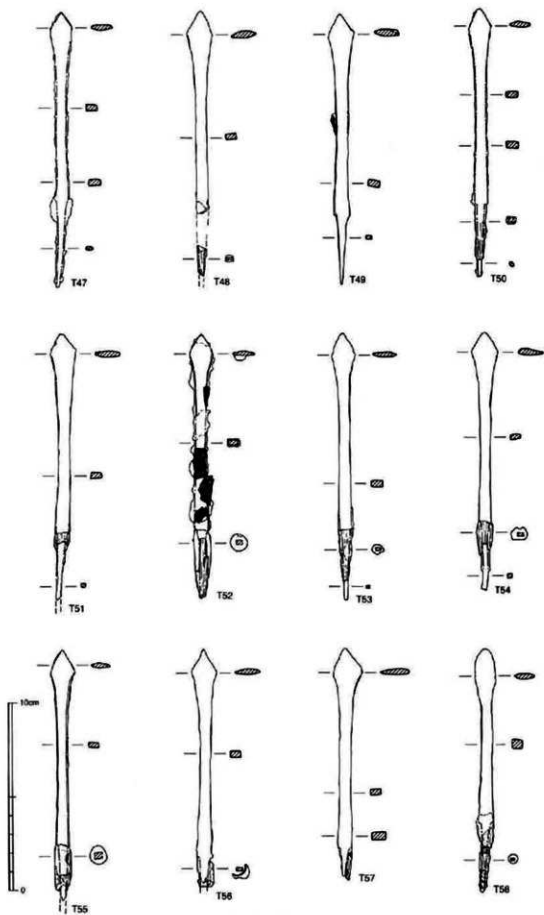
T68~70は鐵身が大きな三角形を呈す。深い2段の逆刺をもち、頭部の片側にも逆刺をもつ。



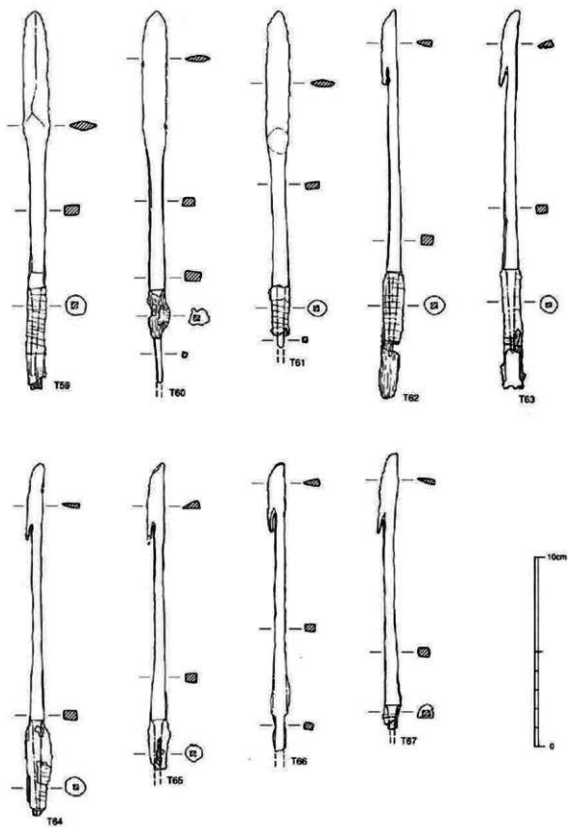
第87図 向山11号墳第2主体部出土遺物（金属器4）

T72・73は不明鉄製品である。T72は断面円形の棒状鉄製品で、断面が円形の木質が付着している。  
T73は断面方形の棒状鉄製品で長い。一部に木質が付着している。

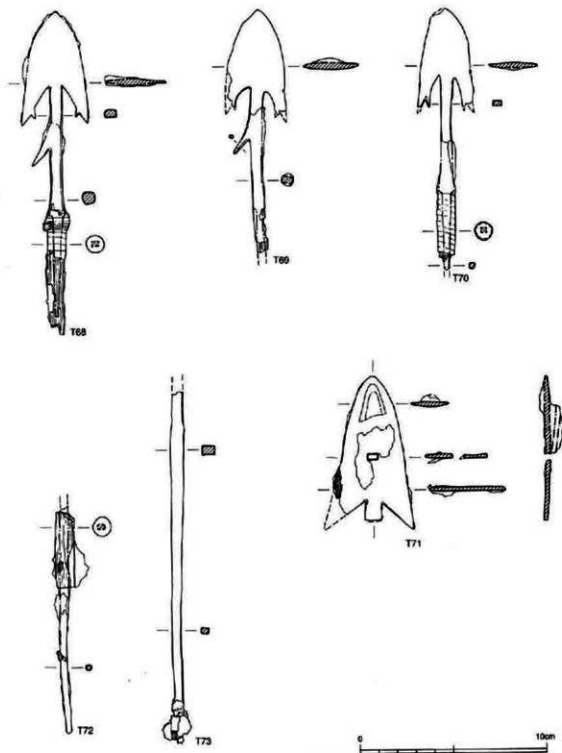




第88图 向山11号墳第2主体部出土遺物(金属器5)



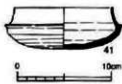
第89図 向山11号墳第2主体部出土遺物（金属器6）



第90図 向山11号墳第2主体部出土遺物（金属器7）

須恵器

杯身が1点、墓内棺外から出土した。低い体部から、やや外反し、大きく上方にのびる立ち上がりをもつ。端部には面をもつ。底部外面は丁寧な回転ハラケズリで調整され、受け部近くまで及ぶ。



第91図 須恵器

## 第13節 小 結

今回調査した向山古墳群11基は、古墳時代前期から後期にかけて継続しており、大きくは尾根の上方から下方へと順に築造されていた。しかし、8号墳では前代に築造できなかった急峻な尾根の先端に盛土をすることによって無理して築造しているものもある。

前期には1号墳から3号墳が築造される。4号墳も含まれるかも知れない。墳形は方形を呈し、尾根の上下両側に区画溝をもつ。1墳丘における主体部の数は1～3基で、ばらつきがある。

主体部には木棺直葬4基、箱式石棺1基、壜穴式石室1基がある。出土遺物は、墳丘から土師器が出土しているが主体部からはほとんど出土しておらず、唯一2号墳第2主体部からのみ出土した。

中期には5号墳・6号墳・11号墳が築造される。7号墳も含まれるかも知れない。墳形は半円形を呈し、尾根の上側のみ区画溝をもつ。墳形が半円形を呈するのは尾根の先端という立地による影響である。1墳丘における主体部の数は1基のみである。主体部には木棺、箱式石棺がある。出土遺物は、墳丘から出土するものはなく、逆に墓室内、棺内に多くの遺物を副葬するものがでてきており、副葬品をもつものともたないものでばらつきが認められる。

後期には8～10号墳が築造される。墳形は中期と同じく半円形を呈しており、尾根の上側のみ区画溝をもつ。1墳丘における主体部の数は1基のものから8号墳のように4つの主体部をもつものがでてくる。主体部には木棺、箱式石棺があり、特に箱式石棺は非常に小型のものとなっている。出土遺物は、墳丘から出土するものはあまりなく、墓室内、棺内から出土するものがほとんどである。

また、特筆すべき遺物として、2号墳第2主体部から出土した内行花文鏡、5号墳から出土した鉄鐔、11号墳第2主体部から出土した馬具がある。鉄器の遺存状況も良好で、木質、鹿角などの有機質が遺存したものが多く、刀銃具や矢を復元するための一資料となりうるものである。特に11号墳では多くの鉄製品が出土しており、資料的価値が高い。

## 第4章 市条寺古墳群の調査

### 第1節 概要

#### 1. 概要

殿宇市条寺に位置し、全部で12基からなる。今回はこの内4基が調査された。いずれも東側から西側に延びる尾根上に立地しており、ほとんどが南側の谷を意識していると思われるが、唯一1号墳だけは南側の谷から見えないうちに立地している。

墳丘は1号墳と4号墳には区画溝が認められ、馬蹄形を呈しているが、2号墳と3号墳には特に明確な墳丘区画施設がなく、墳形も不整形である。いずれの古墳にも墳丘には盛土が認められなかった。

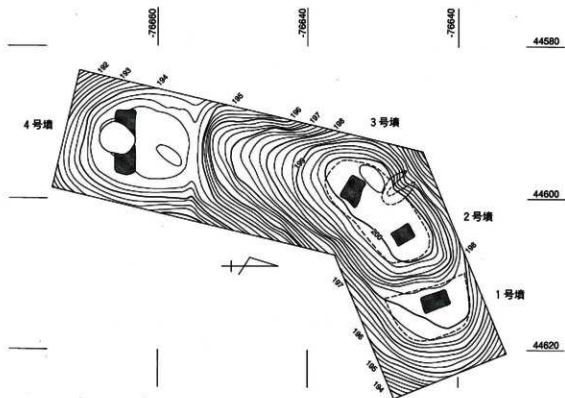
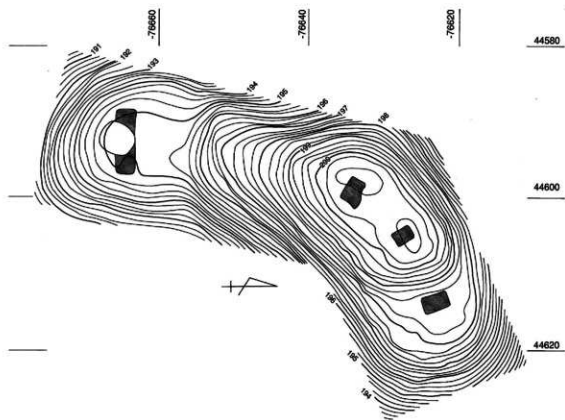
主体部は割竹形木棺1基、石棺3基があり、すべて一墳丘に一基ずつである。よって今回調査した主体部は合計4基になる。

出土遺物は、金属器、土器があり、金属器には鉄斧、鑿、剣、刀子、鉄鏃、ヤリガンナ、毛抜き状鉄製品、針状鉄製品がある。土器には須恵器・土師器がある。

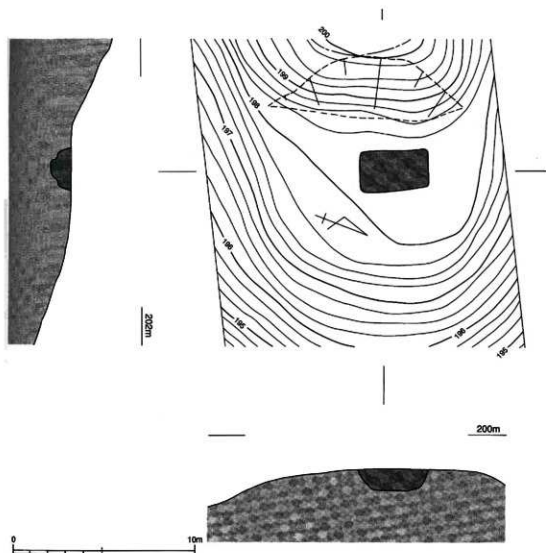
また、4号墳は中世に築造された一乗寺経塚により切られている（詳細は第5章参照）。



写真6 市条寺古墳群 調査前（北西から）



第92図 市条寺古墳群地形測量図（上：調査前、下：調査後）



第93図 市条寺1号墳丘測量図

## 第2節 市条寺1号墳

### 1. 概要

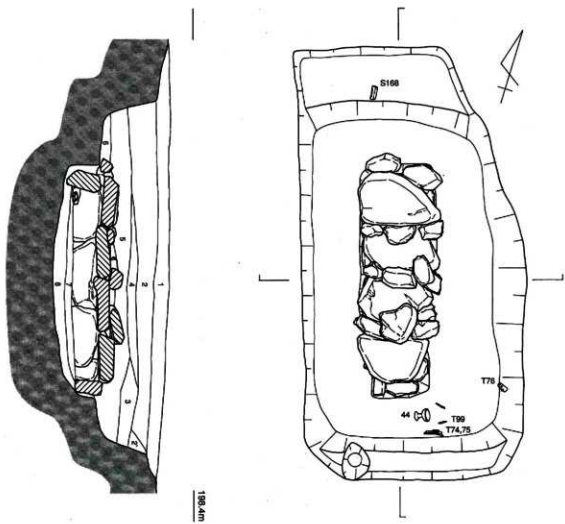
市条寺古墳群の中で北東側の端に位置する。主体部は1基のみで、箱式石棺が検出された。出土遺物は墓室内の埋土から土器（土師器高坏）、金属器（鉄鏃、ヤリガンナ、鉄斧、鏝、針状鉄製品）、石製品（白玉、砥石）が、石棺内から金属器（毛抜き、剣、鉄鏃）がそれぞれ出土している。

### 2. 立地

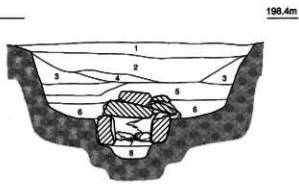
市条寺古墳群が立地する丘陵のうち、北東側に延びる尾根の先端に位置する。標高は198mである。この尾根の先は急斜面となっており、1号墳から先には古墳は築造されていない。他の古墳は南側に対する眺望が開けているのに対し、本墳は北東側の狭い谷にのみ視界が開けている。

### 3. 墳丘

尾根の先端に築造されており、山側を削っているため半円形を呈する。長さ7.30m、幅10.50m、高さ0.60mを測る。盛土は認められず、山を削ることにより平坦面をつくりだしているのみである。墳丘からは遺物は出土していない。

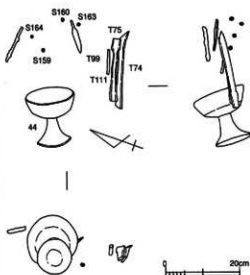


1. 黒灰褐色砂質土
2. 茶褐色砂質土 (黒褐色の斑点) 2' (やや明るい)
3. 茶褐色砂質土 (黒褐色の斑点多く、全体に暗い)
4. 赤褐色砂質土
5. 淡黄褐色砂質土 (白色粒多く混じる しまりやや弱い)
6. 褐色砂質土
7. 黄褐色砂質土
8. 淡黄褐色砂質土 (しまり弱)



第94図 市条寺1号墳第1主体部





第95図 第1主体部遺物出土状況

## 4. 第1主体部

石棺である。長軸方向は北から17°西に振っている。墓塚の長さ4.55m、幅2.40m、高さ0.80mを測り、平面形は隅丸の長方形である。墓塚の北側は浅い段があり、その段を除いた長さは3.7mを測る。墓塚の底は側石を据えるための掘り込みがあり、2段墓塚となっている。2段目の墓塚は石棺の身の外法と、長さ、幅、高さ、ともにほぼ同じである。

墓塚の埋土中から遺物が出土している。遺物は墓塚埋土のほとんど最上層から出土しており、墓塚がほとんど埋められた途中の段階で置かれたか、あるいは埋土が後世沈み込んだために

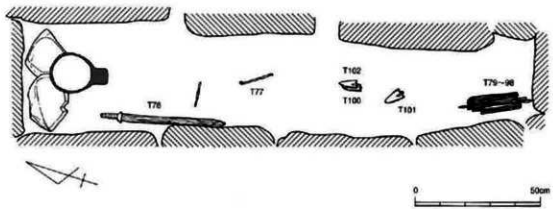
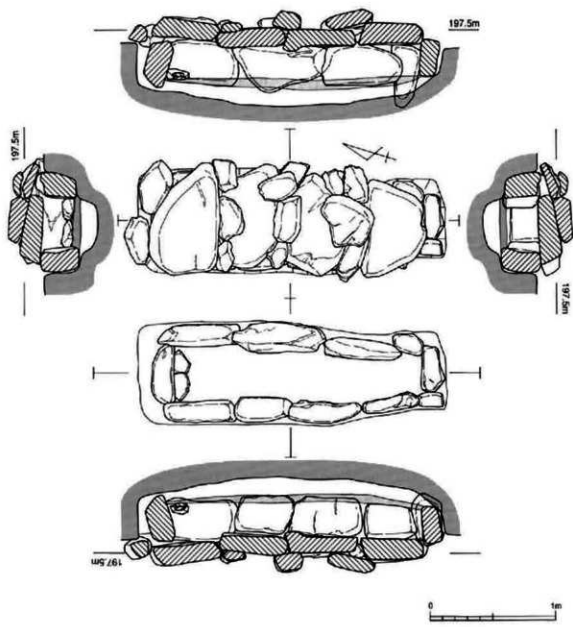
に墓塚検出面より若干下側から出土したのか明らかでない。遺物は墓塚の北端から砥石(S168)が出土し、南端からは玉、鉄製品、土器が出土した。玉は白玉(S159~167)、鉄製品はヤリガンナ(T74)、鏝(T75)、鉄斧(T76)、棒状鉄製品(T99)、針状鉄製品(T111)、土器は土師器高坏(44)がある。いずれも完形である。

玉は若干の高低差をもって約20cm四方に散在しており、その両側に棒状の不明鉄製品が、南側に他の鉄製品が置かれており、ヤリガンナと鏝は刃先を揃えて並べられていた。高坏は鉄器側に横転した状態で出土している。いずれの遺物も高低差が10cm程度と小さく、同じ段階で置かれたものと考えられる。特に高坏が横転している方向に玉が集中していることから、あるいは高坏内に玉が置かれていた可能性も考えられる。

石棺は内法で長さ2.04m、幅0.43m、高さ0.30m、外法で長さ2.35m、幅0.80mを測る。石棺は両小口に各1石、東側側石に4石、西側側石に5石を使用しており、いずれも1段で棺を構成している。小口板は長側石にはさみこまれているが、南東側の隅のみ逆になっている。蓋石は大型で平らな4石を中心とし、その隙間をやや小型の石でうめるようにして置かれている。よって部分的に2重になっているものの、基本的には蓋石は1重である。



写真7 市条寺1号墳埋土上層遺物出土状況



第96図 市泉寺1号墳第1主体部石棺、石棺内遺物出土状況



第97図 市条寺1号墳出土土物(玉)

また、棺内の北側には石枕が置かれている。石枕は、底のレベルが石棺内の遺物の下側より数cm下にあることから、棺内の置き上により埋め込まれていた可能性も考えられる。

石棺の底はさらに1段掘り込まれている。横断面は半月状を呈しており、全体に不整形な舟底状を呈している。この掘り込みは埋め戻され、その後、棺内に土が敷かれ、石枕が置かれている。

石棺内から銅1点、鉄鍔23点、毛抜き状鉄製品1点が出土した。銅は被葬者の右肩から腕にかけての位置に、切先を下に向けて置かれていた。鉄鍔は長頸式のもの(T79-98)が右足の外側で、先を足側に向け、石棺小口口に接するところに置かれていた。いずれも円筒状に錆び付いており、また、布痕がそれに沿って遺存していることから、長頸式のもの少なくとも先端には布が巻かれた状態で副葬された可能性が高い。短頸式のもの(T100-102)は逆に先端を頭側に向け、腹のあたりに鎌身が置かれていた。両型式の鍔は矢柄の存在を考慮すると、頭のを互いにした状態で、足もとの右側に置かれたものと考えられる。

なお石棺無石に赤色顔料が若干認められた。

#### 5. 出土遺物

玉類9点、鉄器30点、砥石1点、土師器1点が出土した。いずれも第1主体部に伴うもので、墓室内上層、石棺内から出土している。

#### 玉 類

白玉が9点出土している。S159-167は高さ2.05-3.3mmと幅があるのに対し、直径は4.70-4.85mmと比較的ままとまっている。大きさは平均で直径4.77mm、高さ2.73mm、孔径2.31mmを測る。いずれも側面に棱をもち、そろばん玉状を呈する。

#### 鉄 器

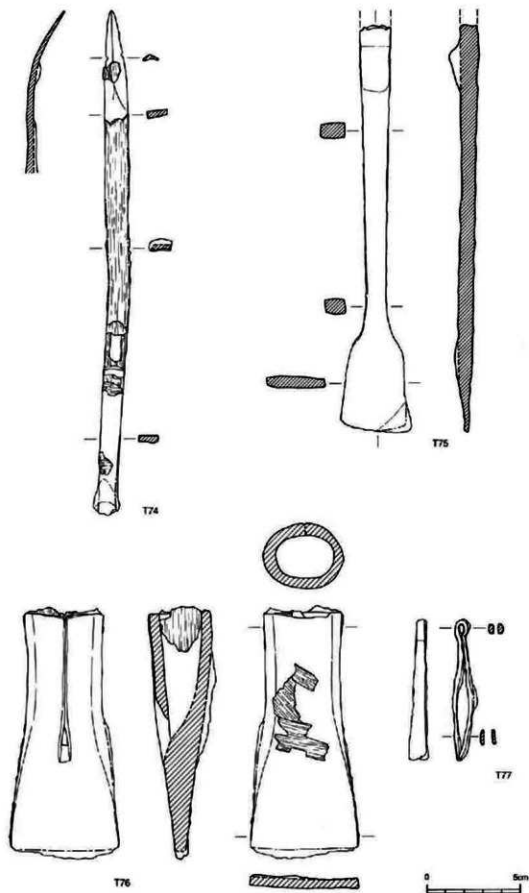
ヤリガンナ1点、鑿1点、鉄斧1点、毛抜き状鉄製品1点、銅1点、鉄鍔24本、針状鉄製品1点がある。

T74はヤリガンナである。全長26.5cm、刃部は長さ5.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、柄部は長さ21.1cm、幅1.2cm、厚さ0.7cmを測る。柄部には木質が認められ、刃部と反対側の木質は面がそろっている。よって、柄部には長さ18.8cmの木製の柄が装着されていたと考えられ、柄の頭は茎が約2.1cm程度突出していたものと推定できる。また、刃部にも一部木質が確認できる。

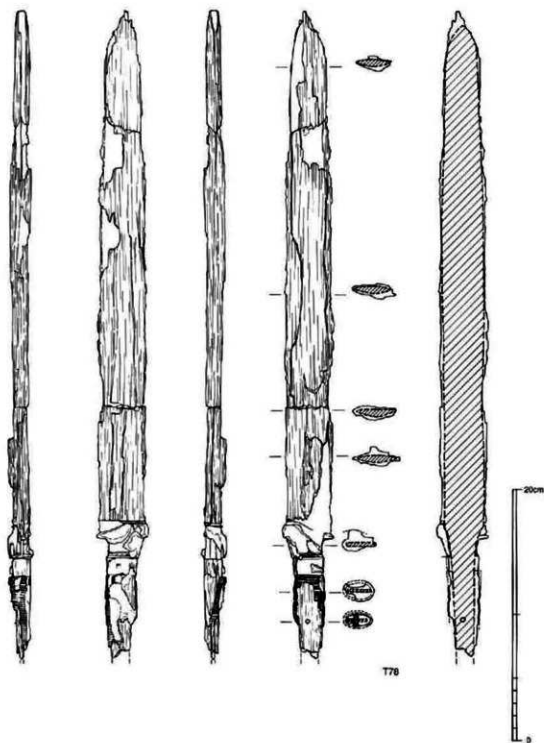
T75は鑿である。全長21.3cm、刃部は長さ5.2cm、幅3.7cm、厚さ0.6cmを測り、先端に向かって幅が若干広がっている。柄部は長さ16.1cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測り、幅は刃部に向かって狭くなっている。

T76は無肩の袋状鉄斧である。全長13.4cm、刃部は長さ6.5cm、幅5.8cm、厚さ0.8cmを測る。袋部は折り返しによって成形されており、断面形は横に長い楕円形を呈する。長さ7.8cm、幅4.3cm、厚さ3.5cmを測る。袋部から刃部にかけてなめらかに広がる。袋部内には木質が遺存しているほか、体部の外面にも木質が認められる。

T77は毛抜き状鉄製品である。全長7.4cm、先端の幅1.3cm、厚さ0.5cm、基部での幅0.8cm、厚さ0.5cmを測る。基部では径2mmの隙間をもって丸く曲げられており、一度接したのちさらに0.6cmの隙間をもって広がり、先端で再び狭まっている。先端部の幅は徐々に広がっている。

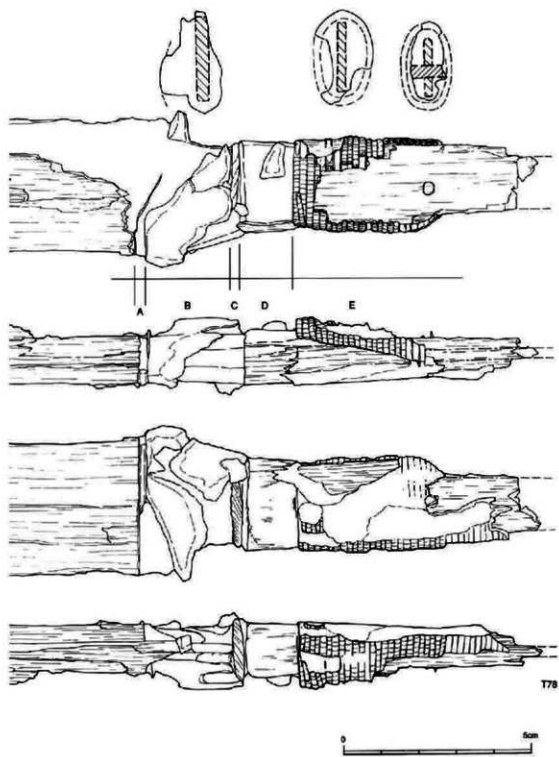


第96図 市来寺1号墳出土遺物（金属器1）

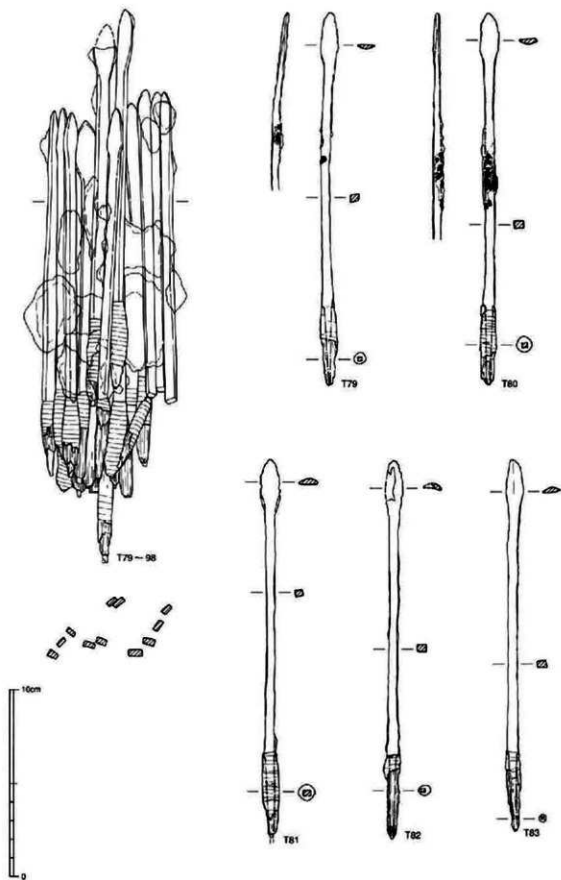


第99図 市条寺1号墳出土遺物（金属器2）

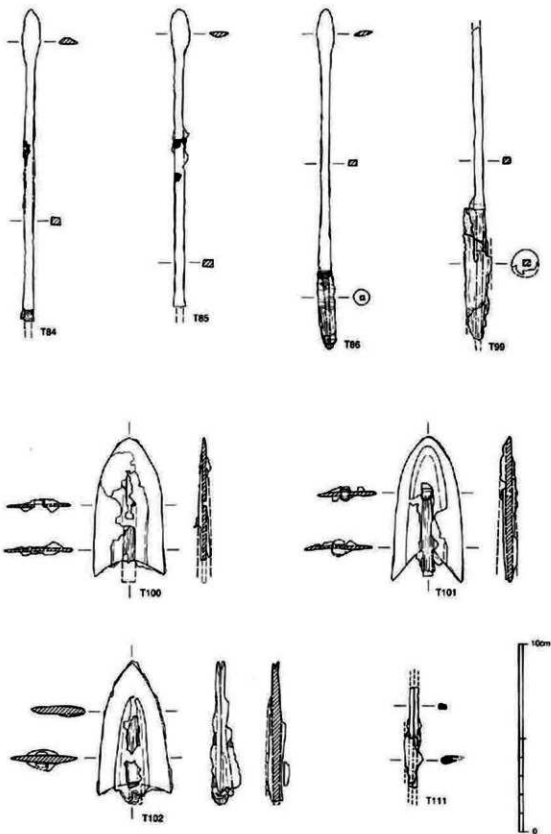
T78は剣である。全長50.9cm、刃部は長さ39.3cm、幅3.2cm、厚さ0.7cm、柄部は先端が欠損しており、現状で長さ7.9cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、を測る。刃部にはほぼ全面に木質が遺存しており、厚さは最大で0.6cmを測る。鞘縁から柄巻にかけてはA～Eの5つの部位に分けることができる（第100図参照）。Aは鞘の縁にあたるもので幅2mmの紐状の有機質が認められる。Bは鹿角と思われる有機質で、幅2.8cmを測る。腐食のため複雑な形態となっている。Cは幅3mmの紐状の有機質で黒色を呈す。Dは幅1.4cmの木質で、比較的平らである。Eは鞘で、柄木と柄巻からなる。柄巻は幅約2mmの有機質の紐状のも



第100図 市条寺1号墳出土遺物（金属器3）



第101图 市条寺1号墳出土遺物（金属器4）



第102図 市条寺1号墳出土遺物（金属器5）



のである（詳細は第7章第6節参照）。

T79～102は鉄鏝で、T79～99は長頸式、T100～102は短茎式である。

T79～98の鏝身形は柳葉形を呈しており、大きさは平均すると全長19.4cm、鏝身の長さ2.65cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、基部の長さ4.2cm、幅0.4cmを測る。T82の基部には糸が巻かれていた痕跡が観察できる。T86の筥袂部には矢柄の上に巻き付けられた糸が観察できる。T79・80・84・85の頸部には布痕が認められる。

T100～102の鏝身形は長三角形を呈しており、逆刺はT100・102が緩やかな弧を描いているのに対し、T101は直線的である。いずれの鉄鏝も鏝身と矢柄の接合部には外面から順に有機質、木質が認められる。また、T100・101には鏝身中央部に方形の小孔があり、そこから木質にかけて糸状の有機質が認められる。この糸状の有機質は鏝身と木質を固定するために小孔を通して巻き付けられていたものと思わ

れる。木質の外面に遺存する有機質については何であるのかは不明であるが、糸状の有機質と木質の上からさらに覆い、鏝身と矢柄との接合を補強するためのものであると思われる。

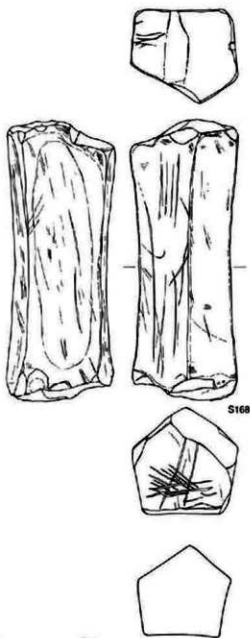
T111は径0.2cm、現存長5.4cmの針状の鉄製品が2本鑄着している。本来2本一組であったのか、錆のために付いているのかは明らかでない。この2本の針状鉄製品を巻き込むように有機質が付着している。直接遺物に伴うものか、あるいは入れられていた容器が付着したのかは明らかでない。

#### 石製品

S168は砥石である。断面形が五角形を呈しており、全長14.8cm、幅5.7cm、厚さ4.8cmを測る。いずれの長側面も中央が使用により摩滅しており、窪んでいる。端面は凹凸が多く、砥石としての成形時に付いたと思われる直線的な深いキズが認められる。

#### 土器器

44は高坏である。体部から口縁部にかけてゆるやかに湾曲し、境には明確な稜を残しておらず、若干接合時の段が残るのみである。坏部は内外面とも横ナアにより調整



第103図 市泉寺1号墳出土遺物（石製品）



第104図 出土遺物

され、内面には放射状のヘラミガキが喩文として施される。脚部は直線的な筒部からなめらかに大きく開いており、端部は丸くおさめている。外面の筒部には縦方向の調整が、裾部には指頭圧痕が認められ、内面には横方向のケズリが認められる。

### 第3節 市条寺2号墳

#### 1. 概要

今回調査した市条寺古墳群の中央で、最も高所に位置する。主体部は1基のみで、箱式石棺が検出された。出土遺物は須恵器（甕、高坏）、土師器（高坏）があり、いずれも墳丘から出土している。

#### 2. 立地

市条寺古墳群の中でも最も高所にあり、丘陵の鞍部に立地する。標高は200mである。1号墳より1段上に位置しており、東側に向かって下がっている。反対側の西側にある3号墳との間はほとんど高低差がない。

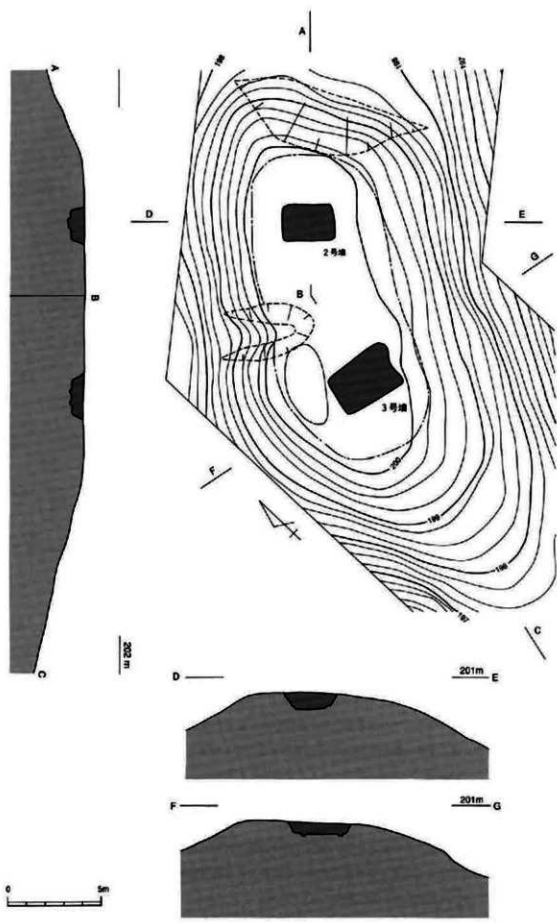
#### 3. 墳丘

丘陵の鞍部に築造されており、周囲を整形している可能性があるものの、ほとんど旧地形のままであり、盛土は認められない。東側は1号墳の区画溝のため直線的であるが、西側の3号墳との境には特に区画するような施設は認められない。唯一、北西側に溝状の窪みがあるが、不整形であり、古墳に伴うものかどうか明らかでない。溝状の窪みまでを墳丘の長さ、丘陵頂部の平坦面を墳丘の幅とすると、長さ7.8m、幅7.2mを測る。

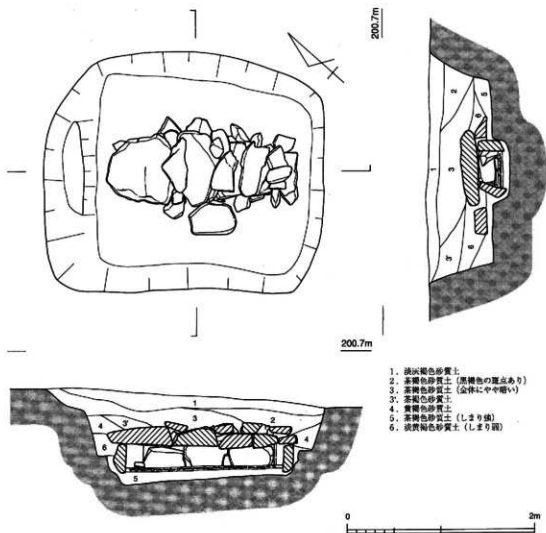
本墳から出土した遺物はいずれも墳丘から出土している。須恵器（甕、高坏）、土師器（高坏）が図示できた。2号墳の墳丘から3号墳の墳丘にかけて出土しているため、いずれの古墳に伴うかは明確にしがたいが、全体的にみて2号墳の墳頂から東側斜面にかけての場所からまとまって出土している。また、2号墳第1主体部の墓板上からも出土している。



写真8 市条寺2号墳第1主体部



第105図 市榮寺2・3号墳丘測量図



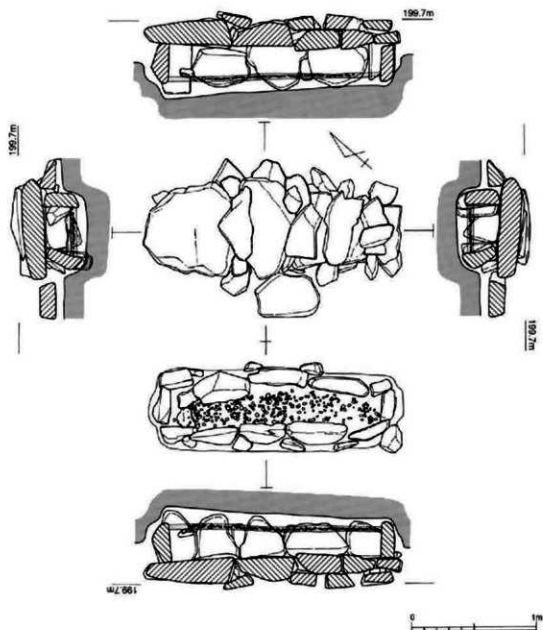
第106図 市条寺2号墳第1主体部

## 4. 第1主体部

石棺である。長軸方向は北から $41^{\circ}$ 西に振っている。墓墳の長さ3.00m、幅2.48m、高さ0.70mを測り、平面形は正方形に近い隅丸の長方形である。墓墳の北側は浅い段があり、その段を除いた長さは2.55mを測る。墓墳の底は側石を据えるための掘り込みがあり、2段墓墳となっている。2段目の墓墳は石棺の身の外法と、長さ、幅、高さ共にほぼ同じで、石棺の石材と2段目の墓墳の壁は接している。2段目の墓墳は石棺の半分ほどの深さで、石棺の半分は2段目の墓墳の上に出ている。2段目の墓墳から1段目の墓墳にはしまりの強い茶褐色砂質土（第5層）により埋められている。墓墳の埋土中から遺物は出土していない。

石棺は内法で長さ1.68m、幅0.38m、高さ0.23m、外法で長さ1.93m、幅0.60mを測る。石棺は両小口に各1石、北東側側石に5石、南西側側石に5石を使用しており、いずれも1段で棺を構成している。両小口石は長側石にはさみこまれている。長側石を構成する石材の表面には、石材の隙間をみさぐように細長い石材を立てかけている。さらに、長側石の表面には1段目の墓墳の底にも石材を平積みし、長側石を支えている。石棺内には小礫が敷かれている。

また、棺内の北西側には石枕が置かれている。石枕は棺内に敷かれた小礫の層より上にあり、礫が敷かれた後に置かれたことがわかる。



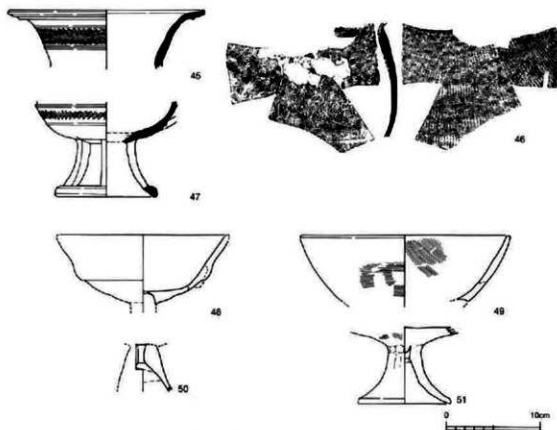
第107図 市来寺2号墳第1主体部石棺

蓋石は大型で平らな5石を中心とし、その隙間をやや小型の細長い石材でうめるようにして置かれている。よって部分的に2重になっているものの、基本的には蓋石は1重である。さらに小さな隙間を小型の石材で埋めている。蓋石の大きさは頭部側が最も大きく、足側に向かって順次小さくなる。

石棺内頭部付近に朱（詳細は第7章第5節）が認められた。

#### 5. 出土遺物

須恵器と土師器が出土しており、いずれも墳丘からの出土である。2号墳に伴うか、3号墳に伴うかは明らかでないが、全体に2号墳の墳頂から3号墳にかけての場所にまぎって出土している。



第108図 市条寺2・3号墳出土遺物（土器）

## 須恵器

甕・無蓋高坏が出土した。

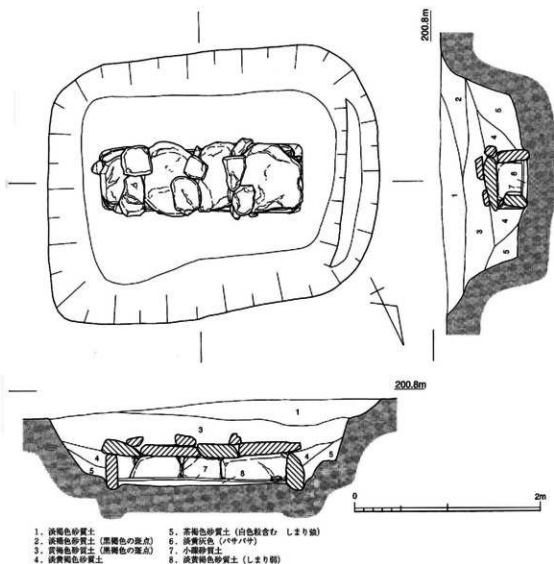
45・46は甕である。45は頸部から口縁部にかけての破片である。頸部は直線的に外傾しており、口縁部で大きく外反している。頸部には2条の鈍い突帯が巡らされ、その間に丁寧な波状文が巡らされる。口縁部の端部は平らで、外方を向いている。端部から若干下がったところにやや高い突帯が巡らされる。46は頸部付近の体部片である。外面は、縦方向の平行タタキの後にカキメが巡らされる。内面はナデ調整が認められ、あて具痕が消されている。

47は無蓋高坏である。体部外面には2条の突帯が巡り、その間には波状文が施される。下方の突帯から波状文にかぶるように把手が確認できる。脚部は幅広い筒部から端部にかけてゆるやかに開き、端部は丸みをもった面を外側に向けている。透かしは3方に復元できる。

## 土師器

高坏のみ確認できた。

48は高坏の坏部片である。体部から口縁部にかけてにぶい稜をもつ。口縁部は直線的に外傾しており、端部は丸くおさめる。調整は内面に斜め方向のハケメが確認できる。脚部が坏部に挿入されて接合されている。49は口縁部片である。ゆるやかに内彎しており、外面は横方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメが確認できる。50は脚柱部片である。坏部との接合部には成形時の縦方向に貫通する孔が認められる。51は脚部片である。ラッパ状に開いており、端部は外方に向いた面をもつ。坏部の底には、円筒の脚を挿入したことによってできた粘土のたるみが認められる。



第109図 市条寺3号墳第1主体部

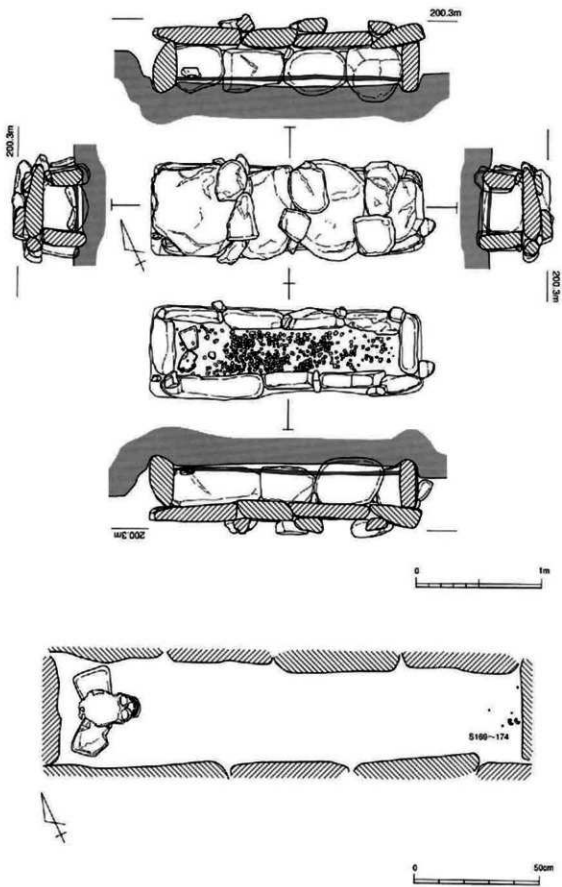
## 第4節 市条寺3号墳

### 1. 概要

市条寺古墳群の中央で、最も高所に位置する。主体部は1基のみで、箱式石棺が検出された。出土遺物は2号墳の墳丘から3号墳の墳丘にかけて全体に出土した須恵器（壺、高坏）、土師器（高坏）と、石棺内から出土した玉類がある。

### 2. 立地

市条寺古墳群の中でも最も高所にあり、丘陵の鞍部に立地する。標高は200mである。北東側にある2号墳との間にはほとんど高低差がない。反対側の南側には尾根が延びており、4号墳へと続いている。



第110図 市杵寺3号墳第1主体部石棺、石棺内遺物出土状況



### 3. 墳丘

丘陵の鞍部に築造されており、周囲を整形している可能性があるが、ほとんどは旧地形のままであり、盛土も認められない。南側はなめらかに尾根が延びており、墳丘を区画する施設は認められない。北東側の2号墳との境についても墳丘を区画するような施設は認められないが、唯一北西側に溝状の窪みがある。しかし、不整形であり、古墳に伴うものかどうか明らかでない。

溝状の窪みまでを墳丘の長さ、丘陵頂部の平坦面を墳丘の幅とすると、長さ6.6m、幅6.0mを測る。

墳丘から遺物が出土しているが、本墳に属するものか2号墳に属するものか明らかにできない。

#### 4. 第1主体部

石棺である。長軸方向は北から65°西に振っている。墓壇の長さ3.59m、幅2.80m、高さ0.86mを測り、平面形はやや不整形な隅丸の長方形である。墓壇の北西側は浅い段があり、その段を除いた長さは3.22mを測る。墓壇の底は側石を据えるための掘り込みがあるが、石材を据える部分のみで浅い。そのため、石棺側石は淡黄褐色砂質土（第4層）、およびしまりの強い茶褐色砂質土（第5層）を裏込めとして支えられている。墓壇の埋土からは、遺物は出土していない。

石棺は内法で長さ1.85m、幅0.35m、高さ0.25m、外法で長さ2.12m、幅0.71mを測る。石棺は両小口に各1石、北側側石に4石、南側側石に4石を使用しており、いずれも1段で棺を構成している。両小口石は長側石にはさみこまれているが、東隅のみは逆になっている。長側石を構成する石材の裏側には、石材の隙間をふさぐように細長い石材を立てかけている。側石の上側にも隙間に小型の塊石を置いている。石棺内には小礫が敷かれている。

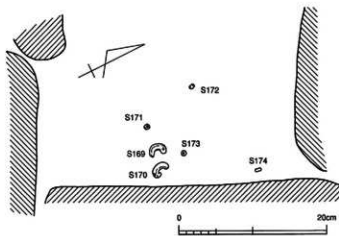
また、棺内の北西側には石枕が置かれている。石枕は棺内に敷かれた小礫の層より上にあり、礫が敷かれた後に置かれたことがわかる。

石棺内から勾玉2点、ガラス玉7点が出土しており、いずれも棺内の南側、すなわち足側に副葬された。

蓋石は大型で平らな4石を中心とし、その隙間をやや小型の偏平な石材でうめるようにして置かれている。よって部分的に2重になっているものの、基本的には蓋石は1重である。さらに小さな隙間を小型の石材でうめている。

なお、石棺側石に赤色顔料が若干認められた。

#### 5. 出土遺物

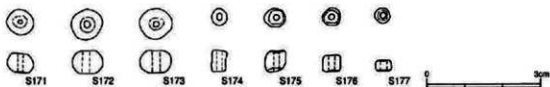
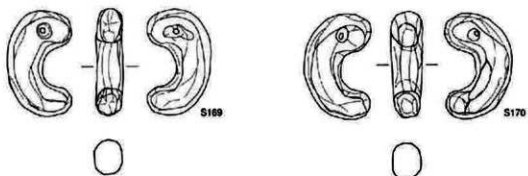


第111図 石棺内遺物出土状況

玉類が9点、石棺内から出土している。墳丘からは土器が出土しているが、2号墳の墳丘出土遺物と区別できないため、2号墳出土遺物に合わせて報告している。

#### 玉類

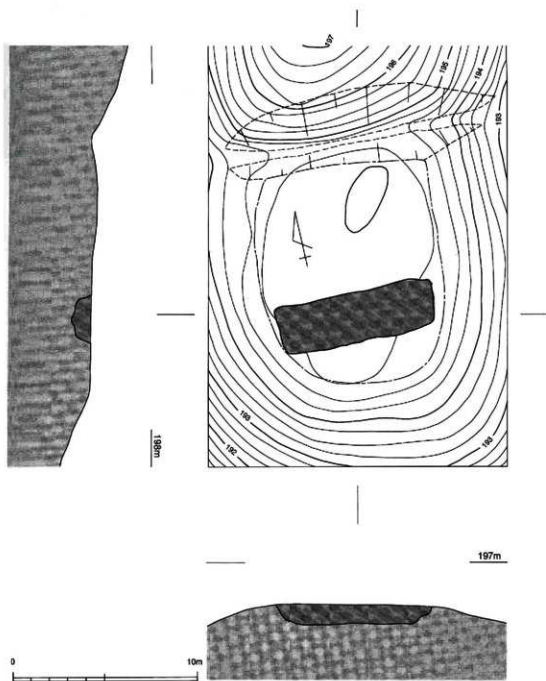
勾玉が2点、ガラス製丸玉が3点、ガラス製小玉が4点出土した。S169とS170は琉璃製勾玉である。「コ」字形を呈しており、縦方向に滑らかな成形痕が認められる。



第112図 市条寺3号墳出土遺物(玉)

断面形はやや長細い円形を呈している。穿孔は両側から行われている。

S171～173はガラス製丸玉である。胴部が膨らんでおり、平均の大きさは直径0.78cm、高さ0.58cm、孔径0.13cmを測る。色調は藍色を呈す。S174～177はガラス製小玉である。丸玉よりやや小型で、平均の大きさは直径0.46cm、高さ0.45cmを測る。色調は青緑色を呈す。



第113図 市条寺4号墳丘測量図

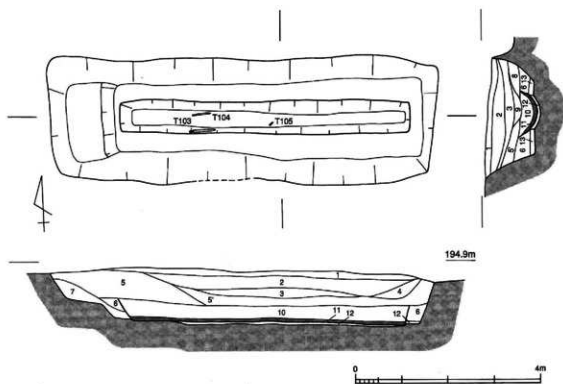
## 第5節 市条寺4号墳

### 1. 概要

南に延びる尾根の先端に位置する。主体部は1基のみで、割竹形木棺が検出された。出土遺物は棺内から鉄製品(剣・刀子)が出土した。主体部の中央には、中世に一乗寺経塚が造営されており、墓墳が切られている。

### 2. 立地

市条寺古墳群の丘陵から南に延びる尾根の先端に位置する。標高は195mである。北側にある3号墳



- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 赤褐色砂質土（土壌化）</li> <li>2. 淡灰褐色砂質土（やや濃い）</li> <li>3. 淡灰褐色砂質土</li> <li>4. 赤褐色砂質土</li> <li>5. 明褐色砂質土（堆山ブロック状になる）</li> <li>6. 明褐色砂質土（しまり藪）</li> <li>7. 明褐色砂質土（堆山を覆いもどしたもの）</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>8. 赤褐色砂質土（しまり藪）</li> <li>9. 淡灰褐色砂質土（しまり藪）</li> <li>10. 淡灰褐色砂質土（しまり藪）</li> <li>11. 明赤色砂質土（木根、朱のため赤い、遺物はこの上から）</li> <li>12. 赤褐色砂質土（棺をすえるための敷土上?）</li> <li>13. 灰白色砂質土（堆山上に均一にみられる7層と同一? 棺を安定させるためのしまり藪の敷地層?）</li> </ol> |
|---|---|

第114図 市条寺4号墳第1主体部

とは約30m離れており、5mの比高差がある。古墳が立地する尾根は、4号墳より南側には近づかず、崖状に切り立っているため、南側への眺望はよい。

### 3. 墳丘

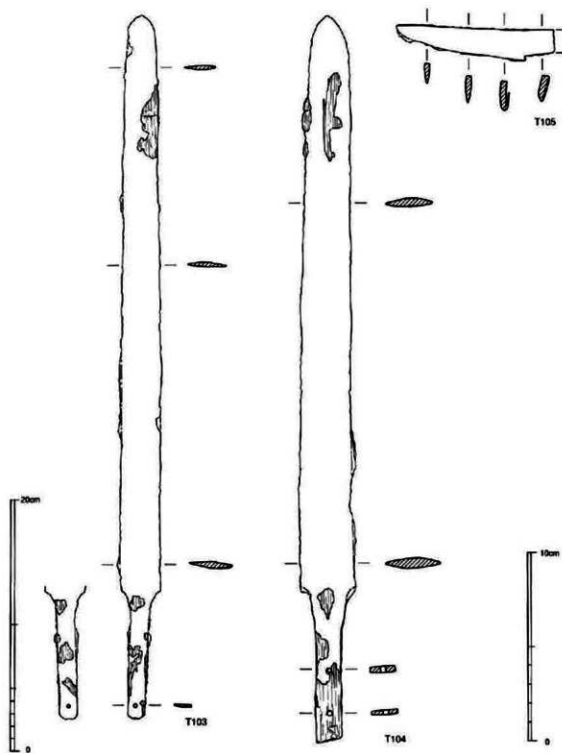
尾根の先端で、尾根の高い側を削ることによって平坦面をつくり出している。規模は長さ11.7m、幅9.9m、高さ0.4mで、長軸方向は北から5°東に振っている。盛土は認められない。北側には区画溝が認められ、規模は長さ14.8m、上幅4.1m、下幅0.3m、高さ1.6mを測る。

墳丘からは経塚に伴う遺物が出土しているが、古墳に伴う遺物は出土していない。

### 4. 第1主体部

割竹形木棺である。墳丘のやや南側に偏って築かれる。長軸方向は北から88°東に振っており、尾根に直交している。墓壇の規模は、長さ8.30m、幅2.54m、深さ0.84mを測り、平面形は長細い隅丸の長方形である。墓壇底には棺を据えるための浅い掘り込みが墓壇の東側に寄ったところにあり、墓壇底西側にはテラス状の空間が認められる。規模は木棺より若干大きく、長さ5.92m、幅0.70m、深さ0.14mを測る。木棺はこの中に置かれているが、浅いため、木棺のほとんどはこの掘り込みの上に出ている。墓壇内からは遺物は出土していない。

木棺は長さ6.20m、幅0.84m、高さは現状で0.46mを測る。断面形は半月形であり、割竹形木棺と考えられるが、舟形木棺である可能性もある。割竹形木棺であれば高さは約80cmに復元できる。第11層は



第115図 市条寺4号墳第1主体部出土遺物（金属器）

朱が認められ、木棺には朱が塗布されていたことがわかる（朱の詳細は第7章第5節を参照）。木棺は、浅い掘り込みの中に据えられ、第12・13層が木棺の底と周囲に均一に置かれ、さらに第6・7層が棺の表込めとして置かれている。

木棺内からは鉄製品の短剣2本と刀子1本が出土している。短剣は木棺のやや西側で、剣先を東に向けて両脇に置かれていた。刀子は棺のはば中央で、先を北東に向けて置かれていた。

## 5. 出土遺物

鉄器が3点、木棺内から出土した。

### 鉄 器

剣が2点、刀子が1点出土した。

T103は剣である。全長55.5cm、刃部は長さ45.5cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm、茎部は長さ9.7cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。刃部には部分的に木質が遺存する。柄部にも木質が遺存しているが、木目方向の異なる木質も存在する。柄部には目釘孔が茎尻から1.1cmのところ認められる。闘は鈍角である。

T104は剣である。全長38.5cm、刃部は長さ30.5cm、幅2.9cm、厚さ0.6cm、柄部は長さ7.2cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。刃部、柄部ともに木質が認められる。目釘孔が茎尻から1.5cmと3.8cmの2か所に認められる。闘は鈍角である。

T105は刀子である。茎尻が欠損しており、全体の形状は不明であるが、現状で全長8.4cm、刃部の長さ6.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、茎部の現存長1.6cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。

## 第6節 小 結

市条寺古墳群は12基からなる古墳群で、独立丘陵上に立地し、他の古墳とは隔離された位置にあるといえる。今回はそのうち4基を調査した。いずれも中期に築造されたものと考えられる。

墳丘は、1号墳、4号墳が尾根の上側に区画溝を設け、平らな面を削り出しているが、2号墳・3号墳は区画溝が存在せず、特に整形されたような痕跡はなく、自然丘陵をそのまま利用している。主体部は石棺3基、木棺1基の計4基で、いずれも一墳丘に一主体部である。

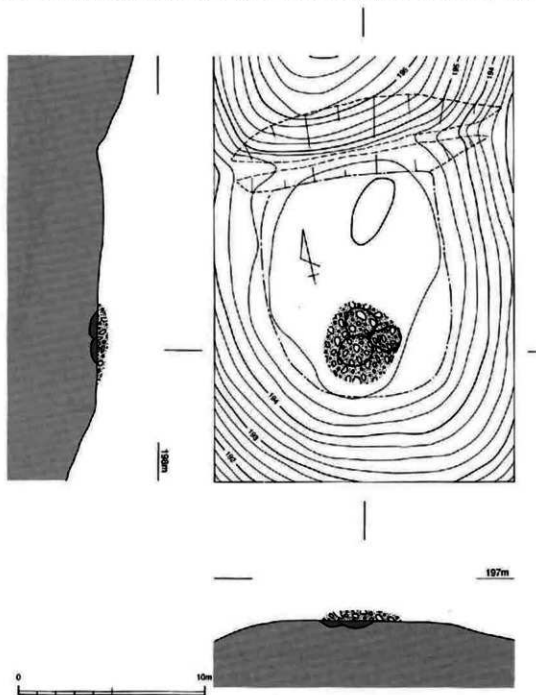


写真9 一乗寺経塚から乳ノ木庵を望む

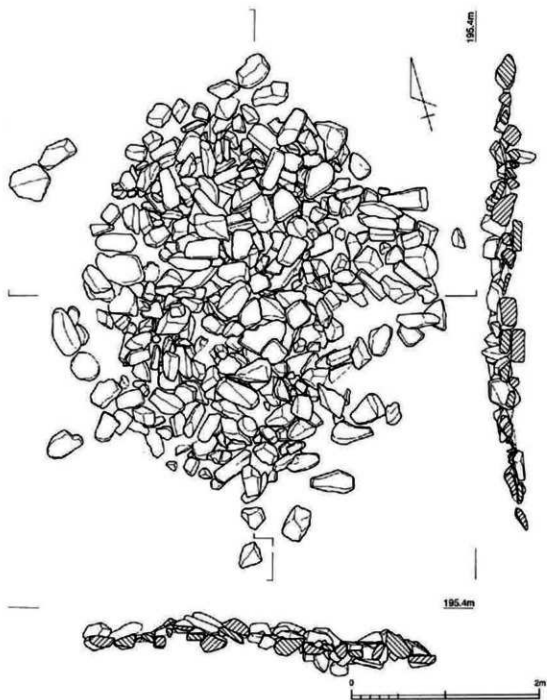
## 第5章 一乗寺経塚の調査

### 第1節 概要

殿宇市条寺に位置する。市条寺4号墳の墳丘平坦面を利用し、その南端中央部に築造されている。現在の字名は「市条寺」の漢字が当てられているが、経塚付近にある乳ノ木庵には、乳ノ木庵を造営するにあたっての山嶺などを記した札があり、そこには「一乗寺」の文字が使用されている。また、明治36



第116図 一乗寺経塚地形測量図

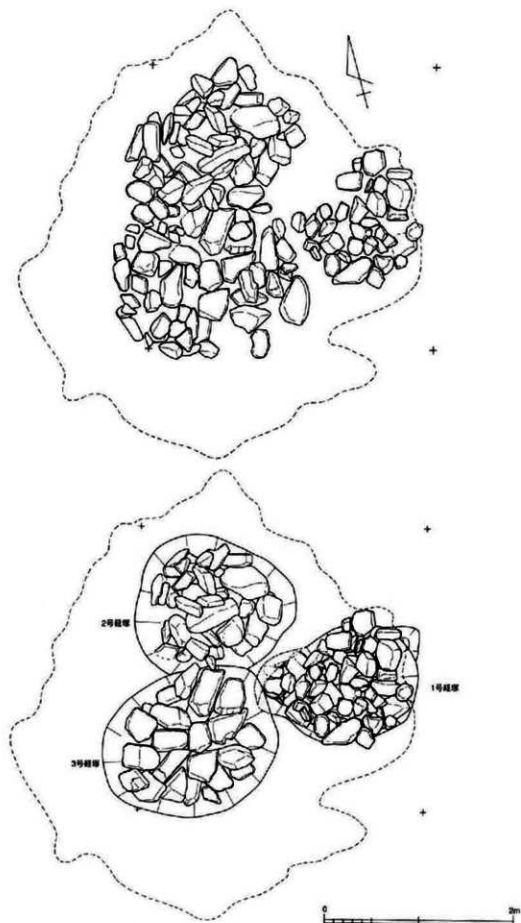


第117図 一乗寺経塚平面図（上層）

年に刊行された『朝來志』にも「一乗寺」との記述がある。今回調査した経塚はこの一乗寺という寺との関係で考えられるため、ここでは、より本来的な「一乗寺」の漢字を使用し、一乗寺経塚として報告する。

経塚は花卉状に配された3基の独立した経塚からなり、多数の石が全体を覆い墳丘状に盛り上げられて一体となっている。いずれも埋納坑と埋納主体をもち、埋納坑は石を充填して埋め戻されている。東側の経塚から反時計回りに1号経塚、2号経塚、3号経塚と呼ぶ。それぞれの埋納主体は1号経塚が土師質外容器、2号経塚が土師質外容器を被せた青銅製経筒（経巻一部残存）と土師質外容器、3号経塚が須恵器甕である。





第116図 一栗寺経塚平面図（中層・下層）

3号経塚の埋納主体が埋納坑の中央に位置するのに対して、1号経塚と2号経塚では埋納主体は埋納坑の片隅に位置し、1号経塚では南側、2号経塚では西側というように3基の経塚の中心部を意識している。3号経塚にしても埋納坑の主軸は中央部を向いており、やはり中心への意識がうかがえる。

3号経塚の埋納坑は他の経塚の埋納坑と重なる。重なり合う範囲が狭いため互いの前後関係は断定できないが、3号経塚が1号・2号経塚よりも新しいと推定される。

各経塚や封石内からは土師器小皿や鍋、銅銭などが出土し、上方の尾根周辺からも土師器小皿や須恵器壺が出土している。また、麓の乳ノ木庵周辺からも遺物を採集している。

なお、経筒・経巻が確認されたのは2号経塚のみであり、他は経塚と即断できる十分な根拠は無い。墓跡などの可能性も考慮されるが、いずれからも骨片がまったく出土していないことから、ここでは経塚として報告する。

## 第2節 立地

市条寺4号墳の墳丘は南へ長く延びる舌状の平坦面をもつ。経塚はその南端にあり、尾根のはほぼ中軸線上に位置するが、その場所は偶然にも市条寺4号墳の主体部の位置と重なっている。尾根先端に位置するため経塚からは南の眺望が開け、安井、殿の集落が一望できる。標高は約200mである。

## 第3節 封石とその周囲

### 1. 遺構

3基の経塚を覆うように封石が行われていた。全体の平面形は歪な円形を呈し、東西約4.6m、南北約4.0m、高さ0.4mを測る。石は2～3段に積み上げられ、中央部付近が高く盛り上げられている。この段階では下部の3基の経塚はまったく確認できず、石積みが経塚全体を覆うことを意識して積まれたことがわかる(第117図)。積み上げられた石を除去してゆくと、残った石が3単位に分かれ始め(第118図上)、さらに、地山上の石をすべて除去し、地中に埋まり込んだ石だけを残すと花卉状に配された3基の経塚が姿を現した(第118図下)。封石に使用された石材は長さで10～50cmほどの河原の転石である。

封石の間隙からは土師器鍋(91)、須恵器壺(92)や、土師器片が出土している。91の破片は3号経塚埋納坑内、92は2号経塚石積み内からも出土している。2号経塚の土師質外容器蓋(57)の破片も封石の間隙に散らばって出土している。

また、経塚北側の平坦面や市条寺2・3号墳の立地する尾根上からは広範囲に散らばって土師器小皿(63～90)が出土している。

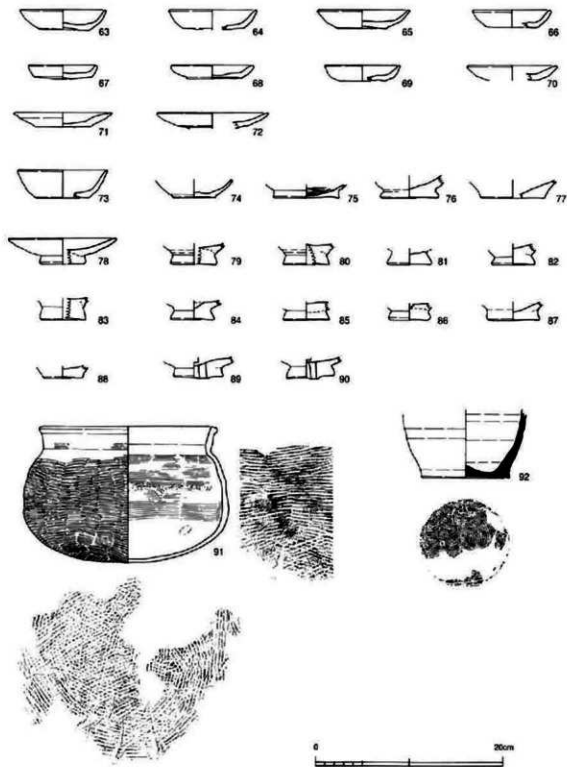
### 2. 出土遺物

土師器小皿11点(63～72・78)、椀2点(73・74)、底部片15点(75～77・79～90)、鍋(91)、須恵器壺(92)が出土した。

#### 土師器

小皿、椀、底部片、鍋がある。

小皿は口径7.2～11.7cm、器高1.45～2.20cmを測る。底部調整は67が指頭瓦痕、71がヘラ切り、69・



第119図 一乗寺経塚封石及び周辺出土遺物

70・72が不明、それ以外はいずれも回転糸切りである。器高が高く坏に近い形態の63、口縁部のみ短く屈曲させるだけの67、浅い71など、器高、体部の傾きなど個体差が著しい。

また、78のように高い平高台をもつものもある。体部と底部は接合され、底部は回転糸切り、体部は丁寧な回転ナデである。

碗は73・74がある。73は器高が高く、底径も大きいため、坏状を呈する。調整は増減のため不明であ

る。74は底部のみの残存であるが、体部の傾きから碗であると考えられる。調整は磨滅のため不明であるが、底部は回転糸切りと思われる痕跡がある。

底部片は75~77・79~90があり、低い平高台をもつものと、高い平高台をもつものがある。前者は底径6.30~7.05cmを測る。77は不明であるが、それ以外は回転糸切りである。75は内面にミガキが認められる。後者は底径4.35~5.60cmを測る。底部は86と89が不明であるが、他はいずれも回転糸切りである。また、89・90は5~8mmの焼成前の穿孔がある。それに伴って外側は若干膨らんでいる。高い平高台をもつものは、78のように小皿に復元できたものがある。

鍋は91がある。やや下膨れの体部で、口縁部へと緩やかに彎曲する。口縁部は外方へ低く三角形に張り出す。調整は体部外面が横方向の平行タタキ、内面は下半が指頭圧痕ののちナデ、上半が横方向のハケ目である。ハケ目の下側にはハケ目が施される以前のあて具痕が観察でき、わずかに同心円文と思われるような痕跡がぶく残されている。

#### 須恵器

壺がある。

壺(92)は底部から体部にかけてのみ残存する。底部は平らで、体部はやや外傾しながらゆるやかに彎曲する。底部外面は回転糸切り、または回転ナデによって調整される。体部内面にはナデによる凹凸が観察でき、底部内面の中央には山状の高まりが残される。

## 第4節 一乗寺1号経塚

### 1. 遺構

埋納坑の平面形は歪な釣り鐘形を呈し、長さ1.70m、幅1.20m、深さ0.55mを測る。長軸方向は北から76°西に振っており、尾根筋と直交する。突出した部分を尾根の中心に向け、その一端は3号経塚の埋納坑と重なっている。重なりが少ないため断定的なことは言えないが、3号経塚に切られている可能性が高い。

横断面形は碗形、縦断面形をみると突出した部分がわずかにオーバーハングし、その下が最も深く掘られている。そこから東へむかって緩く弧を描いて立ち上がる。オーバーハングした部分は底部分が落下している可能性があり、本来の埋納坑の形態は、歪な楕円形の壜穴を尾根の中心に向かって次第に深くなるように掘り、その奥壁に間口70cm、奥行き40cm、高さ50cmの小さな横穴を穿ったものと推定される。

埋納坑の横穴状に奥まったところには円筒形の土師質外容器(53)が直立して安置されていた。外容器には割れた壺(52)が被せられ、その上に大きめの板石を置いて隙間を塞いでいた。壺の破片は外容器の脇に落下していたが、摘み部だけは外れて埋納坑の底部中央付近の石の間から出土した。

外容器の右脇には2枚の板石を立て、手前側は比較的大きな4石で低く塞いでいる。こうして外容器をしっかりと囲い込んだ後は、埋納坑全体に石を詰めて埋め戻している。石は埋納坑の壁にはは接しており、埋め戻す際に土は入れなかったと想定される。ただし、外容器の上には石は置かず、土を入れて埋めたか、そのまま空間としていたのであろう。

埋納主体である土師質外容器の中には土の流入は極めて少なかったが、経筒や経巻の存在をうかがわせるものはまったく存在せず、ほとんど空洞に近かった。

埋納坑を埋めた石の間の比較的深い位置からは土師器小皿(54・55)が出土している。